

秋田県文化財調査報告書 第137集

国営能代開拓建設事業 埋蔵文化財発掘調査

# 上の山II遺跡第2次発掘調査報告書

秋田県埋蔵文化財センター

1986. 3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

## 序

米代川は能代市で日本海に注ぎ、古くから県北の大動脈としての役割を果し、またその下流域には広大な台地が形成されております。

国営能代開拓建設事業は昭和51年にこの台地を対象に開始され、開田などの事業が実施されました。この事業予定地には多くの遺跡の存在が確認されており、秋田県教育委員会では本年度事業区域内に所在する上の山Ⅱ遺跡について、工事に先立って記録保存のための発掘調査を行いました。その結果、平安時代の竪穴住居跡と土壇のほか掘立柱建物跡、溝、そして土師器、須恵器、緑釉陶器などの遺物が数多く出土しました。

本報告書はこの調査成果を収録したものであり、今後の郷土の歴史研究と文化財保護に広く活用されることを望むものであります。

最後に、この調査に御協力いただきました東北農政局能代開拓建設事業所、秋田県能代地区土地改良区、能代市教育委員会、浅内地区自治会をはじめ関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和61年3月31日

秋田県教育委員会

教育長 齋藤 長

## 例 言

1. 本報告書は国営能代開拓建設事業に伴う上の山Ⅱ遺跡の第2次発掘調査報告書である。
2. 本報告書作成については下記の方々から御教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。  
(敬称略)

京都市埋蔵文化財研究所 梅川 光隆

山本郡八森町立観海小学校教諭 工藤 英美

3. 本報告書の作成にあたり、第2章、第4章第1節の1と第2節の1については児玉準が執筆し、その他の章節の執筆は熊谷太郎が行った。
4. 第5章第1節の「火山灰分析」については、群馬大学教育学部教授新井房夫氏にお願いした。
5. 土色の色調の表記は(財)日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』に拠った。
6. 本報告書に使用した地図は建設省国土地理院発行50,000分の1、東北農政局能代開拓建設事業所調整1,000分の1地形図である。
7. 本文と実測図に使用記載した略記号は、下記のとおりである。

SI・・・竪穴住居跡

SB・・・掘立柱建物跡

SK・・・土壌

SKT・・・陥し穴状遺構(Tピット)

SD・・・溝

SR・・・土器埋設遺構

# 目 次

序

例言

第1章	はじめに	1
第1節	発掘調査に至るまで	1
第2節	調査の組織と構成	1
第2章	遺跡の立地と環境	3
第1節	遺跡の立地	3
第2節	歴史的環境	5
第3章	発掘調査の概要	8
第1節	遺跡の概観	8
第2節	調査の方法	8
第3節	調査の経過	8
第4章	調査の記録	13
第1節	縄文時代の遺構と遺物	13
1	土器埋設遺構	13
2	遺構外出土遺物	13
(1)	土器	13
(2)	石器	13
第2節	平安時代の遺構と遺物	14
1	竪穴住居跡	14
2	土墳	66
3	遺構外出土遺物	72
(1)	土師器・須恵器	72
(2)	土製品	72
(3)	石製品	78
(4)	鉄製品	78

第3節 その他の時代の遺構と遺物	82
1 掘立柱建物跡	82
2 陥し穴状遺構	94
3 溝	96
4 遺構外出土遺物	96
(1) 青磁	96
第5章 理化学的分析	99
第1節 火山灰分析	99
第6章 まとめ	101

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺地形図・遺跡位置図	第2図 地形区分図	4
第3図 地形分類図	第4図 遺跡地形・調査区位置図	7
第5図 遺跡土層図	第6図 遺跡分布図	11・12
第7図 SR01実測図	第8図 SI01・SI02実測図	15・16
第9図 SI01出土遺物	第10図 SI02出土遺物	18
第11図 SI03実測図	第12図 SI03出土遺物	21
第13図 SI04実測図	第14図 SI04出土遺物	23・24
第15図 SI05実測図	第16図 SI05出土遺物	28
第17図 SI06実測図	第18図 SI06出土遺物	30
第19図 SI07・SI08・SB10実測図	第20図 SI07・SI08出土遺物	35
第21図 SI09実測図	第22図 SI09出土遺物	39
第23図 SI10・SK36・SK37実測図	第24図 SI10出土遺物	41・42
第25図 SI11実測図	第26図 SI12実測図	46
第27図 SI13実測図	第28図 SI11・SI12・SI13出土遺物	50
第29図 SI13出土遺物	第30図 SI14実測図	53
第31図 SI15実測図	第32図 SI15出土遺物	55
第33図 SI16実測図	第34図 SI17実測図	59
第35図 SI18出土遺物	第36図 SI19実測図	61・62
第37図 SI19出土遺物(1)	第38図 SI19出土遺物(2)	65
第39図 SK01～SK05実測図	第40図 SK06～SK08実測図	74
第41図 SK09～SK14実測図	第42図 SK15～SK20実測図	76

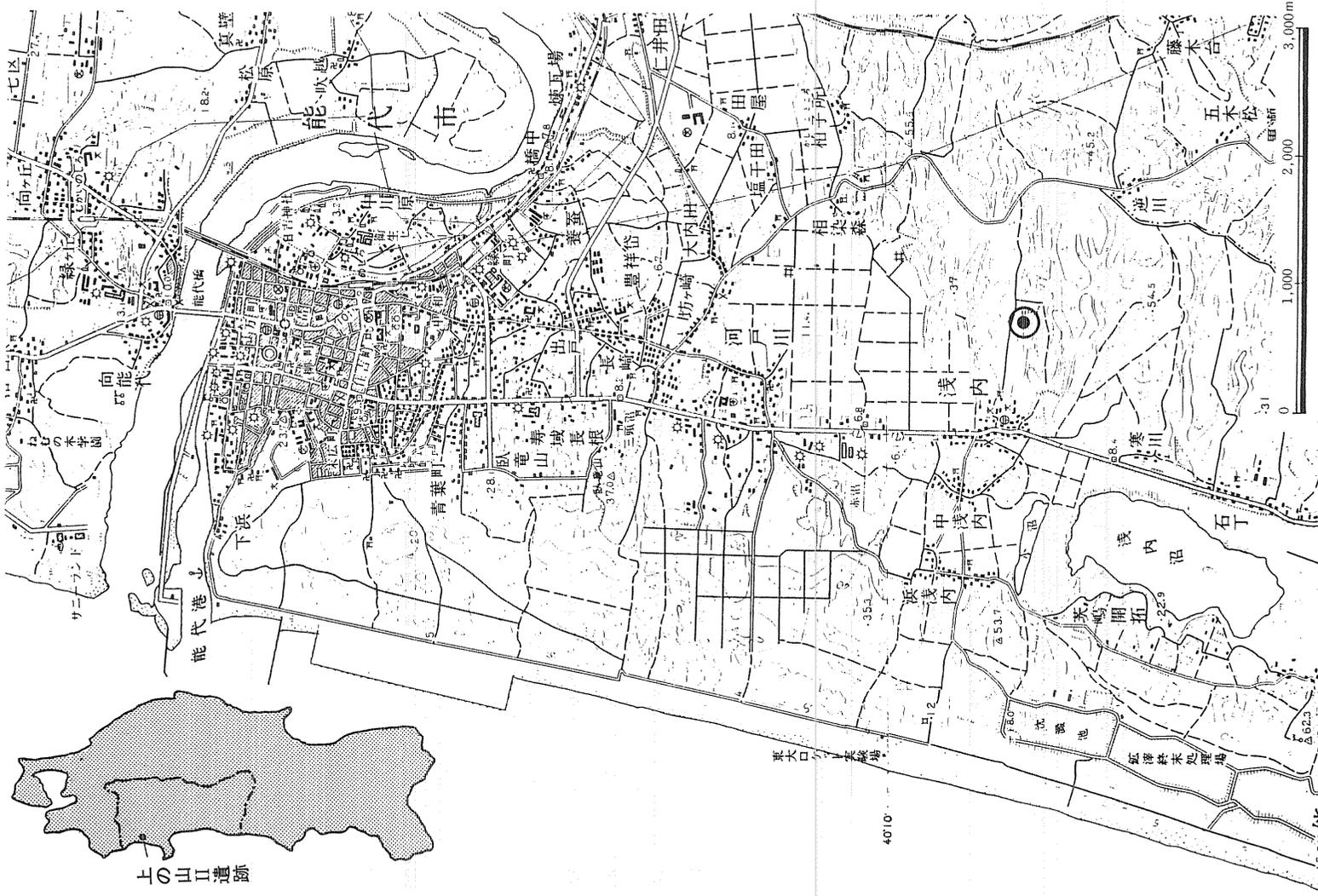
第43図	SK21・SK23～SK27実測図……………77	第44図	SK28～SK31・SK34 SK39・SK40実測図……………78
第45図	SK41・SK44～SK47実測図……………79	第47図	土壙出土遺物(2)……………81
第46図	土壙出土遺物(1)……………80	第49図	SB03実測図……………86
第48図	SB01・SB02実測図……………85・84	第51図	SB05・SB06実測図……………89
第50図	SB04実測図……………87	第53図	SB08・SB09実測図……………91
第52図	SB07実測図……………90	第55図	SB05～SB10模式図……………93
第54図	SB01～SB04模式図……………92	第57図	SD01～SD15・SD07実測図……………95
第56図	SK T 01・SK T 02実測図……………94	第59図	遺構外出土遺物……………98
第58図	遺構外出土遺物……………97		
第60図	SI09・SI16から検出された火山灰の火山ガラス顕微鏡写真……………100		

## 表 目 次

第1表	SB01柱穴計測表……………82	第2表	SB02柱穴計測表……………82
第3表	SB03柱穴計測表……………85	第4表	SB04柱穴計測表……………85
第5表	SB05柱穴計測表……………88	第6表	SB06柱穴計測表……………88
第7表	SB07柱穴計測表……………88	第8表	SB08柱穴計測表……………88
第9表	SB09柱穴計測表……………90	第10表	SB10柱穴計測表……………90
第11表	上の山II遺跡火山灰分析結果表 100		

## 図 版 目 次

図版1	上の山II遺跡周辺地形(航空写真)	図版2	SI01・SK44・SI19出土遺物
図版3	遺跡遠景	図版4	調査風景
図版5	調査区現況・遺跡全景	図版6	遺跡全景
図版7	SI01～SI04・SI17・19竪穴住居跡	図版8	SI04～SI08竪穴住居跡
図版9	SI09・SI10竪穴住居跡	図版10	SI11～SI13竪穴住居跡
図版11	SI14～SI19竪穴住居跡	図版12	SB01～SB09掘立柱建物跡
図版13	SK03～SK08土壙	図版14	SK09～SK27土壙
図版15	SK29～SK39土壙・SR01土器埋設 SK T 01～SK T 02陥し穴状遺構	図版16	竪穴住居跡出土遺物
図版18	竪穴住居跡・土壙出土遺物	図版17	竪穴住居跡出土遺物
図版20	遺構外出土遺物	図版19	竪穴住居跡出土遺物 遺構外出土遺物



第1図 上の山II遺跡周辺地形図・遺跡位置図

# 第1章 はじめに

## 第1節 発掘調査に至るまで

東北農政局によりおこなわれている国営能代開拓建設事業は、米代川の右岸及び左岸を対象に山林・畑地を開発する事業である。その面積は 3,671 ha で対象区域は能代市、峰浜村、山本町、八竜町の 4 市町村に及ぶ。事業は昭和51年に開拓されたが、これに伴って秋田県教育委員会は昭和53年から遺跡の発掘調査及び範囲確認調査を実施してきた。その結果、本年度工事対象区域である浅内工区には上の山Ⅱ遺跡が所在する事が判明した。遺跡の総面積は約131,000㎡で、その一部は昭和58年度に調査が行なわれているが、本年度はこれに引き続き工法等で対応不可能な区域について、記録保存を目的に、発掘調査を実施する事になったものである。

### 第2節 調査の組織と構成

遺跡所在地	秋田県能代市浅内字上の山35番地他	
調査期間	昭和60年 8 月 1 日～10月31日	
調査対象面積	4,000㎡	
調査面積	4,270㎡	
調査主体者	秋田県教育委員会	
調査担当者	熊谷太郎 (秋田県埋蔵文化財センター	社会教育主事)
	児玉 準 (同	文化財主事)
調査事務担当者	加藤 進 (秋田県埋蔵文化財センター	主査)
	佐藤 健 (同	主事)
調査作業員	田口七左衛門・武田 憲一・武田 良治・原田吉一郎・原田 国郎・原田 淳 原田 誠一・原田 忠治・原田 富義・原田政五郎・原田 正鏤・平川 義雄 安宅 和子・梅田 キノ・大高多智子・大高 久子・加勇田節子・小林 和子 近藤 明子・鈴木カツエ・鈴木トキエ・高橋 テツ・田口ミチ子・武田加誉子 武田 ツマ・武田フジエ・武田 ミツ・武田 ミヲ・田口 ツナ・田村ウメノ 寺沢テツ子・畠 悦子・畠 京・原田 イキ・原田 キサ・原田 セツ 原田千代子・原田トミエ・原田 ヒデ・原田 弘子・原田 フミ・平川 テル 平川 ヒサ・平川 ヒメ・平川 政子・保坂 タカ・山條 ヒサ	
事務補助員	鈴木 光子	
整理作業員	荒川美智子・大西 英子・奥山 文子・倉田 美佳・小松 郁子・坂本 美利	

菅原 リエ・高田由里香・高橋千加子・高柳 良子・原 真由美・森川 怜子  
森元てる子

調査協力

東北農政局能代開拓建設事業所、秋田県能代地区土地改良区、能代市教育委員会、浅内地区自治会

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡の立地

#### 1 地理的位置

上の山遺跡は能代市浅内に所在し、おおよそ北緯 $40^{\circ}9'30''$ 、東経 $140^{\circ}1'40''$ の位置にあり、国鉄奥羽本線東能代駅から直線距離にして南西約4.5kmの地点にある。米代川河口は北西へ6.5km、西3kmで日本海へ出る。

遺跡地は能代市立浅内小学校の裏手の標高30mほどの平坦地にあり、昭和58年度に調査された上の山II遺跡とは連続する同一の遺跡と考えられる。現況は畑地と原野である。

#### 2 地形・地質概況

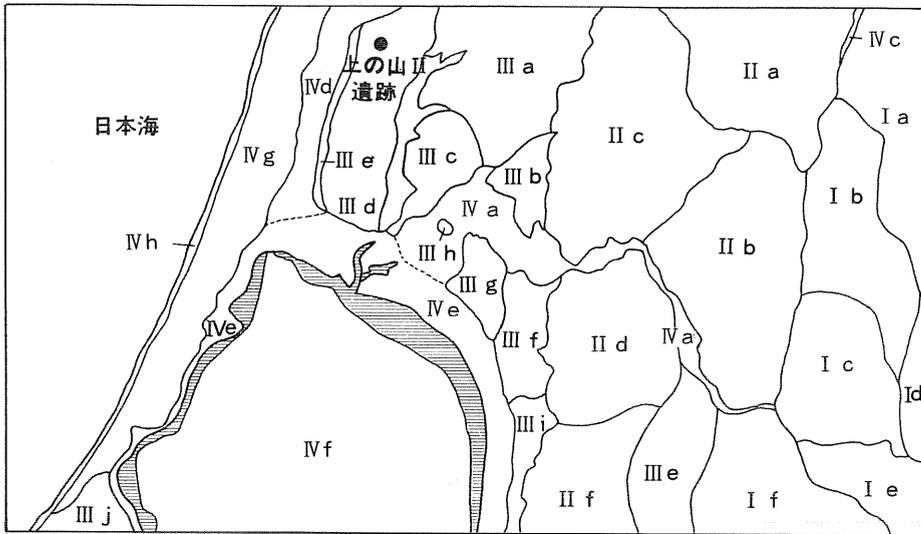
遺跡をとりまく地域は出羽丘陵の北寄りの部分に位置し、東から1 標高300~400mの七座山山地、房中山山地、2 標高300m代の羽立丘陵地、100m代の檜山、山本丘陵地、3 志戸橋野台地、成合台地、4 浅内海岸低地、日本海岸砂丘地からなり、山地・丘陵地・台地低地の三段化した横断形が正しくセットされている。

台地地域は米代川下流右岸台地と一対をなして存在し本州、日本海斜面地域の中では最も広大な台地地形地域をなしている。米代川以南、三種川以北に発達するものとして北より志戸橋野台地、豊岡台地、金光寺野台地、成合台地、大曲台地があげられ、上の山II遺跡は成合台地上にある。この台地は東の鶴川川低地、西の浅内海岸低地との間に南北方向に挟まれ、赤褐色の均一な塊状中粒砂より成り、武蔵野相当面と考えられている。土壌統は大部分が表層腐植質黒ボク土の大川口統であるが、遺跡地は野々村統に属し表層地質は砂がち推積物である。

成合台地の東西南北の四つの縁辺をリング状に取り囲む面は西の大曲台地面によって代表され沖積低地面からの比高10m、立川面相当の侵蝕面である。

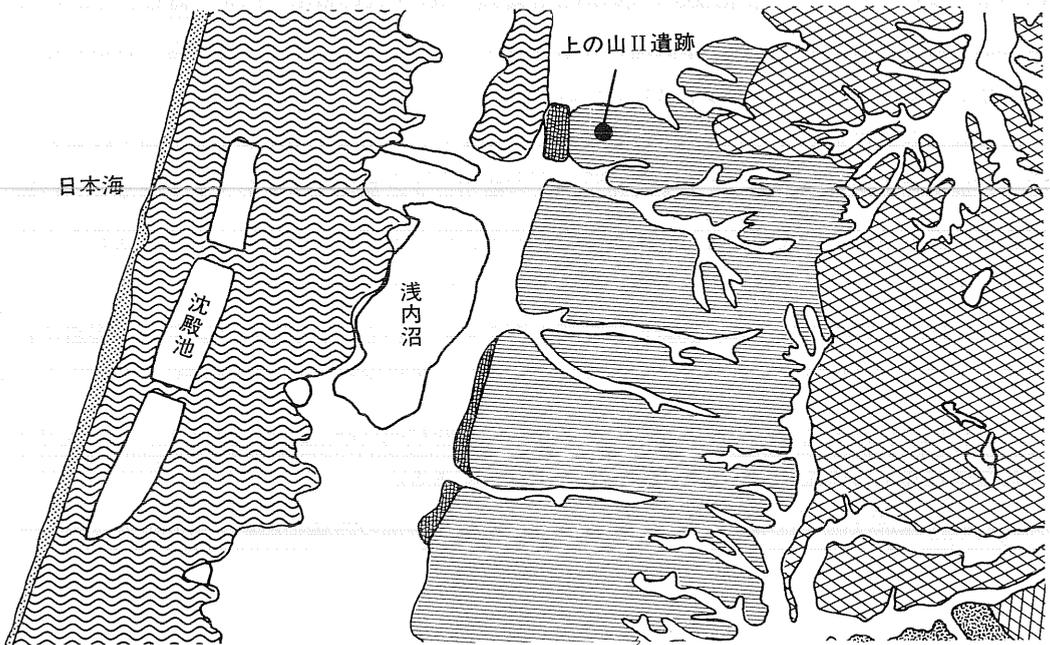
浅内海岸低地は西は日本海岸砂丘、東は成合台地の背斜部の西翼の西縁を南北方向に南能代逆向き断層によって切られている間に挟まれていて幅1,000~1,500mの低平な海岸低地である。この中にある浅内沼は日本海岸砂丘地伏流水の噴出による湖沼である。

日本海岸砂丘地は最大幅1,700mにも達し、一層のクロナス層を挟む累重砂丘で能代砂丘と呼ばれる。



- |             |               |               |              |
|-------------|---------------|---------------|--------------|
| <b>I 山地</b> | <b>II 丘陵地</b> | <b>III 台地</b> | <b>IV 低地</b> |
| Ia 七座山山地    | IIa 羽立丘陵地     | IIIa 志戸橋野台地   | IVa 三種川低地    |
| Ib 房中山山地    | IIb 谷地の沢丘陵地   | IIIb 豊岡台地     | IVb 鶴川川低地    |
| Ic 房住山山地    | IIc 桧山・山本丘陵地  | IIIc 金光寺野台地   | IVc 内川低地     |
| Id 上小阿仁山地   | IIId 石倉山丘陵地   | IIIId 成合台地    | IVd 浅内海岸低地   |
| Ie 滝ノ上山地    | IIIf 西の又丘陵地   | IIIIf 大曲台地    | IVe 八郎潟湖岸低地  |
| If 高杉山地     | IIIf 鹿渡丘陵地    | IIIIf 森岳・寒城台地 | IVf 大海人工干拓低地 |
|             |               | IIIIf 横長根台地   | IVg 日本海岸砂丘地  |
|             |               | IIIIf 泉八日台地   | IVh 海浜低地     |
|             |               | IIIIf 鹿渡台地    |              |
|             |               | IIIIf 濁西台地    |              |

第2図 地形区分図



- |          |        |         |        |
|----------|--------|---------|--------|
| 海浜       | 被覆砂丘   | 谷底平野    | 砂礫段丘IV |
| 砂礫段丘III+ | 岩石段丘II | 砂礫段丘III |        |

0 1 2 km

第3図 地形分類図

## 第2節 歴史的環境

能代地方には広大な台地地形が発達しており、この地形を利用して営なまれた遺跡は数多い。米代川右岸の東雲台地では縄文時代のものとしては全国最大規模の竪穴住居跡が発見され、国指定史跡となった杉沢台遺跡(註1)をはじめ、やはり縄文時代集落跡である館下遺跡Ⅰ(註2) 中世集落の中田面遺跡(註3)などが特に人口に膾炙している。

米代川左岸では縄文晩期の柏子所貝塚や、八竜町萱刈沢貝塚などもやはり台地地形の末端部に形成された遺跡で、数少ない本県の貝塚遺跡として重要な位置を占めている。(註4)(註5)

こうした台地の再利用を計って国営能代開拓事業が行なわれてきたのであるが、この事業に伴う発掘調査は今年度までに16ヶ所、約60,000㎡余に及ぶ。(註6)

昭和58年度に調査した比掛沢Ⅱ遺跡、上の山Ⅱ遺跡は今回の調査地点に隣接する遺跡で、それぞれ旧石器時代、平安時代の遺跡である。殊に上の山Ⅱ遺跡は年代的にも今年度の調査内容と一致し、地形的にも連続することから、同時期の連続する集落跡と考えられる。

海岸部の遺跡の場合、殊に海岸線の動向とそれに伴う砂丘の消長を考慮に入れる必要がある。今年度の上の山Ⅱ遺跡からはわずかに1片であるが縄文前期円筒下層D式土器が出土しているがこの頃の縄文海進時には台地下の国道7号線付近や沢目にも海水が侵入していたが、あるいは沖積作用が進行中の状態ではなかったかと考えられる。

能代砂丘内にも砂丘形成停止期の堆積であるクロスナ層が観察されるが、この中から遺物は検出されていないらしい。しかし男鹿半島南部の秋田砂丘では少なくとも縄文後期初頭から遺跡が見られ、これに続く弥生、平安時代の遺跡もクロスナ層に包含されており、この状況は能代砂丘から続く半島北部砂丘でも同じであるから、能代砂丘においても今後砂丘内のクロスナ層中からこれらの時代の遺物が検出される可能性はあるであろう。上の山Ⅱ遺跡からも出土している後期初頭の土器を使用した人々の生活舞台は前期よりもはるかに西へ延び浅内海岸低地から日本海岸砂丘地へと及んでいたものと推定される。(註7)

弥生時代の遺跡は少なく、真壁地、比掛沢遺跡で古手の土器が少量出土しているのみである。しかし平安時代に入ると遺跡は増加し、上の山Ⅱ遺跡のように大規模な集落の発達が見られる。大館遺跡は野代営擬定地ともされる。(註8)

檜山安東氏の居城檜山城は壮大な山容をもつ中世城館で国指定史跡となっている。金山館もこの頃の遺跡で昭和59年・60年度に市教育委員会によって発掘調査の手が加えられている。(註9)(註10)

- 注1 秋田県教育委員会 『杉沢台遺跡・竹生遺跡』 1981年(昭和56年)
- 注2 秋田県教育委員会 『館下Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 1978年(昭和53年)
- 注3 秋田県教育委員会 『中田面・重兵衛台Ⅰ・Ⅱ・根洗場遺跡発掘調査報告書』 1980年(昭和55年)
- 注4 秋田県教育委員会、能代市教育委員会 『柏子所貝塚第2次・第3次発掘調査報告書』 1966  
(昭和41年)
- 注5 八竜町教育委員会 『萱刈沢貝塚』 1979年(昭和54年)
- 注6 秋田県教育委員会 『比掛沢遺跡、上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 1984年(昭和59年)
- 注7 秋田県教育委員会 『真壁地遺跡、蟻の台遺跡発掘調査報告書』 1983年(昭和58年)
- 注8 能代市教育委員会 『大館遺跡発掘調査報告書』 1978年(昭和53年)
- 注9 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 1981年(昭和56年)
- 注10 能代市教育委員会 『金山館発掘調査概報』 1985年(昭和60年)



第4図 上の山II遺跡地形・調査区位置図

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

昭和56年11月に範囲確認調査が行なわれ、遺跡の総面積は約13,000㎡と判明した。

遺跡は、米代川左岸から隣町八竜町、山本町にかけて発達する広大な台地の北東縁部に位置する。標高は30～34 m で沖積地との比高差は約15 m。遺跡の北には肥沃な沖積地がひらけており西方には日本海が間近にせまっている。又、南側はふかく入り込んだ谷地で、付近には湧水が認められる。遺跡周辺の現況は畑地、草地及び山林である。

本年度調査対象区域は、草地及び畑地となっており、畑地の一部は過去に開墾が行なわれたため地山面まで削平されている。地形は西から東に向かいやや傾斜しており、南側は沢地に面している。昭和58年度調査の上の山II遺跡は、本調査区の東南約150 m の所に隣接する。

遺跡の基本土層は1層が黒褐色土、2層が軟質の黒褐色土、3層は暗褐色土である。深さは東側が畑地として利用されているためやや浅いが、他は40～60cmである。表土層は褐色のローム層で30～50cm 続き、その下はローム+砂層・砂層・礫層となる。

### 第2節 調査の方法

グリット方式を用いて調査した。

グリットは調査対象区域に40 m × 40 m の大グリットを設定し、これをさらに4 m × 4 m の小グリットで細分した。グリットはいずれも南北方向に算用数字、東南方向にアルファベットを順列させ、東南隅部の合致記号をそのグリットの名称とした。名称は大グリットの場合東西方向が、LA・MA・NA……、南北方向は、40・50・60……戸なる。小グリットは大グリットを10×10に分割し設定する事から、東西方向は、LA・LB・LC……、南北方向は、40・41・42……となる。

### 第3節 調査の経過

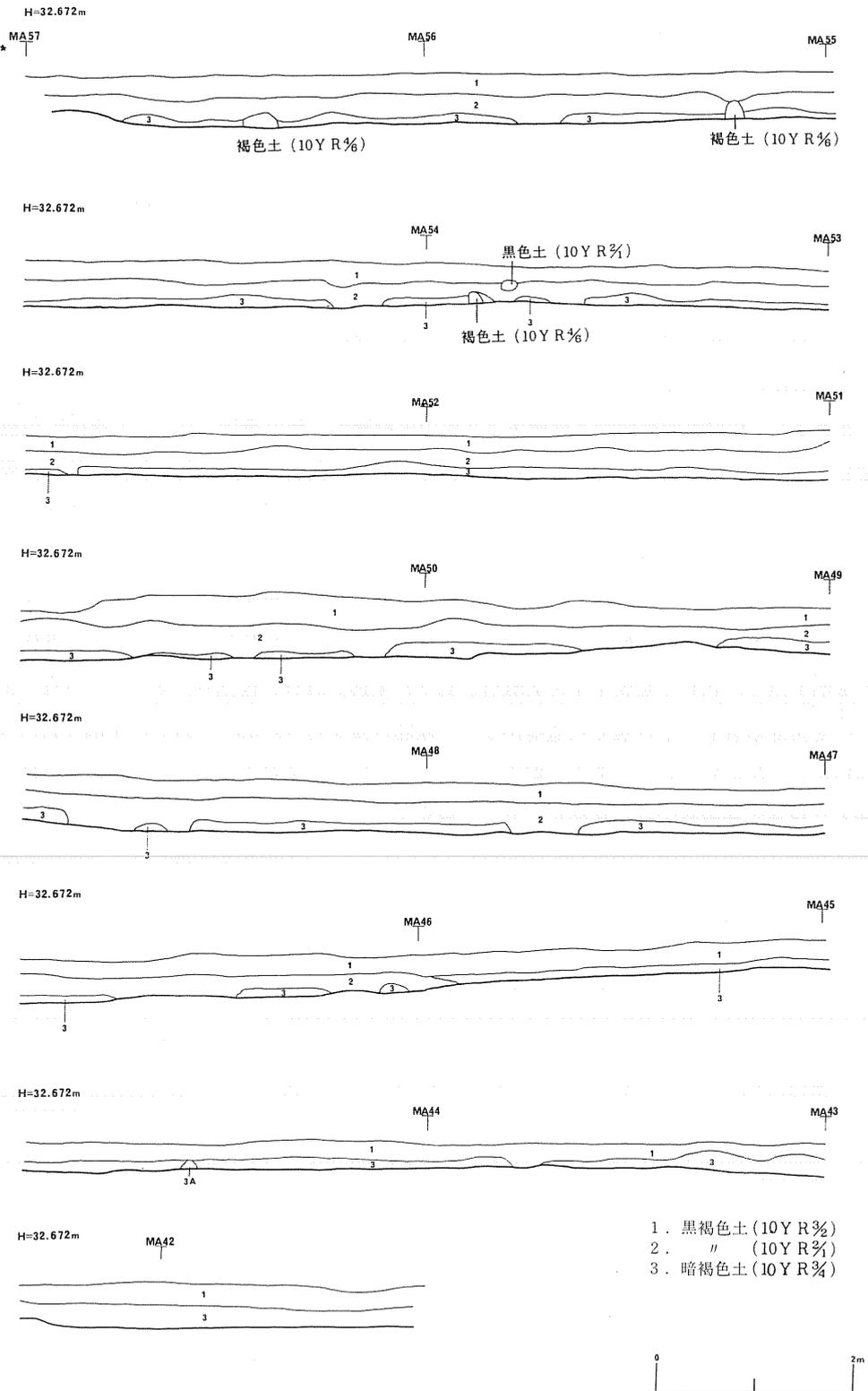
調査期間は昭和60年8月1日～10月31日である。

8月1日、調査開始、浅内部落の集会所で作業員と打ち合せ。調査の目的・方法及び諸連絡

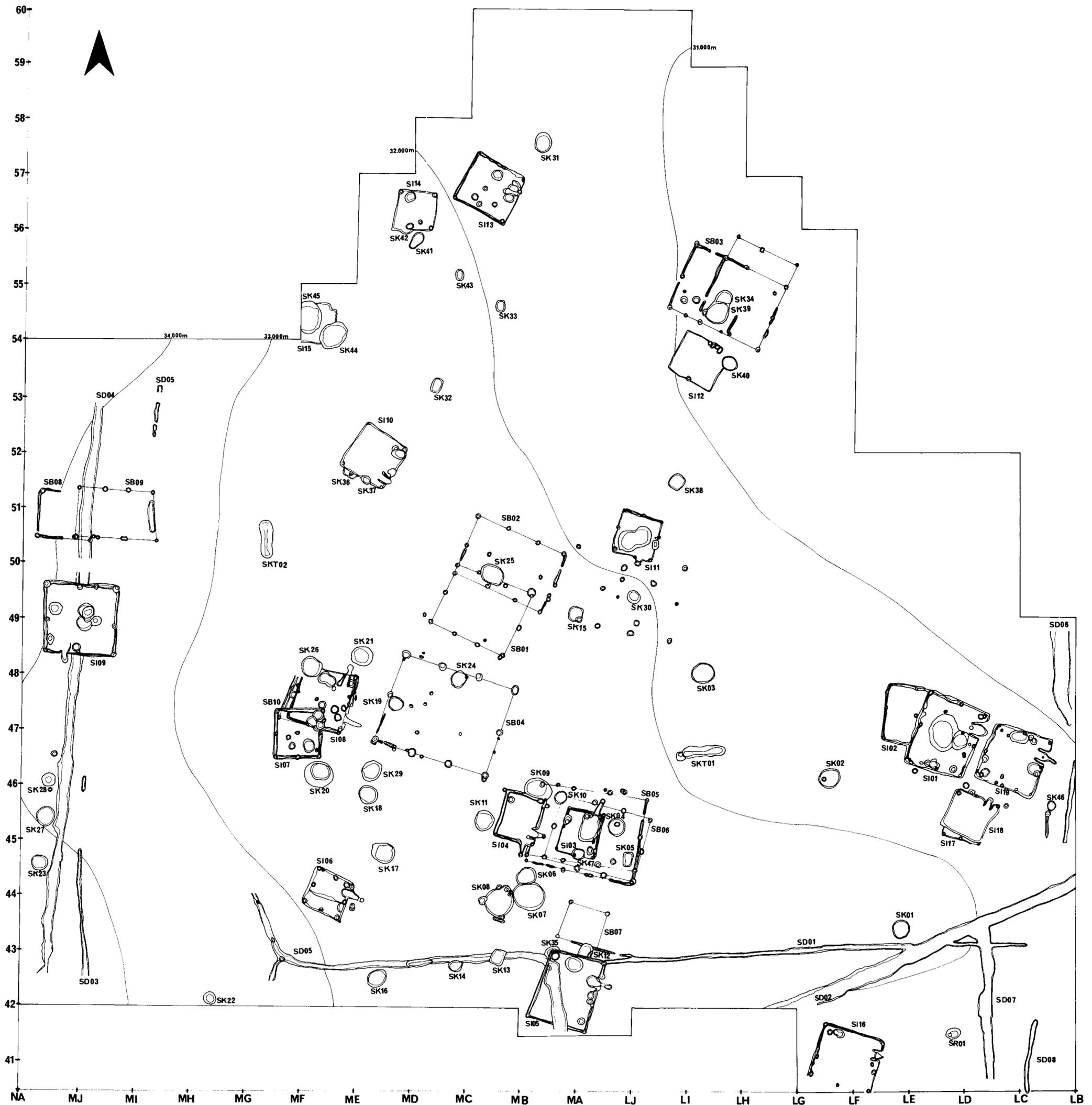
等話し、遺構・異物等の調査事例をスライドで説明する。午後調査区の下刈り及び杭打ち作業を行う。2日、粗掘り作業開始。表土が比較的うすい西側区域より行う。5日、表土の厚い東側区域を中心に、重機による表土除去作業を行う。除去は異物包含層である表土2層を削平しない様、調査員立会いのもとで行う。8日、晴天が続く。堅穴住居跡・溝・土壌が検出され始める。12日、ベルトコンベアーを用い南側区域から粗掘りを行う。15日、調査区の南側で東一西にのびる溝を検出。20日、調査区の中央区域で、表土層2層まで掘り下げたところ焼土が広範囲にわたって散布しているのを確認。精査するにつれこの面で掘立柱建物跡が検出される。22日、建物跡周辺に堅穴住居跡・土壌が多数検出される。27日、粗掘り作業と平行しながら、遺構の精査を開始する。

9月2日、SI07堅穴住居跡の堆積土より火山灰を検出。他の遺構についても火山灰の混入を留意しながら精査を行う。12日、雨降りが続く。20日、調査区の約60%の粗掘り終了。順調に進行している。遺構はほぼ全域にわたって検出されているが、その中でも特に調査区の中央区域に集中している傾向がみられる。

10月2日、調査区の東端に堅穴住居跡が検出されたため、東側をさらに拡張する。4日、拡張部分よりさらに1軒の堅穴住居跡を検出。浅内小学校4年生見学に来跡。14日、遺構の精査と実測を急ぐ。16日U金岡小学校教職員、見学に来跡。21日、粗掘り作業終了。調査区全域について再度精査し。とり残した遺構がないか確認作業を行う。22日、調査区南端で新たに堅穴住居跡を1軒検出。28日、遺構の精査をほぼ終了。30日、遺構の実測及び写真撮影を終了。県教委文化課富樫泰時学芸主事来跡。31日、調査完了。



第5図 上の山II遺跡土層図



第6図 上の山口遺跡遺構分布図

## 第4章 調査の記録

## 第1節 縄文時代の遺構と遺物

## 1 土器埋設遺構

## SRO1土器埋設遺構 (第7図 図版15)

LD41グリッド地山上の褐色土面で確認した。長径106cm、短径76cmの楕円形を呈する掘り込み内の西側に深鉢形土器を逆に埋設している。掘り込みは東側が深く20cmほどであるが、土器のある西側は10cmほどである。土器は沈線文を主体とする縄文後期初頭の土器で、細かく破碎しており、口縁部・底部は検出されなかった。

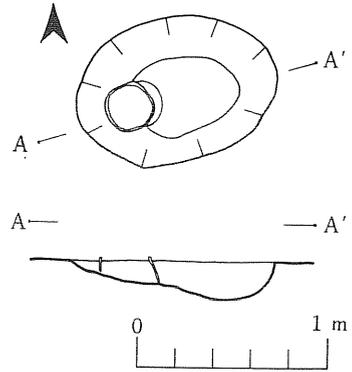
## 2 遺構外出土遺物

## (1) 土器 (第58図)

1は円筒土器の頸部で口縁部を欠く。頸部と胴部を区切る幅5mmほどの隆帯が2条あり、この間に角ばった刺突文が3～5mm間隔に密接して並列している。隆帯よりも上位には左傾する斜縄文がわずかに観察される。色調は褐色を呈している。円筒下層d式土器であろうと考えられる。2～6は深鉢形土器の破片で、2条あるいは3条単位の沈線文様が描かれている。沈線文には口縁部に沿って平行するものと弧状をなすものがある。縄文は施されておらず、色調は一様に黄褐色ないし灰褐色を呈している。後期初頭の十腰内I式土器である。7は口縁部がほぼ直立し、体部は丸みを帯びてすぼむ浅鉢形土器で、口縁部は山形状突起となる。頸部に3条の平行沈線が施される他、口縁部及び内面にも1条の沈線文がある。該面には沈線内に貼瘤が見られる。精選された胎土を用いており、色調は両面ともに明るい黄褐色を呈している。晩期終末期の大洞A'式土器である。

## (2) 石器 (第58図)

8は凸基有茎式の石鏃で両面加工が施され、断面は凸レンズ形を呈している。基部に天然アスファルトの付着が見られる。9は両面加工され、周縁部の全体に細かな調整剥離が施されている。先端が細く尖り、この部分が使用によって磨滅している。10も両面加工された石器で、先端部分が錐状に尖っている。11・12は縦形石匙、13は横形石匙で両面に大きく剥離面を有し、側縁や刃部及びつまみ部に調整がくわえられている。



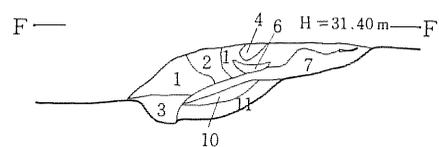
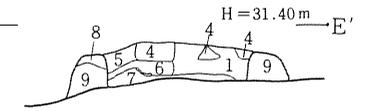
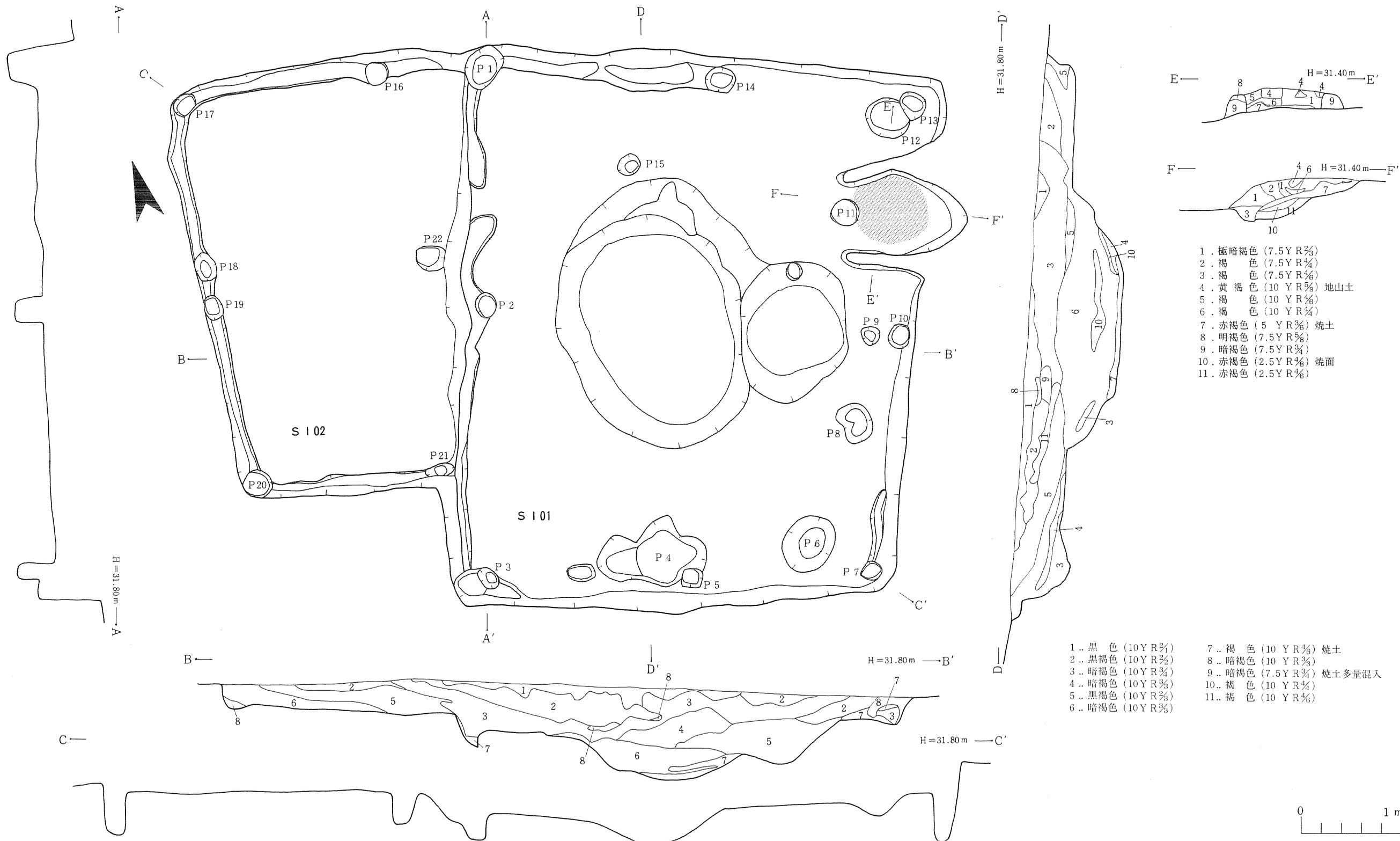
第7図 土器埋設遺構

## 第2節 平安時代の遺構と遺物

## 1 竪穴住居跡

## S I O 1 竪穴住居跡 (第8図 図版8)

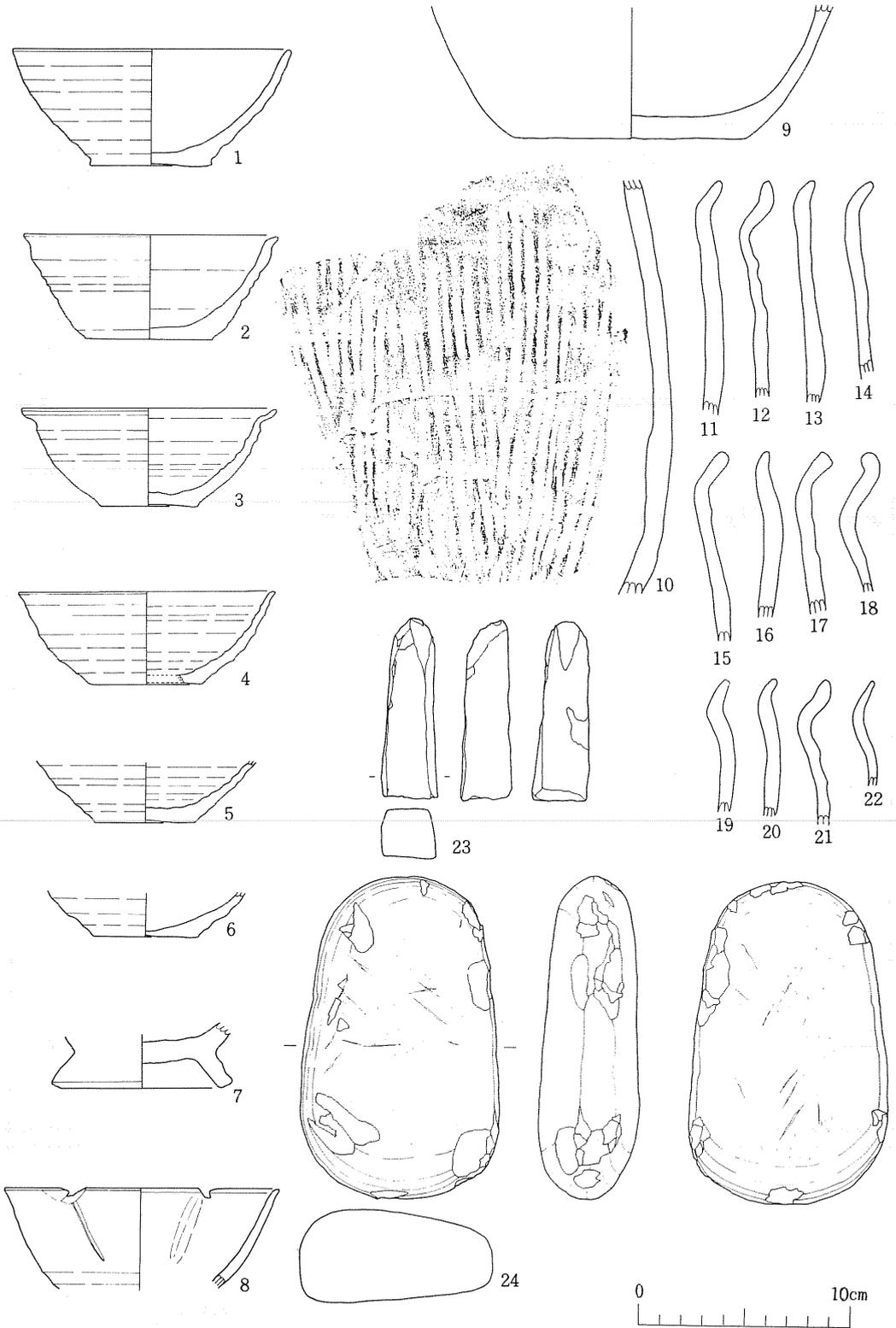
確認面	L C 46・47、L D 46・47グリッドの地山面で確認した。
重複	S I O 2を切って構築している。
平面形・規模	西壁 556cm、北壁475cm の方形で、面積は24.7 m <sup>2</sup> である。
床面	細かな凹凸が少なく平坦で堅い。北西隅と南西隅では約20cmの高低差がある。
壁	南側が最も高く、40cm前後の高さを測る。全体にわずかに外方に傾斜して立ち上がり、しっかりとした作りである。
壁溝	西壁のみはほぼ完全に見られるが、北・東壁では一部のみで、南壁には全く検出されない。幅10～20cm深さ5～10cmである。
ピット	P 1・29cm、P 2・26cm、P 3・38cm、P 4・9cm、P 5・69cm、P 6・34cm、P 7・47cm、P 8・8cm、P 9・32cm、P 10・53cm、P 11・30cm、P 12・9cm、P 13・29cm、P 14・48cm、P 15・9cmの深さである。このうち、P 1～3・5・7・10・13・14は、柱穴であると判断される。P 4・8・12には焼土が入っていた。
カマド	東壁の北寄りに付設されている。煙道は短く、外方に急激に立ち上がる。袖は両側とも良く残存して入るが、天井部は崩落している。両袖間に比較的広い範囲で焼面が見られる。
炉	なし
遺物	(第9図) 1～6は土師器坏で、7は厚手の高台部である。8は緑釉輪花椀で10世紀後半頃に限定される。9は土師器甕の底部、10も土師器甕で外面にタタキ目を有する。11～22は土師器甕口縁部、23・24は砥石で、いずれも4面が研磨されている。24は自然礫を利用している。
備考	床中央部に2個の土壌状の凹みがある。いずれも底面壁面ともに丸みを帯び堅くはない。堆積土の観察から、人為的に埋土した形跡や床と同一面での貼床等がなく、住居内の施設として住居と同時に使用されたものと考えられる。



- 1. 極暗褐色 (7.5 YR 3/8)
- 2. 褐色 (7.5 YR 4/4)
- 3. 褐色 (7.5 YR 5/6)
- 4. 黃褐色 (10 YR 5/8) 地山土
- 5. 褐色 (10 YR 5/6)
- 6. 褐色 (10 YR 4/4)
- 7. 赤褐色 (5 YR 3/6) 燒土
- 8. 明褐色 (7.5 YR 5/8)
- 9. 暗褐色 (7.5 YR 3/4)
- 10. 赤褐色 (2.5 YR 4/6) 燒面
- 11. 赤褐色 (2.5 YR 4/6)

- 1.. 黑色 (10 YR 2/1)
- 2.. 黑褐色 (10 YR 2/2)
- 3.. 暗褐色 (10 YR 3/4)
- 4.. 暗褐色 (10 YR 3/6)
- 5.. 黑褐色 (10 YR 2/2)
- 6.. 暗褐色 (10 YR 3/6)
- 7.. 褐色 (10 YR 4/6) 燒土
- 8.. 暗褐色 (10 YR 3/6)
- 9.. 暗褐色 (7.5 YR 3/4) 燒土多量混入
- 10.. 褐色 (10 YR 4/4)
- 11.. 褐色 (10 YR 4/6)

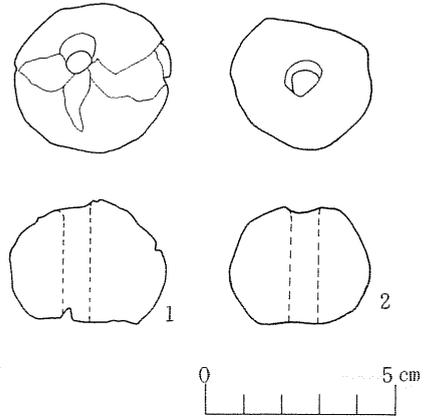
第8圖 S101·02豎穴住居跡



第9図 S101 竪穴住居跡出土遺物

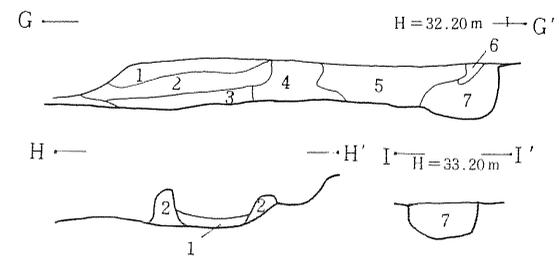
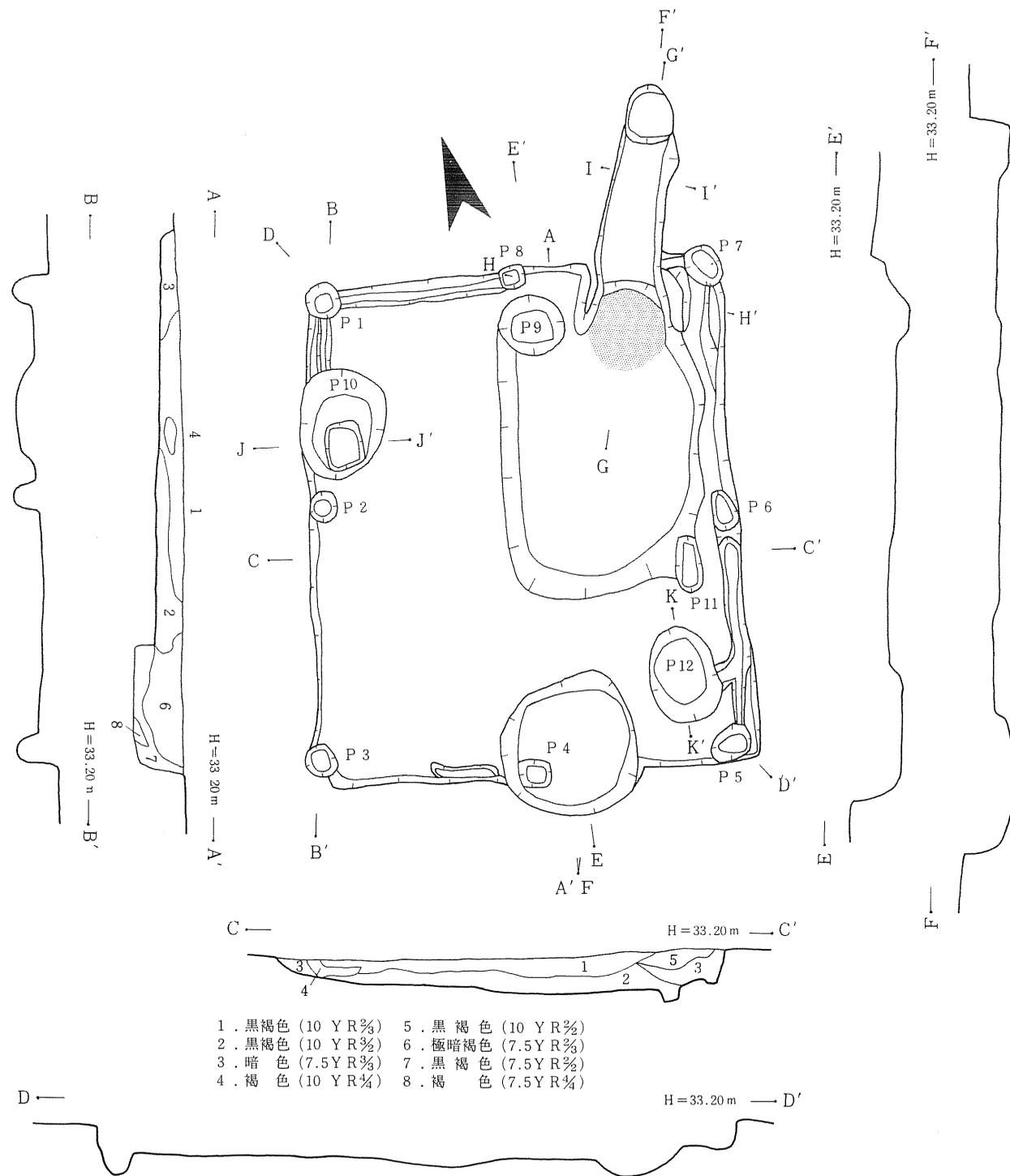
S I 0 2 竪穴住居跡 (第8図 図版8)

確認面	LD47・LE46・47グリットの地山面で確認した。
重複	東半分をS I 01によって切られている。
平面形・規模	完全に残存する西壁は400 cmあり、方形を呈するものと思われる。
床面	ほぼ同一レベルで、平坦かつ極めて堅く踏み固められている。
壁	残存する壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

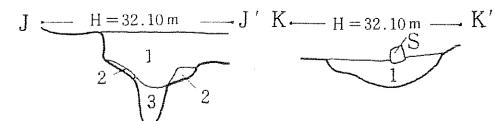


第10図 S I 02竪穴住居跡出土遺物

壁溝	幅15cm前後、深さ5～10cmで、3壁ともに構築されている。
ピット	P16・30cm、P17・42cm、P18・13cm、P19・35cm、P20・39cm、P21・32cm、P22・13cmの深さである。このうち30cm以上の深さを有するP16・17・19～21が柱穴であろうと考えられる。
カマド	検出されていない。
炉	なし
遺物	(第10図) 黒褐色を呈する球形の土錘2点が出土した他は土師器の小破片が出土したのみである。
備考	



1. 暗褐色 (7.5 YR 3/4)    5. 黑褐色 (7.5 YR 2/2)  
 2. 黑褐色 (7.5 YR 3/2)    6. 明褐色 (7.5 YR 5/6)  
 3. 褐色 (7.5 YR 4/4)    7. 黑色 (7.5 YR 1/1)  
 4. 極暗褐色 (7.5 YR 3/3)    2 を除き 焼土混入



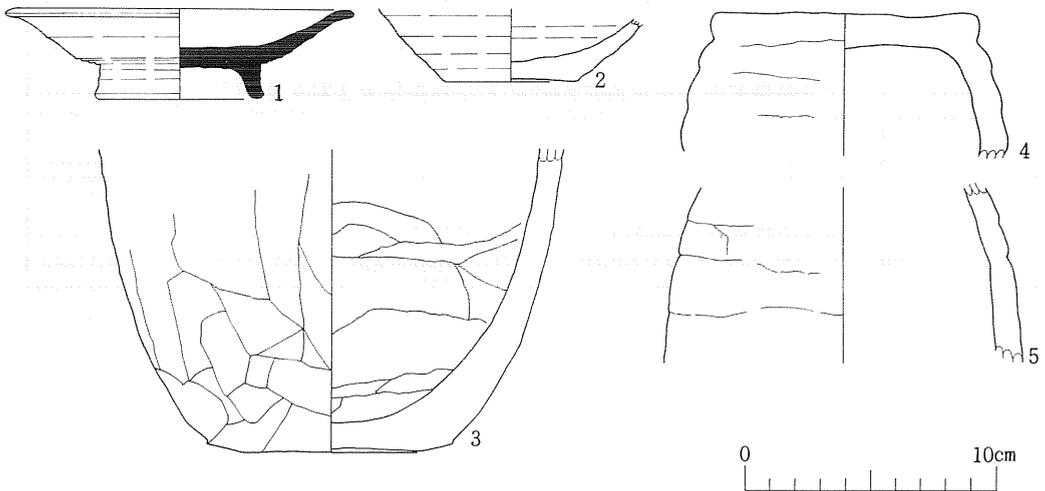
1. 黑褐色 (10 YR 3/3)    1. 黑褐色 (10 YR 2/2)  
 2. 黑褐色 (10 YR 2/2)  
 3. 褐色 (10 YR 4/4)



第11図 S103 竖穴住居跡

## S I O 3 竪穴住居跡 (第11図 図版8)

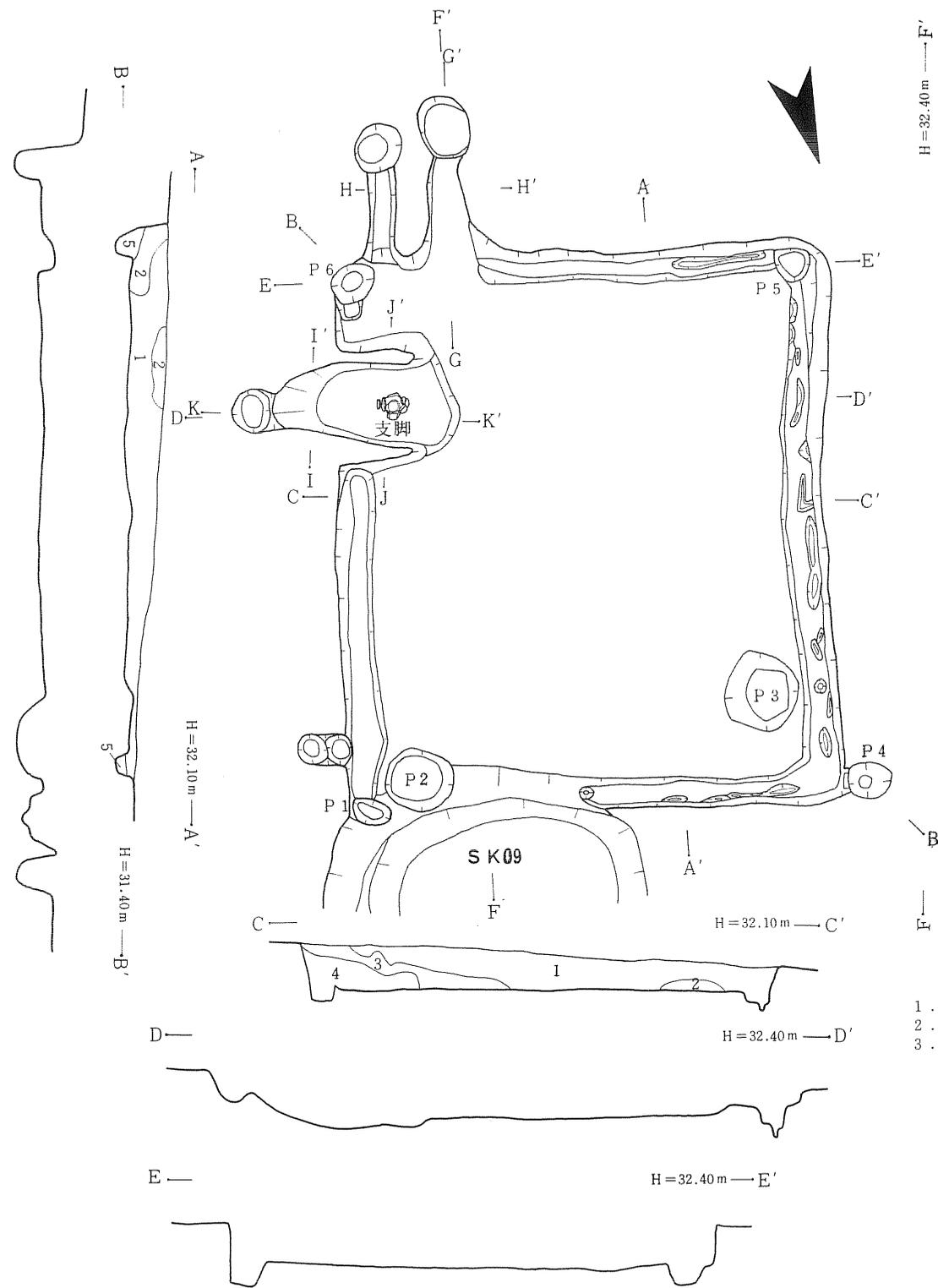
確認面	L J 44・45、MA 44・45グリッド地山面で確認した。
重複	南壁がS K 47によって切られている。
平面形・規模	東壁338 cm、南壁294 cmの方形で面積9.6 m <sup>2</sup> である。
堆積土	基本層は黒褐色土。カマド前面の方形凹み部分には褐色土が多量混入。
床面	ほぼ平坦であるが、カマド燃焼部の前が、200 × 130cm、深さ8 cmほどの範囲で低く掘り下げられている。方形の凹み部分は特に堅くしまっている。
壁	西側はやや緩やかであるが、他の壁は垂直に近く、高さ約10cm。
壁溝	各壁に認められるが全周しない。幅10~15cm、深さ2 cmと浅い。
ピット	P 1・10cm、P 2・12cm、P 3・14cm、P 4・25cm、P 5・15cm、P 6・不明、P 7・24cm、P 8・13cm、P 9・14cm、P 10・35cm、P 11・16cm、P 12・16cmの深さである。このうちP 1~8までが柱穴である。P 10・12には黒色土・褐色土が堆積している。住居に付随するものと考えられる。
カマド	北壁の東寄りに付設。袖は長さ45cm、両袖の幅75cmで、地山土を利用して形成。燃焼部から煙道部にかけての底部はほぼ平坦で、煙出し部に至って円形に凹んでいる。北壁から煙出し部までの長さは110cm。
炉	なし
遺物	(第12図) 1は須恵器高台付皿で床面からの出土である。2は土師器坏、3は土師器甕の底部付近である。4・5はカマド燃焼部内から出土した土製支脚で同一個体と思われる。



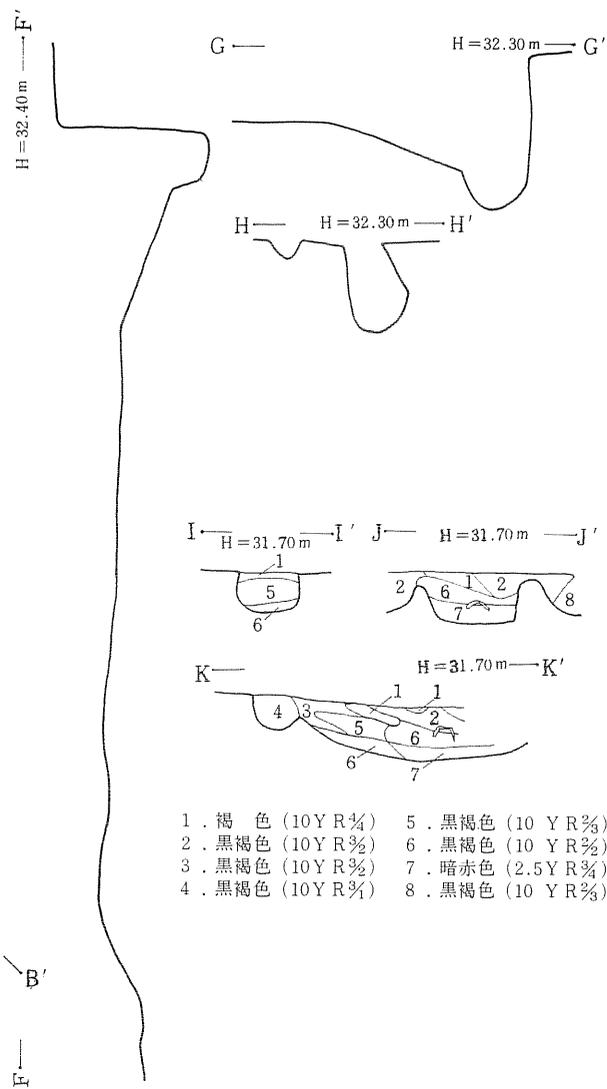
第12図 S I O 3竪穴住居跡出土遺物

## S I O 4 竪穴住居跡 (第13図 図版・8・9)

確認面	MA 44・45、MB 45グリッドの地山面で検出した。
重複	北壁にS K 09土壌が重複する。土壌の方が新しい。
平面形・規模	東・西壁ともに 340cm、南壁 310cmの方形で、面積10.9㎡である。
床面	ほぼ平坦であるが、東壁ぎわが若干高まりとなっている。床下に大きな楕円形の落ち込みがあるが、貼床はなく、特に堅い箇所もみられない。落ち込みは掘り下げた結果遺構ではないと判断された。
壁	北壁が極めて低く 2 cmほどしかないが、他は10cm以上の高さを有し、垂直に近い立ち上がりを示す。
壁溝	各々の壁に構築されている。幅20～25cm、深さ10cmほどで、溝底に板状構築物の痕跡が並列する。
ピット	P 1・27cm、P 2・28cm、P 3・19cm、P 4・24cm、P 5・22cm、P 6・14 cmの深さでP 1・5・6は柱穴と見て確実である。北西隅には柱穴がないが壁外にほぼ同規模のP 4があることからP 4がこの位置での柱穴であろう。
カマド	2基あり、南壁のものを第1号カマド、東壁のそれを第2号カマドとする。第1号カマドは南壁の東寄りの位置にあり、壁外に 100cmほど出ている。カマド底部は燃焼部から煙道部にかけてしだいに低くなり、ピット状に凹む煙出し部から急激に外方へ立ち上がる。袖・天井部は残存しない。第2号カマドは地山土を利用した袖が残存し、この間に土師器坏が置かれている。燃焼部から煙道部にかけて緩やかに立ち上がり、煙出し部はピット状に凹んでいる。第1号カマドの燃焼部焼土が、右側袖の下に入り込んでいることや、カマド自体の保存状態から第2号カマドは第1号カマドよりも新しいと言える。カマド燃焼部内の土を篩にかけたところ炭化米 2粒を検出した。
炉	なし
遺物	(第14図) 1は全体に薄手であるが土師器甕の下半部である。2は第2号カマドの燃焼部から出土したフイゴ羽口である。
備考	第1号カマドの北側にS B 05掘立柱建物跡に関連する溝がある。この溝に連絡すると考えられる溝がS K 09土壌東側から延びており、これらは本竪穴住居東壁付近を通るものと推定できる。しかし住居確認面ではそれを検出できなかった。このことは住居の掘り込みが掘立柱建物跡よりも新しいという根拠となり得るかも知れないが、断定はできない。

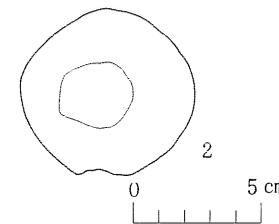
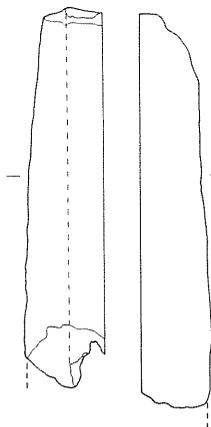
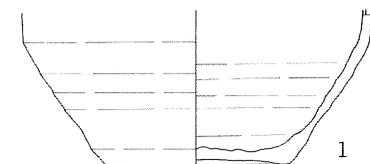


第13图 S104竖穴住居跡

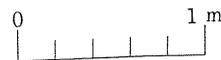


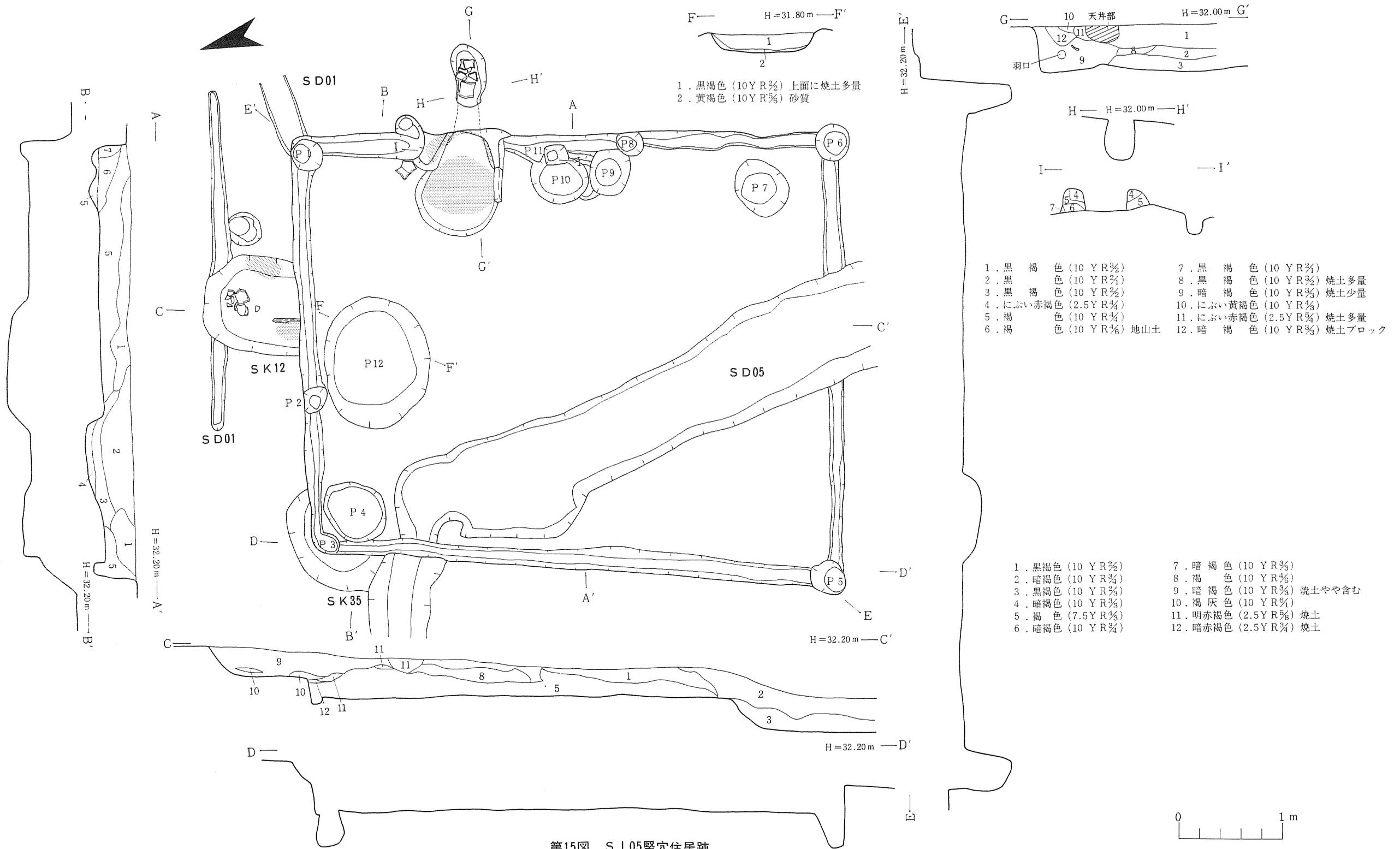
- 1. 褐色 (10Y R 4/4)
- 2. 黑褐色 (10Y R 3/2)
- 3. 黑褐色 (10Y R 3/2)
- 4. 黑褐色 (10Y R 3/2)
- 5. 黑褐色 (10Y R 3/2) 烧土多い
- 6. 黑褐色 (10Y R 3/2) "
- 7. 暗赤色 (2.5Y R 3/4) 烧面
- 8. 黑褐色 (10Y R 3/2)

- 1. 黑褐色 (10Y R 3/2)
- 2. 暗褐色 (10Y R 3/4)
- 3. 褐色 (10Y R 4/4)
- 4. 褐色 (10Y R 4/4)
- 5. 黑褐色 (10Y R 3/2)



第14图 S104竖穴住居跡出土遺物

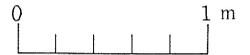




1. 黒褐色 (10 Y R 2/2) 上面に焼土多量  
 2. 黄褐色 (10 Y R 5/6) 砂質

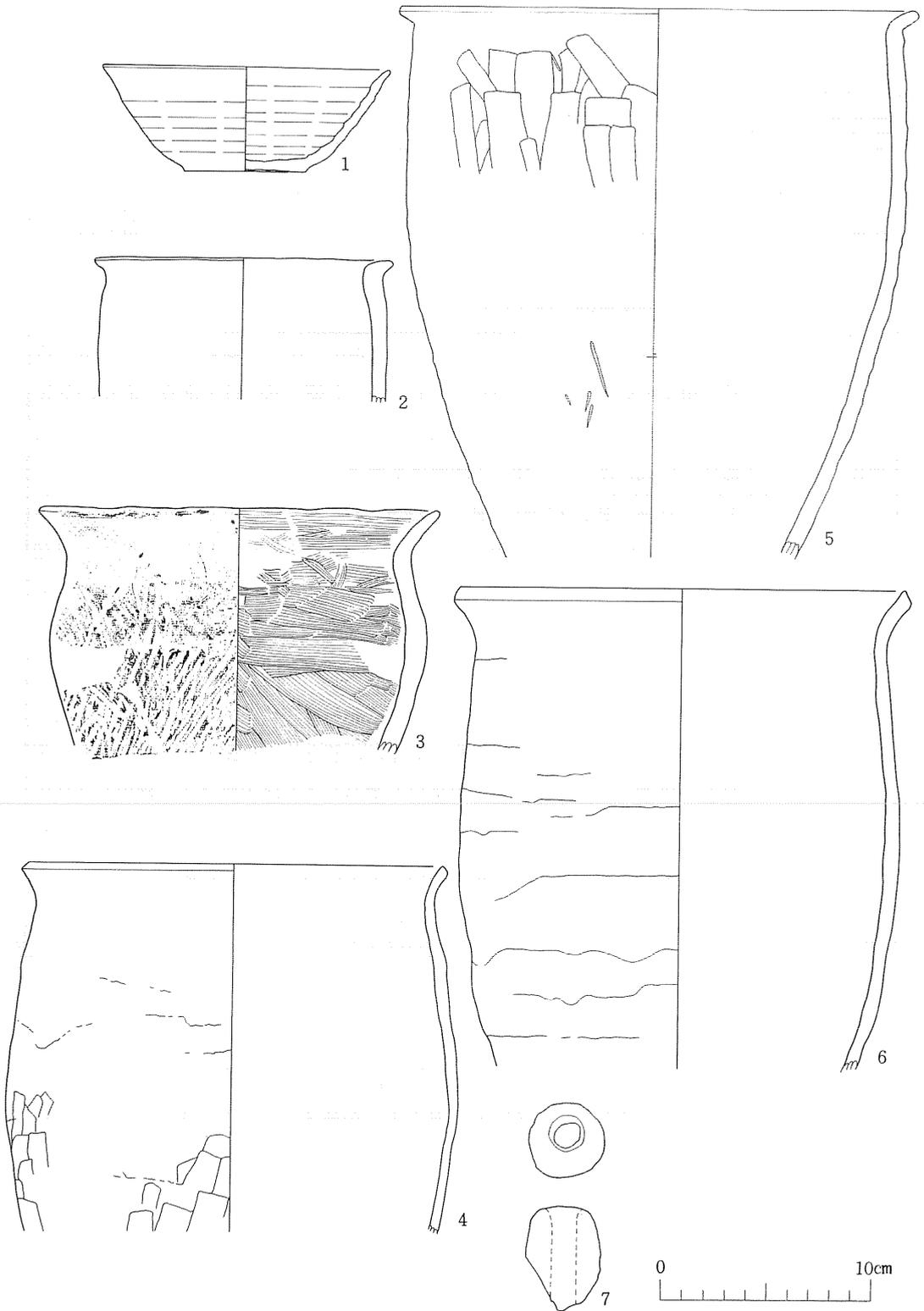
1. 黒褐色 (10 Y R 2/2)	7. 暗褐色 (10 Y R 3/4)
2. 黒褐色 (10 Y R 3/4)	8. 黒褐色 (10 Y R 3/4) 焼土多量
3. 黒褐色 (10 Y R 3/4)	9. 暗褐色 (10 Y R 3/4) 焼土少量
4. にぶい赤褐色 (2.5 Y R 3/4)	10. にぶい黄褐色 (10 Y R 5/6)
5. 褐色 (10 Y R 4/4)	11. にぶい赤褐色 (2.5 Y R 3/4) 焼土多量
6. 褐色 (10 Y R 4/4) 地山土	12. 暗褐色 (10 Y R 3/4) 焼土ブロック

1. 黒褐色 (10 Y R 2/2)	7. 暗褐色 (10 Y R 3/4)
2. 暗褐色 (10 Y R 3/4)	8. 褐色 (10 Y R 4/4)
3. 黒褐色 (10 Y R 3/4)	9. 暗褐色 (10 Y R 3/4) 焼土やや含む
4. 暗褐色 (10 Y R 3/4)	10. 褐灰色 (10 Y R 5/6)
5. 褐色 (7.5 Y R 3/4)	11. 明赤褐色 (2.5 Y R 3/4) 焼土
6. 暗褐色 (10 Y R 3/4)	12. 暗赤褐色 (2.5 Y R 3/4) 焼土

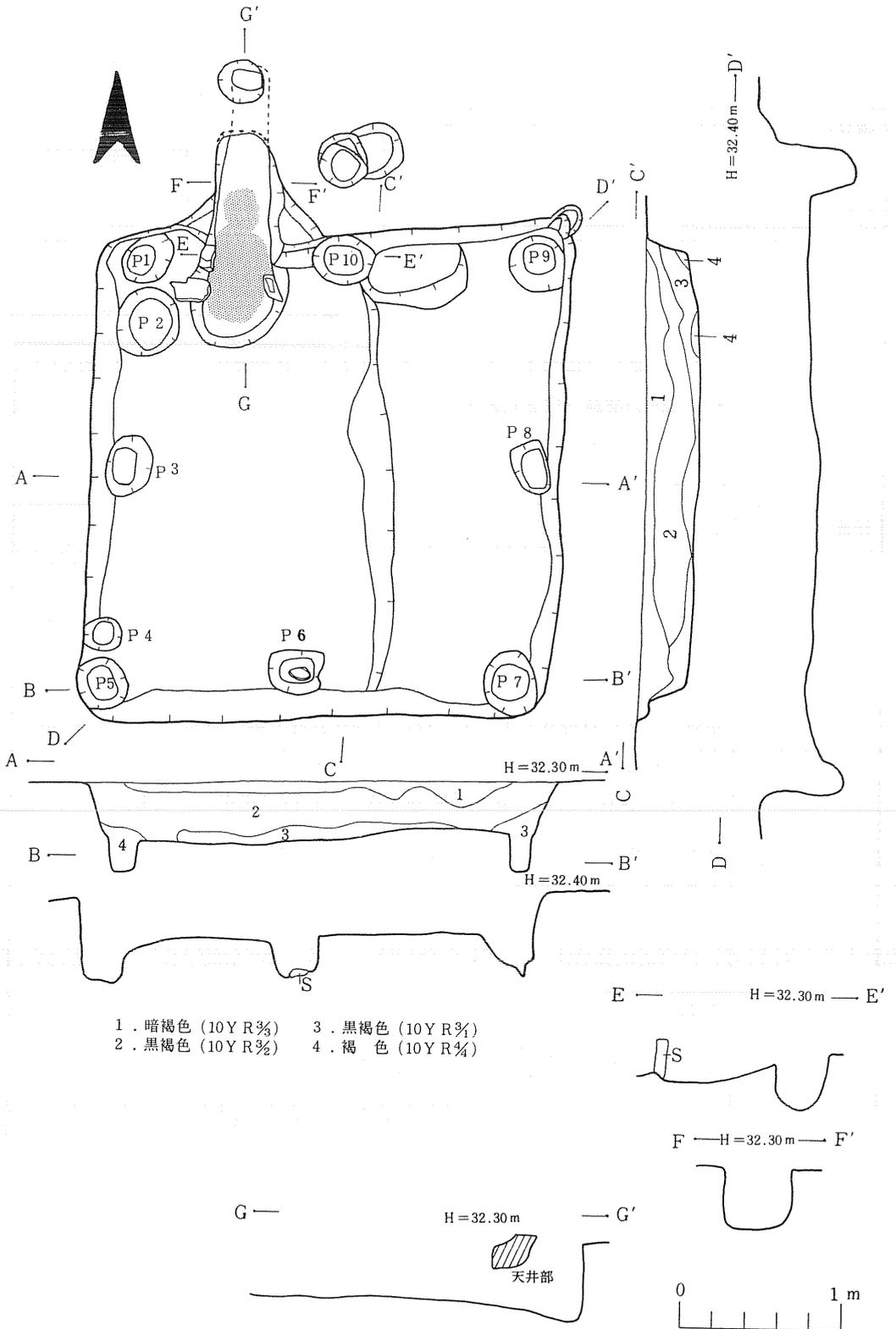


## S I O 5 竪穴住居跡 (第15図 図版9)

確認面	L J 41・42、MA 41・42グリッド地山面で検出た。
重複	S K 12・35、S D 05が壁や堆積土を切って構築されている。
平面形・規模	東壁540 cm、南壁456 cmの方形で面積22.5m <sup>2</sup> である。
床面	地山の傾斜にかかわらず、全体がほぼ平坦である。S D 05が床を掘り込んで入る。カマド周囲を除き極めて堅くしまっており、南側の一部には地山褐色土による貼床痕跡が認められた。
壁	いずれも垂直に近い立ち上がりを示す。地山が南側に傾斜して低くなるため壁も南ほど低く5～11cmの高さであるが、北壁は40cmほどある。北壁がS K 12に、北西コーナーがS K 35西壁および南壁がS D 05によって切られている。
壁溝	幅10～14cm、深さ4～10cmで四壁に全周する。
ピット	P 1・43cm、P 2・12cm、P 3・42cm、P 4・2 cm、P 5・40cm、P 6・35 cm、P 7・25cm、P 8・42cm、P 9・17cm、P 10・19cm、P 11・30cm、P 12・23cmの深さである。四隅のP 1・3・5・6は柱穴であろう。他にP 2・8も柱穴かと考えられる。P 4・9・10・12には焼土及び炭化物が含まれる。
カマド	東壁の北寄りに付設されている。保存状態が良好で、袖部の石や煙道部天井が残存する。袖は地山土と褐色土を用い、芯として角礫を使用している。煙道部の底部はほぼ平坦であるが煙出し部がわずかに下降する。煙出しはほぼ垂直に立ち上がり、内部に甕とフイゴ羽口の破片が残る。壁から煙出し先端部まで80cmある。カマド燃焼部内の土を篩にかけたところ炭化米1粒を検出した。
炉	なし
遺物	(第16図) 1は土師器坏でカマド煙出し部から出土した。2～6は土師器甕で2・3はカマド燃焼部からの出土である。3の内面はハケメ外面はハケメよりかなり目の荒い木口状工具のナデが施されている。4・6はカマド煙出し部から出土した。7は管状土錘でカマド煙出し部から出土した。
備考	

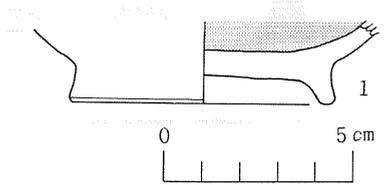


第16図 S105竖穴住居跡出土遺物



第17図 S106 竪穴住居跡

S106 竪穴住居跡 (第17図 図版9)

確認面	ME43・44グリッド地山面で確認した。	
重複	なし	
平面形・規模	南壁316 cm、東壁300 cmの方形で、面積9.8 m <sup>2</sup> である。	
床面	北半部が約10cmほど低くなっている。 この凹み部分は南側よりも堅くしまっており、住居跡内部における空間のつかいわけの痕跡と考えられる。	
壁	床から外方に傾斜して立ち上がり、30~40cmの高さを有するしっかりとした壁である。	
壁溝	なし	
ピット	P1・20cm、P2・14cm、P3・21cm、P4・11cm、P5・18cm、P6・8cm、P7・20cm、P8・24cm、P9・29cm、P10・19cmの深さである。このうちP1・3・5~10が柱穴である。	
カマド	東壁北寄りに付設されている。保存状態が良好で袖に使用した石や、煙道部天井が残存する。底部は燃焼部がわずかに凹み、煙道部から煙出し部にかけてしだいに低くなり、煙出し先端部に至ってほぼ垂直に立ち上がっている。煙道部は幅30~40cm、掘り込み40cmで内部は硬質化しており、東壁から煙出し先端部までは110cmある。	
炉	なし	
遺物	(第18図) 土師器坏の底部で、内面が黒色処理されている。	
備考		

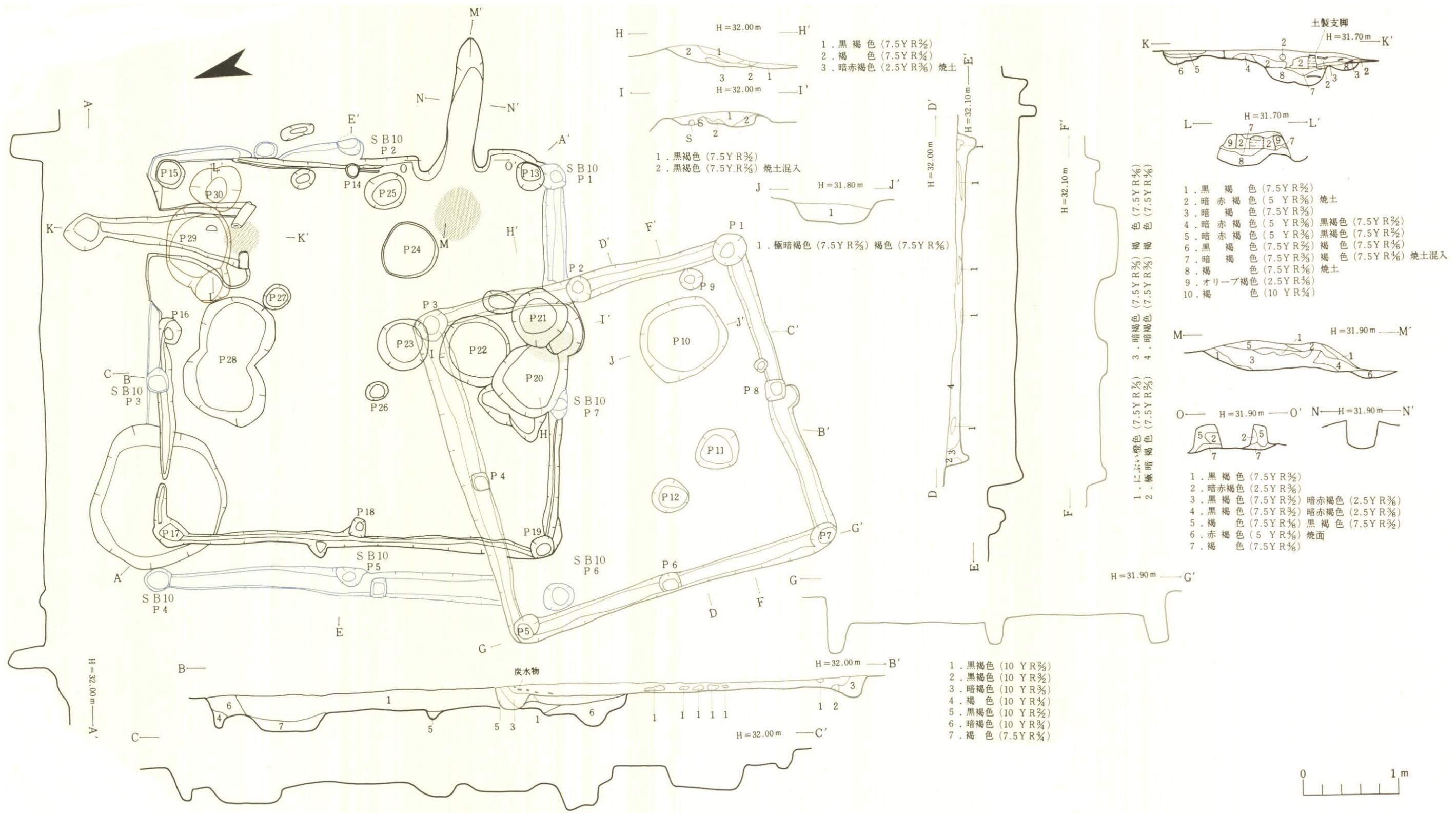
第18図 S106竪穴住居跡出土遺物

## S I O 7 竪穴住居跡 (第19図 図版9)

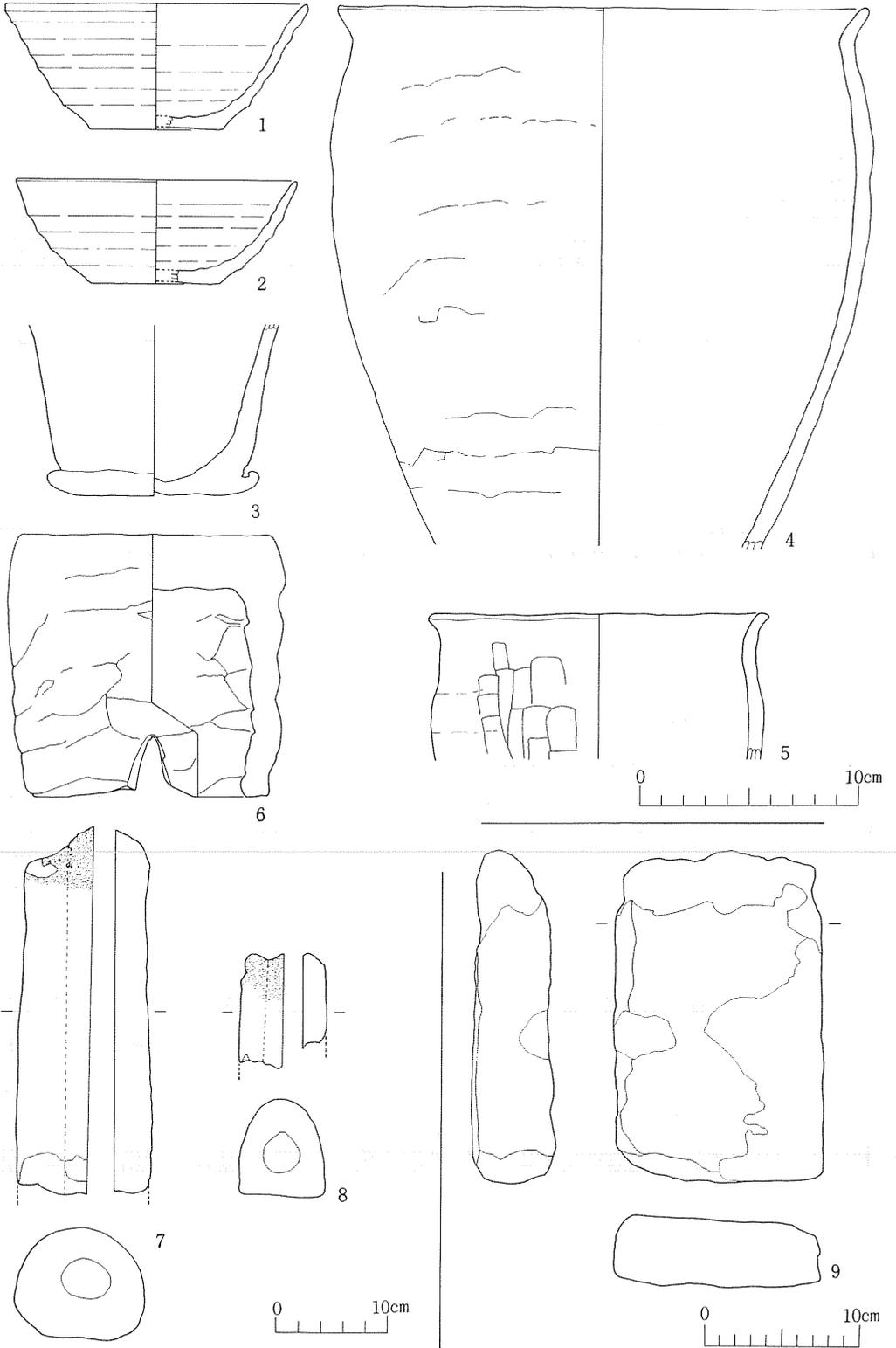
確認面	ME46・MF46グリッド地山面で確認した。
重複	北側でS I O 8・S X O 6を切って構築されている。S B 10との新旧関係は不詳である。
平面形・規模	東壁360 cm、北壁355 cmの方形で、面積12.2㎡である。
堆積土	堆積土中に火山灰を検出した。火山灰は住居中央部では床面直上に塊状となり、壁付近では斜位にレンズ状に堆積する。住居廃絶後に埋土が流入し、完全に埋没しきらない段階で火山灰が流れ込んだものと考えられる。中央部では5 cm、壁付近では2 cmほどの層厚である。
床面	全体に平坦で、特に中央部が堅い。しかし、S I O 8と重複する部分は軟弱である。
壁	北壁と西壁が20～25cm、東壁が8～16cmの高さでほぼ垂直な立ち上がりである。
壁溝	幅20cm前後、深さ6～10cmほどで四壁を全周する。
ピット	P 1・38cm、P 2・37cm、P 3・40cm、P 4・37cm、P 5・38cm、P 6・31cm、P 7・36cm、P 8・35cm、P 9・14cm、P 10・27cm、P 11・12cm、P 12・37cmの深さで、P 1～8が柱穴と考えられる。P 10は最大径95cmの土壌状遺構で褐色土が堆積している。
カマド	東壁の北寄りに付設されたらしく、焼面と、壁外に焼土が見られた。右側袖はわずかに残っていたが、北側袖は全く残存しなかった。煙道部・煙出し部は検出されず、これらがほとんど壁外に出ない形態のものと考えられる。
炉	床中央部に30×20cmの範囲で、小規模な炉が設けられている。
遺物	(第20図) カマド付近から土師器甕(5)の破片が出土した。
備考	

## S I O 8 竪穴住居跡 (第19図 図版9)

確認面	ME47グリッドの黒褐色土面で検出した。
重複	南側をS I 07によって切られ、北西隅をS K 26に切られている。S B 10が本住居跡とほぼ同一位置に同規模で重複する。西壁では外方20~25cmほど離れてS B 10の溝があるが、他の壁では、ほとんど密接する形となっている。
平面形・規模	西壁424 cm、北壁406 cmの方形で、面積18.2 m <sup>2</sup> である。
床面	全体的に平坦であるが、わずかに東側が低くなる。S I 17が床面を掘り下げている。
壁	地山が西から東へ向って傾斜しているので、壁の高さは西壁が最も高く30cmほどある。垂直に近い立ち上がりを示す。
壁溝	四壁ともに検出されるが全周しない。幅は狭く8~15 cm、深さ5~10cm。
ピット	P 13・33cm、P 14・20cm、P 15・28cm、P 16・29cm、P 17・35.7cm、P 18・29.5cm、P 19・37cmの深さで本住居跡の柱穴と思われる。南壁中央部には確認できなかった。P 20~22はそれぞれ31cm・43cm・13cmの深さがあり、中に焼土が入っている。P 23・13cm、P 24・26cm、P 25・17cm、P 26・10cm、P 27・10cm、P 28・21cm、P 29・28cm、P 30・18cmの深さがある。P 26は重複するS B 10の柱穴と考えられる。
カマド	東壁南寄りと北壁東寄りの位置に2基付設されている。前者を第1号カマド後者を第2号カマドとする。第1号カマドは地山土と黒褐色土の混合した袖部が約20cm残り、煙道部は幅30cm、で壁外方へ87cmのびている。底部はほぼ平坦で煙出し部に至って緩やかに立ち上がる。焼面にはフイゴ羽口の破片が突き刺さっていた。第2号カマドは粘性のある砂質土を用いた袖が100cm残存する。焼面付近の袖端部には右袖にフイゴ羽口、左袖に埴が置かれ、燃焼部には土製支脚が置かれていた。袖から煙道部にかけてはしだいに幅を減じ、煙出し部は浅いピット状となる。燃焼部の下にはカマド構築前のピットがあり、焼土が充満していた。
炉	なし
遺物	(第20図) 1・2は土師器坏で、第2号カマド内からの出土である。3・4は土師器甕で、4は第2号カマドから出土、6は土製支脚で下部に逆にV字形の切り込みを有する。9は埴、7・8はフイゴ羽口である。これらはカマド袖部の構築材としての利用が考えられる。



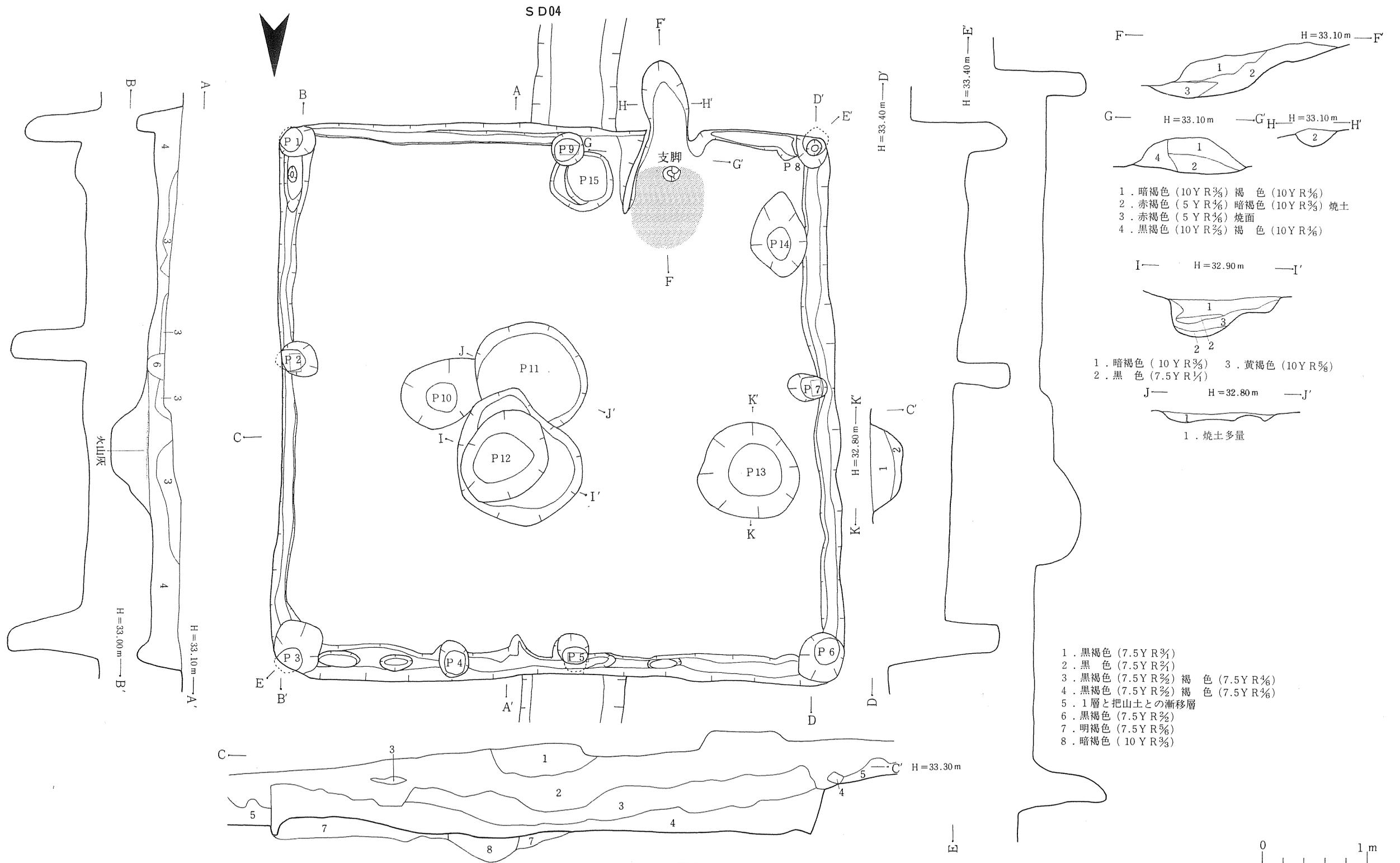
第19図 S107・08竪穴住居跡・SB10掘立柱建物跡



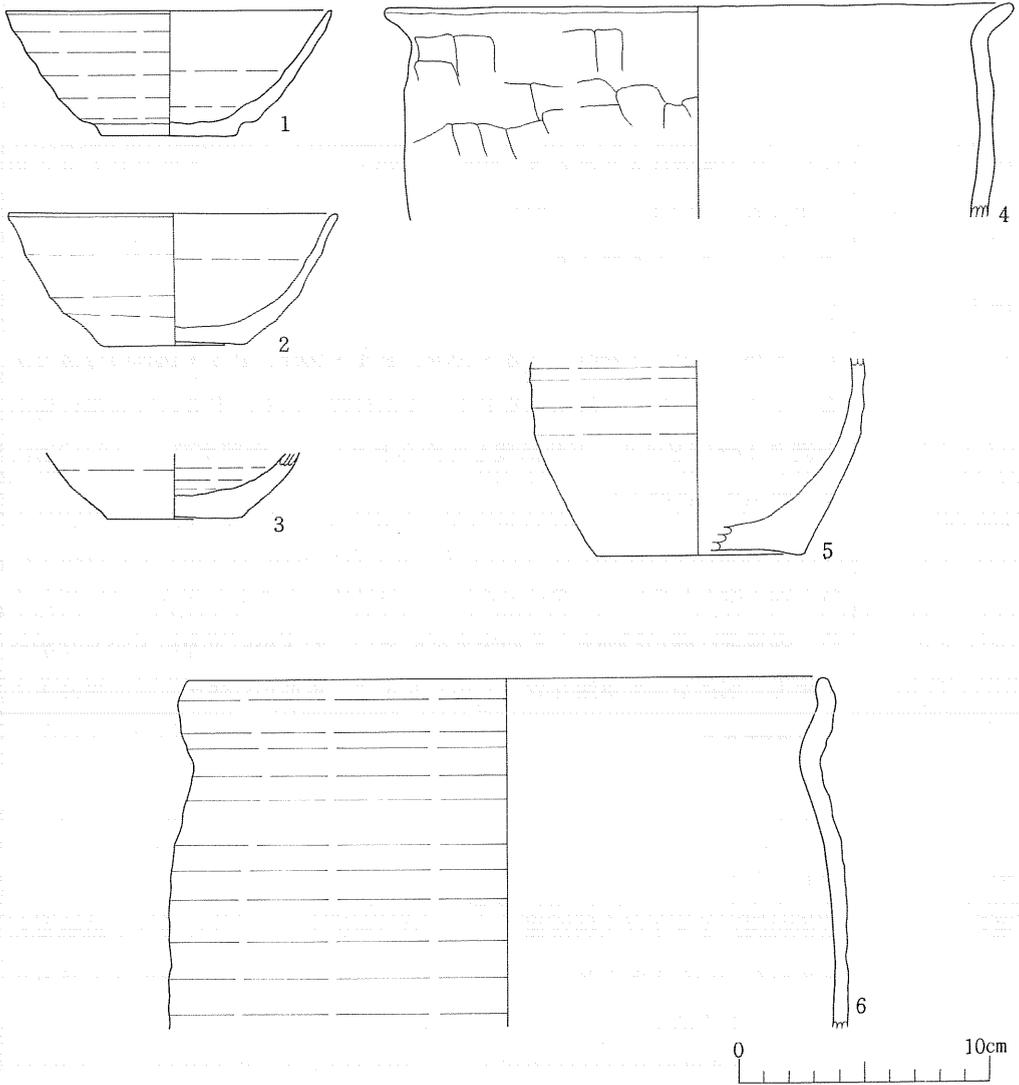
第20図 S107・S108 竪穴住居跡出土遺物

## S I O 9 竪穴住居跡 (第21図 図版10)

確認面	M I 48・49、M J 48・49グリッド地山面で確認した。
重複	住居埋没後にS D04が堆積土上部を南北に通っている。
平面形・規模	西壁515 cm、北壁535 cmの方形で、面積27.7 m <sup>2</sup> 、本遺跡中最大規模である。
堆積土	南北方向の土層断面を観察中、床面レベルに火山灰らしいものの薄層を見出した。厚さ約1 cm。この下には床面から35cmほどの深さの凹みがあり、中に焼土を含む褐色土が入っている。住居使用中にカマド内の焼土を凹みに投入し、床面レベルまで達した後に住居が廃絶され、その直後に火山灰が流入して住居中央部でわずかに凹んだ位置に堆積したものと考えられる。
床面	ほぼ平坦で細かな凹凸は少ない。カマド燃焼部北側が堅く踏み固められている。
壁	南・北壁の中央部がS D04によって掘り込まれているほかは破壊を受けていない。西壁は50cmほどの高さであるが地山が西から東へ向かって傾斜しているため東側ほど低くなり、東壁は8 cmほどの高さとなる。しかし東西方向の土層断面中に東壁の黒色土層中からの掘り込みが見られ、これによると西壁とほぼ同じ高さがある。四壁とも垂直に近い立ち上りを示す。
壁溝	壁に沿って全体に構築。幅15～30cm、深さ北・西壁では5～10cm、他は20cm。
ピット	P 1・56cm、P 2・68cm、P 3・70cm、P 4・24cm、P 5・57cm、P 6・56 cm、P 7・49cm、P 8・38cm、P 9・56cmの深さで、このうちP 1～3・P 5～9の8本が柱穴出ある。P 2・5・7・9にはそれぞれ10×18cm・10×20cm・9×18cm・9×16cmの方形の柱痕跡が明瞭に残っていたが、隅柱には検出されなかった。この他床中央部に3個の円形の凹みがあり特にP 11には焼土が多量に混入しており、これをP 12が切って掘り込んでいた。P 12の床面同一レベルには、火山灰が薄く水平に堆積しており火山灰堆積時にはP 12は床面まで埋土されていたものと考えられる。P 13にも焼土が少量、カマド両脇のP 14・15には多量の焼土が入っていた。
カマド	南壁の西寄りに付設。袖は左側のみ良好に残存。燃焼部内に坏が2個重なって出土。支脚利用と考えられる。煙道部は緩やかに立ち上がり、壁外に65cmほど出ている。燃焼部の土を篩にかけたところ炭化米7粒を検出した。
炉	なし
遺物	(第22図) 土師器坏(1～3)、土師器甕(4～6)が出土した。



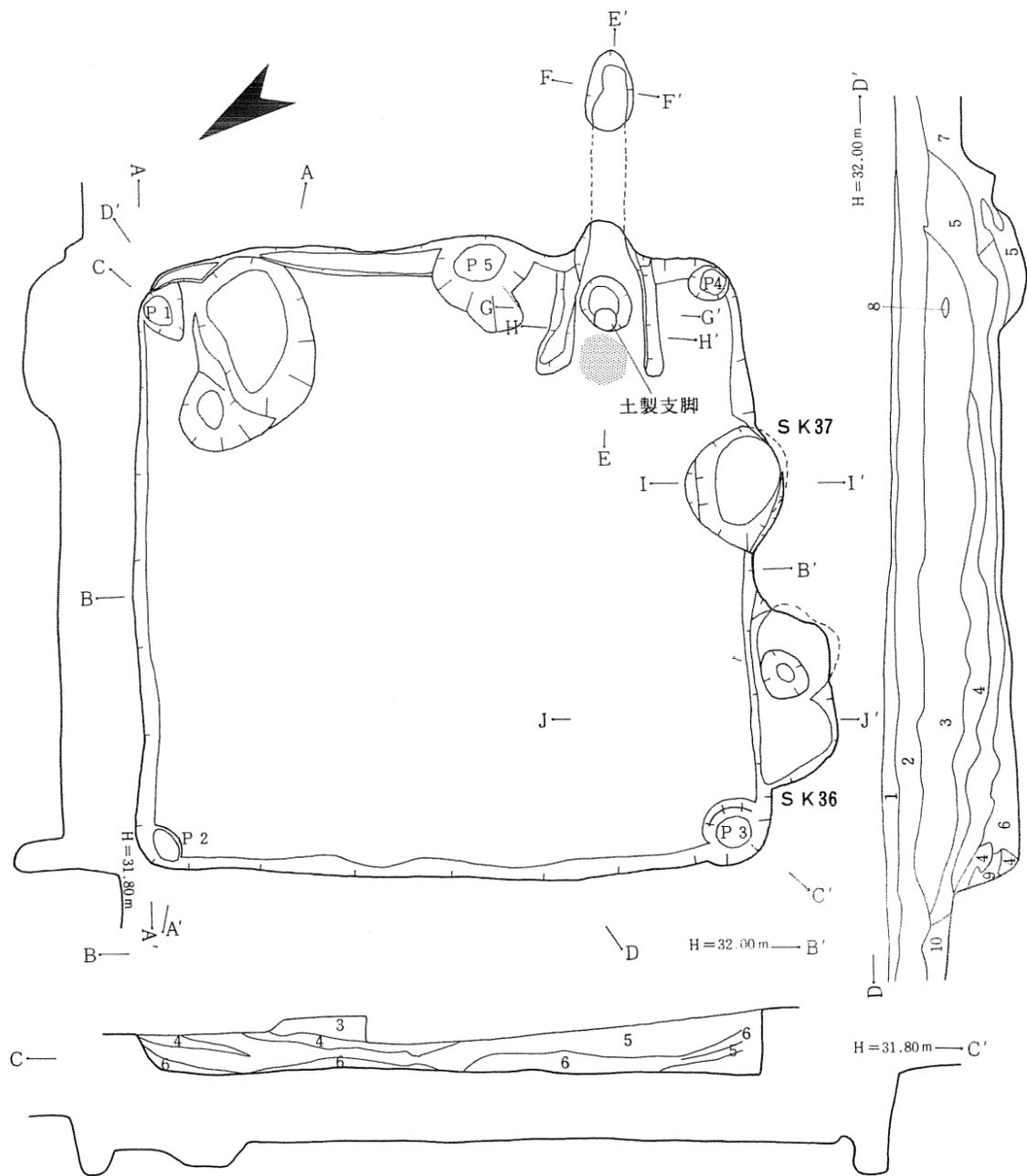
第21図 S109竖穴住居跡



第22図 S 109 竪穴住居跡出土遺物

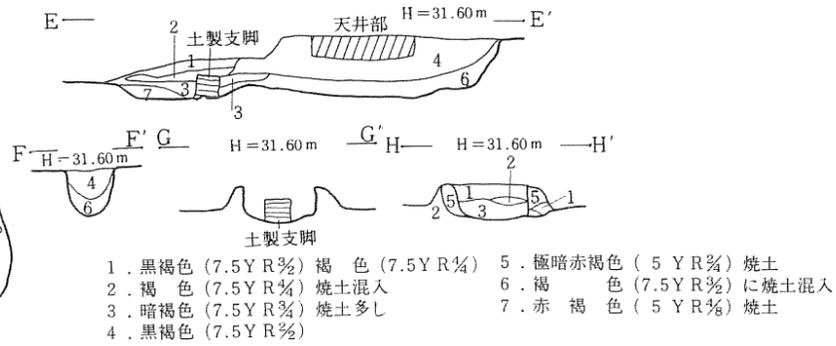
## S110 竪穴住居跡 (第23図 図版10)

確認面	MD51・52、ME51・52グリッド地山面で確認したが、掘り込みは黒色土層から掘り込まれている。。
重複	南側ではSK36・37を切って構築されている。
平面形・規模	西壁376 cm、南壁365 cmの方形で、面積14.4 m <sup>2</sup> である。
床面	全体的に平坦で、細かな凹凸が少ない。中央部は堅くしまっている。
壁	床から地山確認面までの高さは四壁とも20cm以上あるが、西壁が最も高く30～40cmある。52ラインの土層断面では西端で65cmの高さを測る。外方に傾斜するしっかりとした壁である。
壁溝	なし
ピット	P1・26cm、P2・28cm、P3・20cm、P4・16cm、P5・14cmの深さである。このうち住居の四隅にあるP1～4が柱穴である。P3の床面側は地山を高さ4cmほどでリング状に残して作られている。住居東隅に120×72cm、深さ24cmほどの凹みがある。
カマド	東壁の南寄りに付設されている。両袖幅66cm、全長206cmあり、燃焼部に土製支脚が置かれている。煙道部の保存は良好で、天井部が崩落せずに残存する。煙道部は幅が25cmありその中央部においてわずかに下方に下がりながらも煙出し部に至って急激な立ち上がりを示す。東壁から煙出し部の先端までは120cmある。
炉	なし
遺物	(第24図) 1・2は土師器甕でカマド内から出土した。3はカマド燃焼部に据えられていた土製支脚で、下部の相対する2箇所逆U字形の切り込みがある。完形である。
備考	

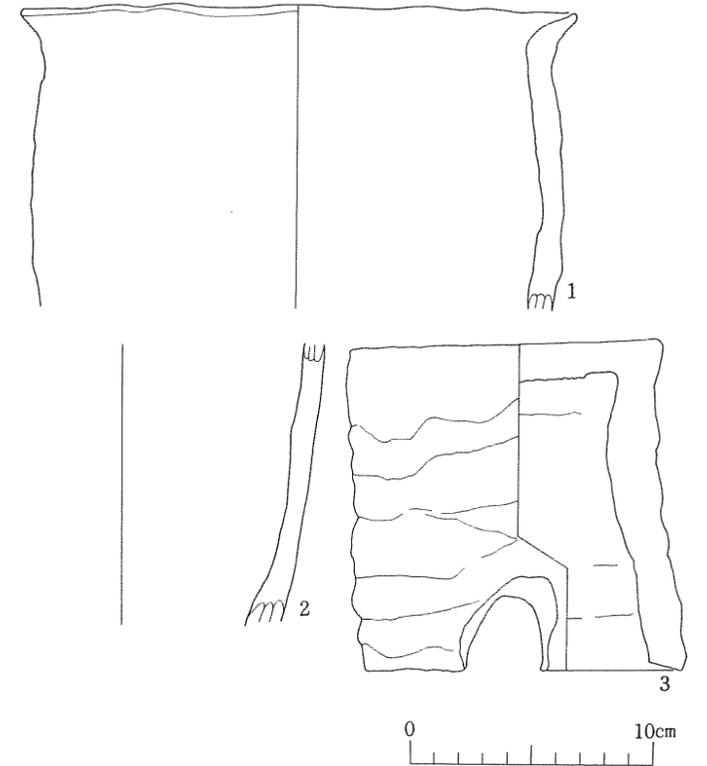
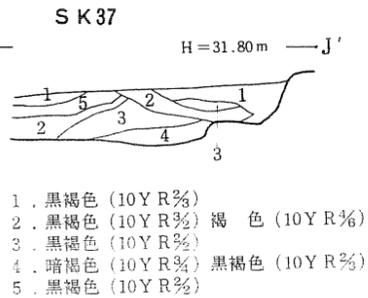
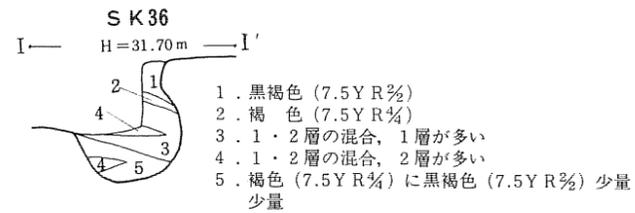


- 1. 黒褐色 (10 Y R%) 砂質土
- 2. 黒色 (10 Y R%)
- 3. 黒褐色 (10 Y R%)
- 4. 黒褐色 (7.5 Y R%)
- 5. 黒褐色 (10 Y R%) 褐色 (10 Y R%)
- 6. 黒褐色 (7.5 Y R%)
- 7. 黒色 (10 Y R%)
- 8. 暗褐色 (7.5 Y R%)
- 9. 褐色 (7.5 Y R%)
- 10. 褐色 (10 Y R%)

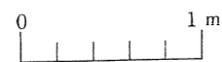
第23図 S I 10 竪穴住居跡・S K 36・37 土壌



- 1. 黒褐色 (7.5 Y R%) 褐色 (7.5 Y R%) 焼土
- 2. 褐色 (7.5 Y R%) 焼土混入
- 3. 暗褐色 (7.5 Y R%) 焼土多し
- 4. 黒褐色 (7.5 Y R%)
- 5. 極暗赤褐色 (5 Y R%) 焼土
- 6. 褐色 (7.5 Y R%) に焼土混入
- 7. 赤褐色 (5 Y R%) 焼土

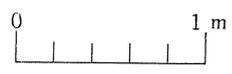
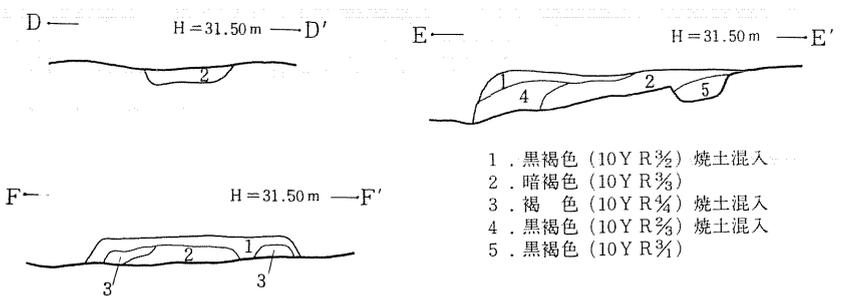
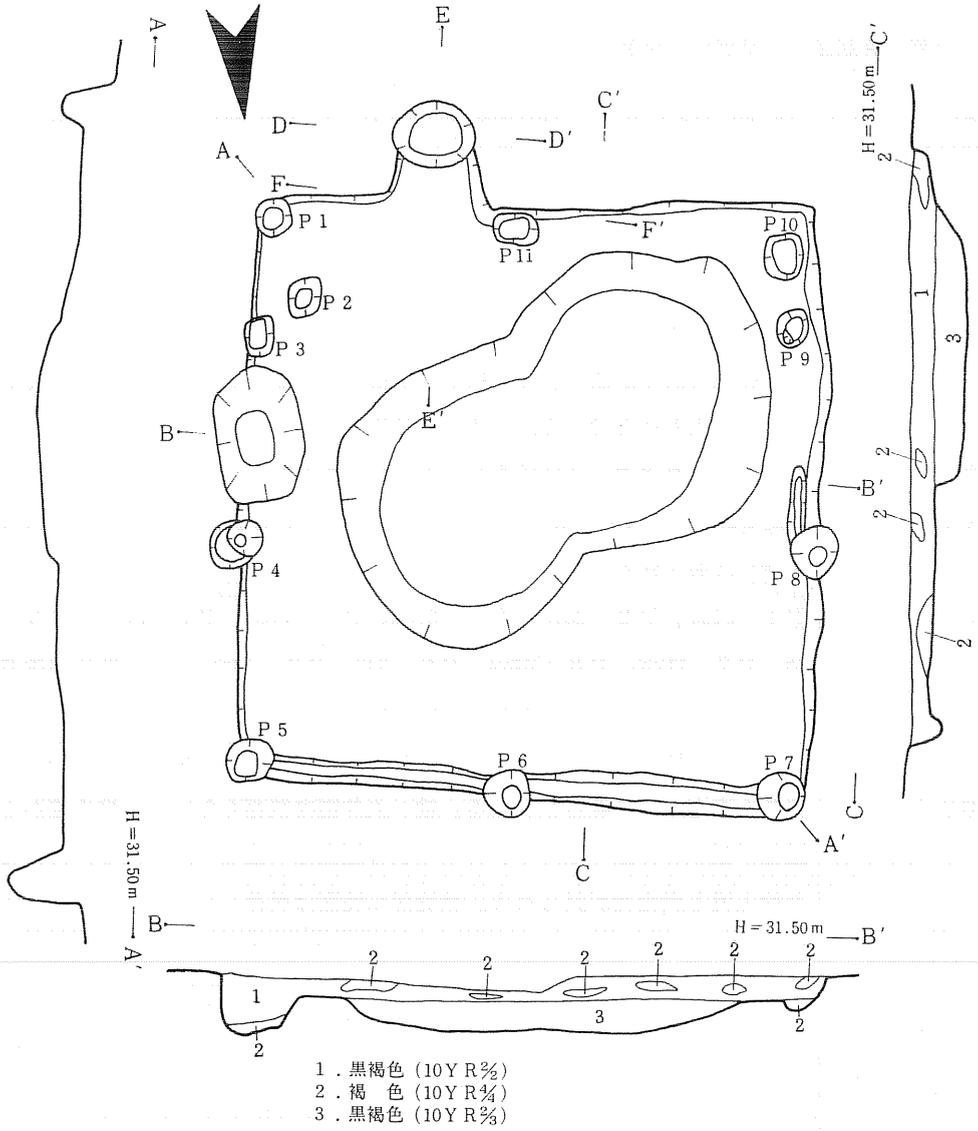


第24図 S I 10 竪穴住居跡出土遺物



## S I 11 竪穴住居跡 (第25図 図版11)

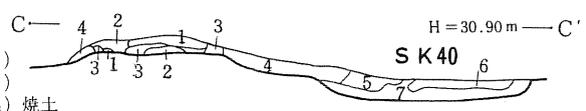
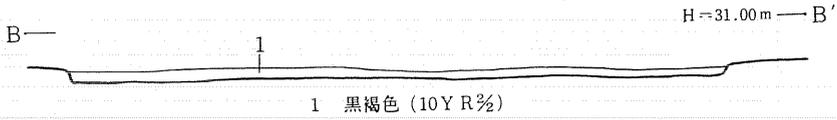
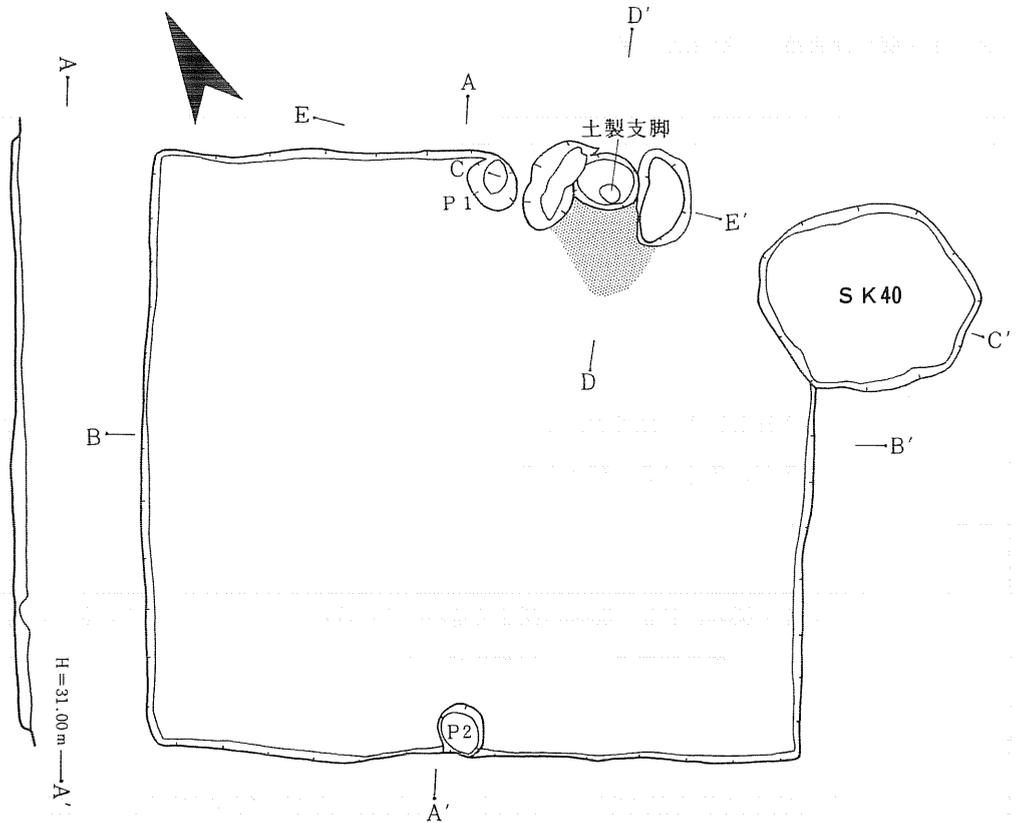
確認面	L I ・ L J 50 グリッド地山面で検出した。
重複	なし
平面形・規模	北壁304 cm、西壁323 cmの方形で、面積10.3㎡である。
床面	平坦であるが、北西隅付近がわずかに低くなっている。中央部に 253×165 cmの範囲で凹みがあり、黒褐色土が堆積している。この中にはカマド焼土がわずかに入り込んでいるが、住居に付随したものか否か定かではない。
壁	5～13cmの高さで、ほぼ垂直な立ち上がりである。
壁溝	北壁全体と、西壁中央部に一部が見られるが、東南壁では全く検出されない。北壁では最大幅20cm、深さ5 cmである。
ピット	P 1 ・ 11cm、P 2 ・ 25cm、P 3 ・ 31cm、P 4 ・ 17cm、P 5 ・ 35cm、P 6 ・ 33 cm、P 7 ・ 28cm、P 8 ・ 24cm、P 9 ・ 34cm、P 10 ・ 14cm、P 11 ・ 35cmの深さである。このうち P 1 ・ P 4～P 8 ・ P 10 ・ 11 が柱穴と考えられる。また、P 3 ・ 9 が対応することから、これも柱穴と考えてよいかも知れない。
カマド	南壁の東寄りに付設されている。袖・天井部は残存しないが、燃焼部から煙道部が緩やかに立ち上がり、ピット状の煙出しへ連なる。煙出しには硬化した焼土塊と炭化物が見られる。燃焼部に焼面は残存しない。
炉	なし
遺物	(第28図) 土師器坏(1)、土師器甕(2～4)の他、土製支脚(3)が出土した。土製支脚は逆U字形の切り込みを有し、上部には製作当初からの孔を有する。カマド燃焼部に置かれたものと思われるが、攪乱されているためか煙道部から出土した。
備考	



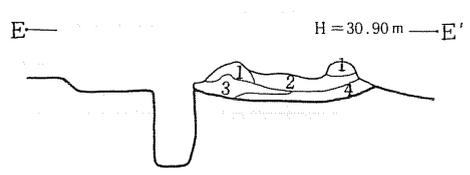
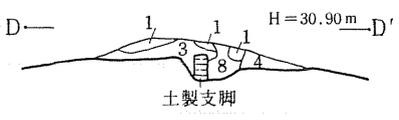
第25図 S I 11 竪穴住居跡

## S112 竪穴住居跡 (第26図 図版11)

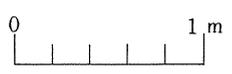
確認図	LH・LI53グリッド地山面で確認した。
重複	東側でSK40を切って構築している。
平面形・規模	南壁342cm、西壁314cmの方形で、面積11.3㎡である。
床面	細かな凹凸が少なく、全体に平坦である。
壁	いずれもわずかに外方に傾斜して立ち上がる。南壁で15cmの高さを測る部分があるが、多くは5～10cmと低い。
壁溝	なし
ビット	P1・58cm、P2・39cmの深さで壁の中央に位置する柱穴であろうと思われる。しかし、他の位置にビットは検出されなかった。
カマド	北壁の東寄りの位置に付設されている。袖は10cmほどの高さで、一部が残存している。燃焼部は円形に凹んでおり、中に土製支脚が置かれている。煙道部・煙出し部の掘り込みはほとんどなく、当初から極めて短いものであったことが窺われる。袖は地山褐色土と共に地山層中の黄褐色砂質土を用いて構築されている。
炉	なし
遺物	(第28図) 5は土師器坏、6はカマド燃焼部内に裾えられていた土製支脚である。完形で下部に相対する2個の逆V字状の切り込み有し、上面中央部に孔を有する。
備考	



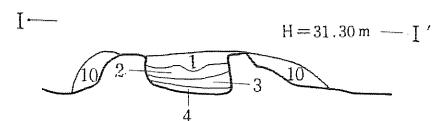
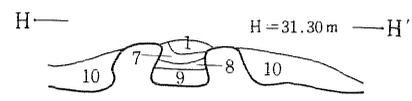
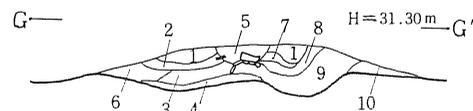
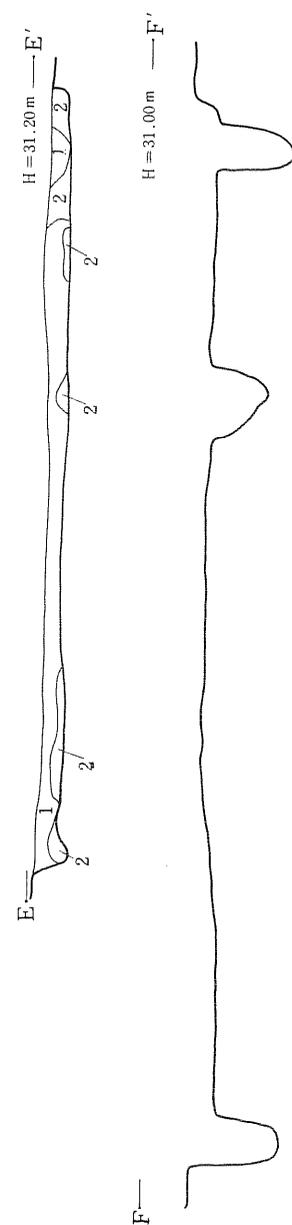
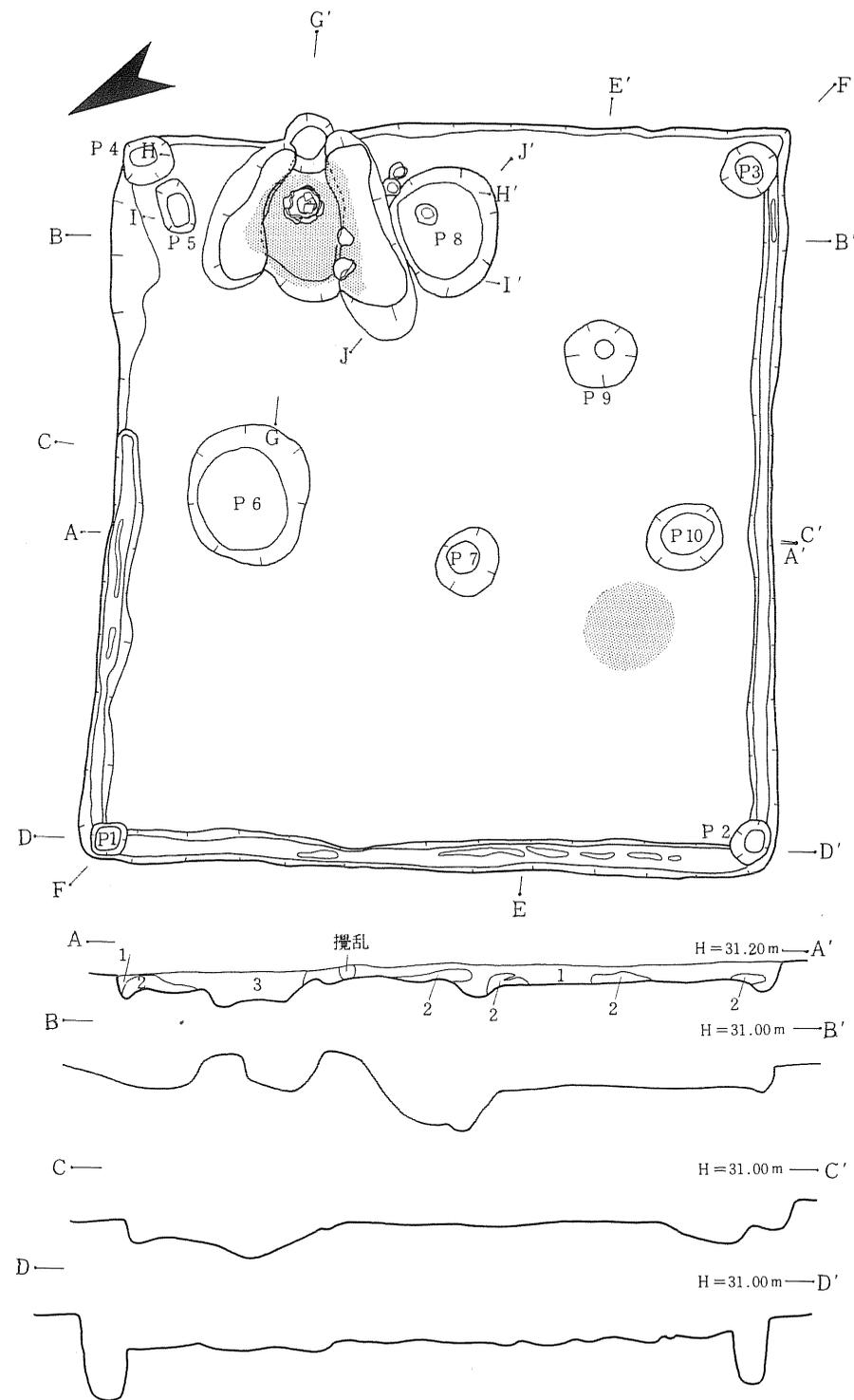
- 1. オリーブ色 (5 YR 4/4)
- 2. 黒褐色 (10 YR 2/2)
- 3. 赤褐色 (2.5 YR 2/2) 焼土
- 4. 暗褐色 (10 YR 2/2)
- 5. 黒褐色 (10 YR 2/2)
- 6. 暗褐色 (10 YR 2/2)
- 7. 灰黄褐色 (10 YR 4/2)
- 8. 黒褐色 (10 YR 2/2)



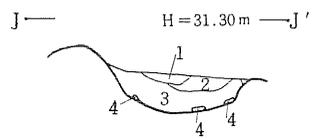
- 1. オリーブ色 (5 YR 4/4)
- 2. 暗赤褐色 (2.5 YR 2/2) 焼面
- 3. 黒褐色 (2.5 YR 2/2)
- 4. 褐色 (2.5 YR 4/4)



第26図 S I 12 竪穴住居跡



- 1. 黑褐色 (10 Y R 3/4)
- 2. 暗赤褐色 (2.5 Y R 3/6) 焼土
- 3. にぶい黄褐色 (10 Y R 3/4)
- 4. 赤褐色 (2.5 Y R 3/6)
- 5. 黑褐色 (10 Y R 3/4)
- 6. 暗褐色 (10 Y R 3/4)
- 7. 明黄褐色 (2.5 Y R 3/6)
- 8. 暗赤褐色 (2.5 Y R 3/4) 焼土
- 9. 黑褐色 (10 Y R 3/4)
- 10. 黑褐色 (10 Y R 3/4)



- 1. 黑褐色 (7.5 Y R 3/2)
- 2. 黑褐色 (10 Y R 3/2)
- 3. 極暗褐色 (7.5 Y R 3/2)
- 4. 黄褐色 (2.5 Y R 3/6) 焼土

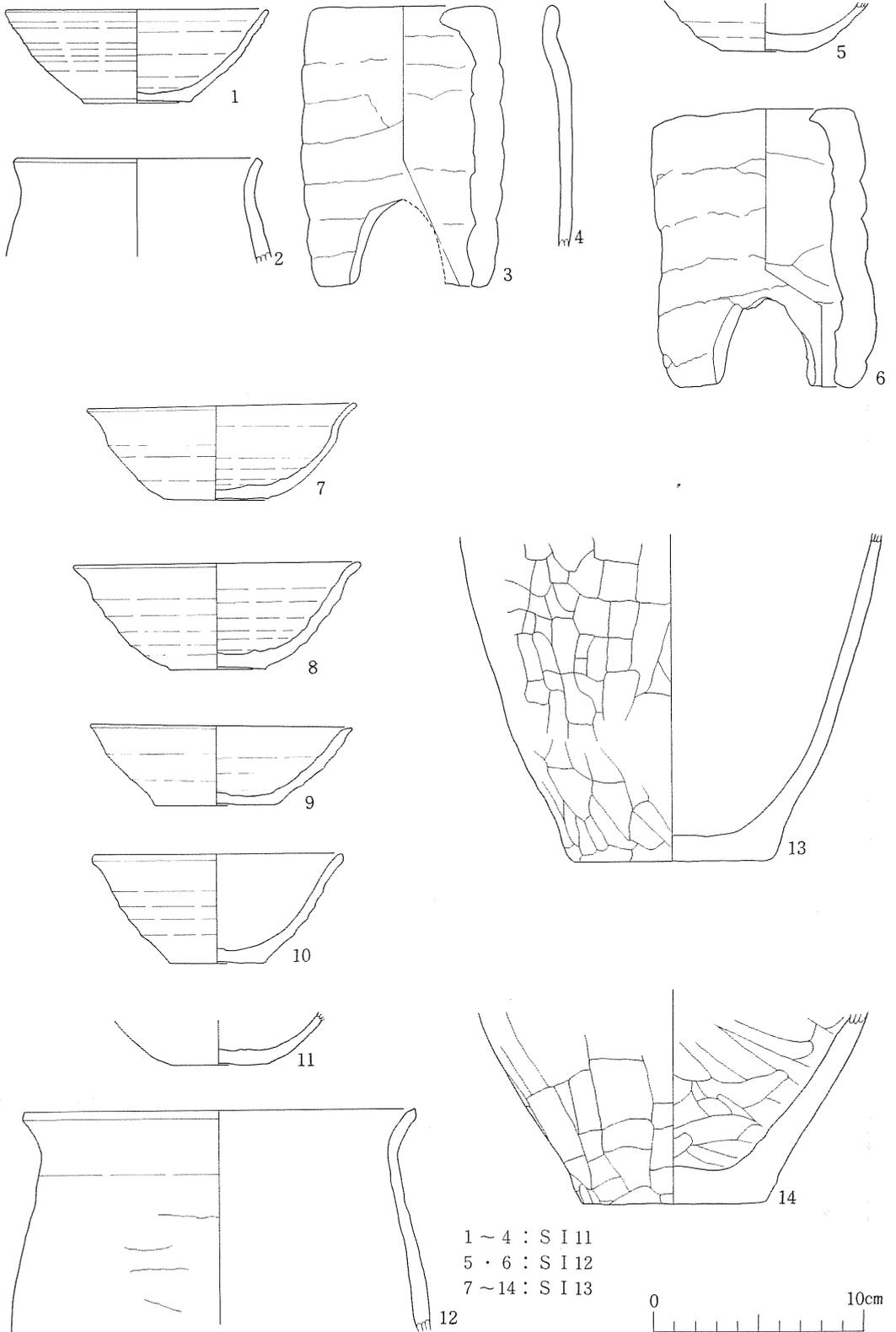
- 1. 黑褐色 (10 Y R 3/4)
- 2. 黑褐色 (10 Y R 3/2)
- 3. 黑褐色 (10 Y R 3/4)



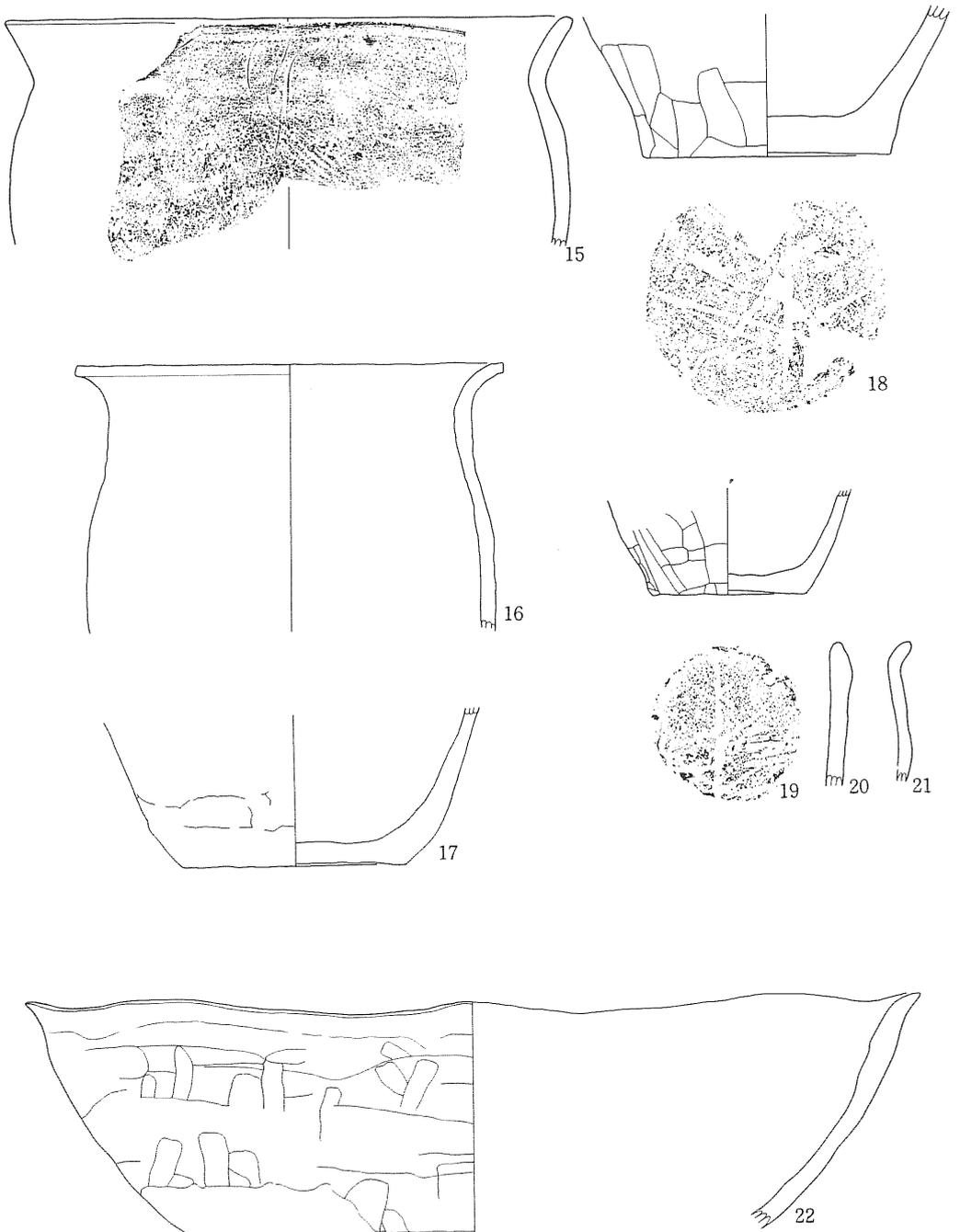
第27図 S113竖穴住居跡

## S 1 1 3 竪穴住居跡 (第27図)

確認面	MB56・57、MC56グリッド地山面で検出した。
重複	なし
平面形・規模	西壁386cm、南壁418cmの方形で、面積は15.5㎡である。
床面	全体がほぼ平坦で安定した作りである。カマド周囲は特に堅くしまっている。
壁	いずれも10～15cmの高さで、ほぼ垂直な立ち上がりを示す。
壁溝	東壁と北壁の東半部を除いて構築されている。幅10～18cm、深さは5cm前後と浅いが、溝底に板状の打ち込み（設置）痕跡が見られる。
ピット	P1・35cm、P2・29cm、P3・39cm、P4・32.8cm、P5・6.7cm、P6・20cm、P7・20cm、P8・20cm、P9・27cm、P10・11cmの深さである。このうち住居の四隅にあるP1～4が柱穴であろうと考えられる。P7には、明黄褐色砂質土が充満していた。P8はカマド右側にあり、黄褐色砂質土が内面全体に塗られていた。
カマド	東壁の北寄りに付設されている。天井部は一部が良好に残存し煙道部は極めて短かく、壁外方にわずかに張り出す程度である。両袖とも幅広く、厚みのある袖で最大幅35～45cmを測り、右側袖は角ばった石を用いている。燃烧部から土器が重なり合って出土。土器は甕及び、坏で、坏は倒立した状態で固定されており支脚として用いられていたと思われる。坏の上には甕がすえられ使用時の状態を留めている。袖は地山褐色土を主体に所々に明黄褐色砂質土がブロック状に混入する。
炉	南壁寄りの床面に径50cmの円形の炉状の凹みが構築されている。
遺物	(第28図・第29図) 土師器坏(7～11)、土師器甕(12～21)、土師器鍋(22)が出土した。18・19の甕底部には木葉痕がある。18の甕はカマド燃烧部に支脚として使用され、坏7・9・10はカマド右側の袖付近から出土した。
備考	



第28図 S I 11・12・13 竪穴住居跡出土遺物

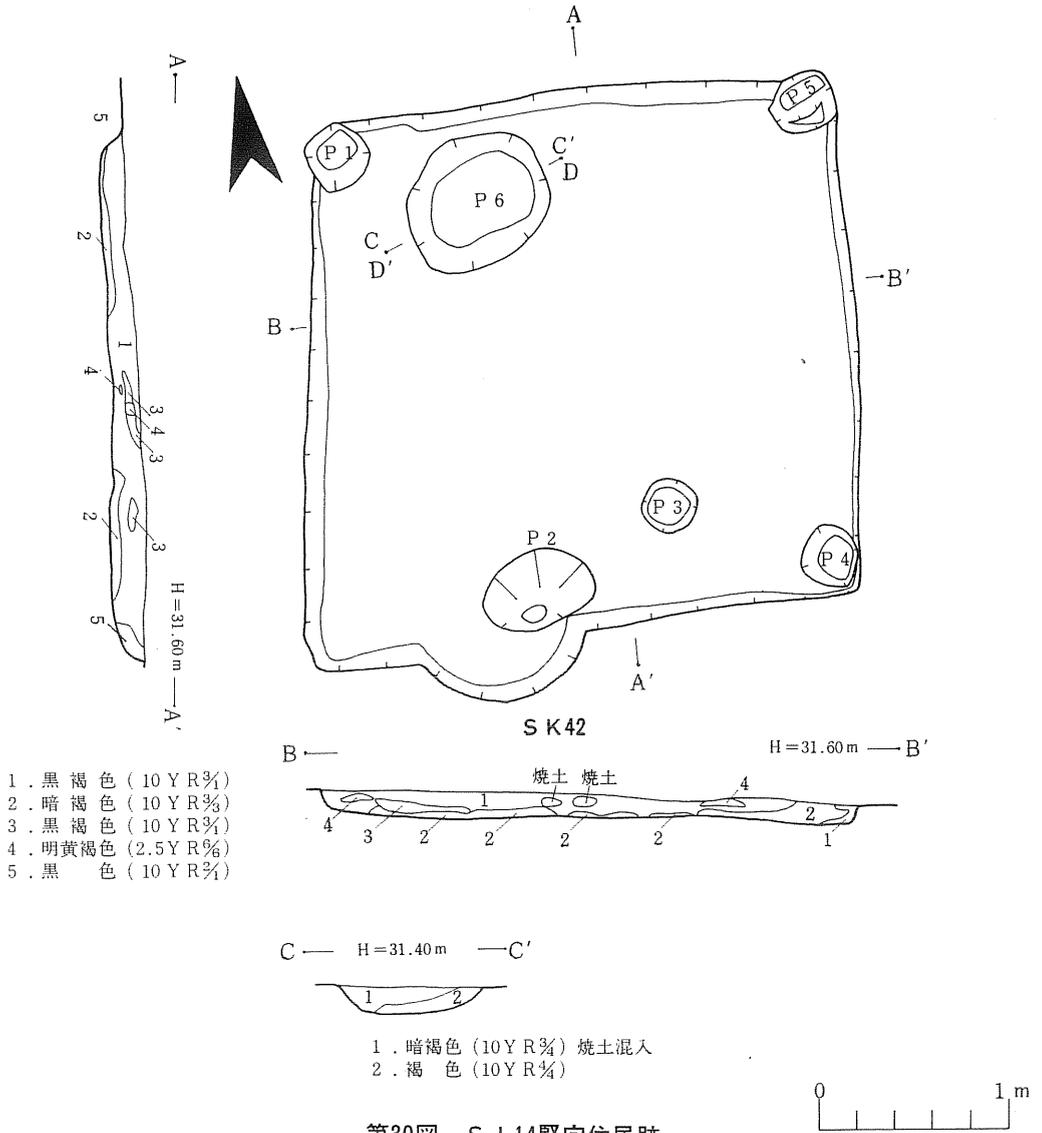


0 10cm

第29図 S I 13 豎穴住居跡出土遺物

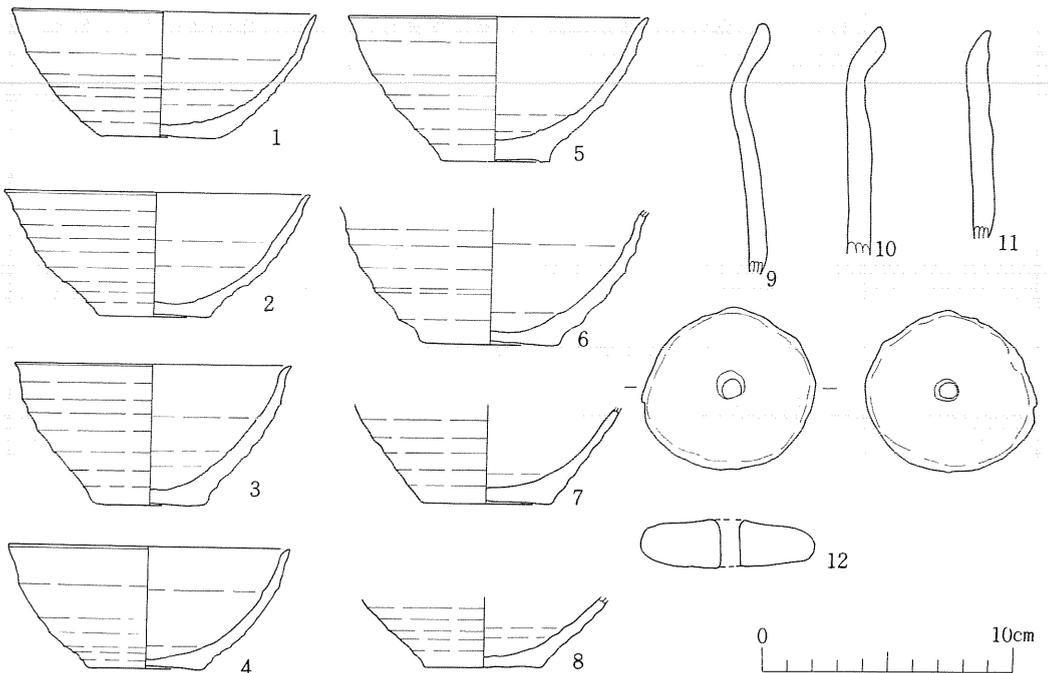
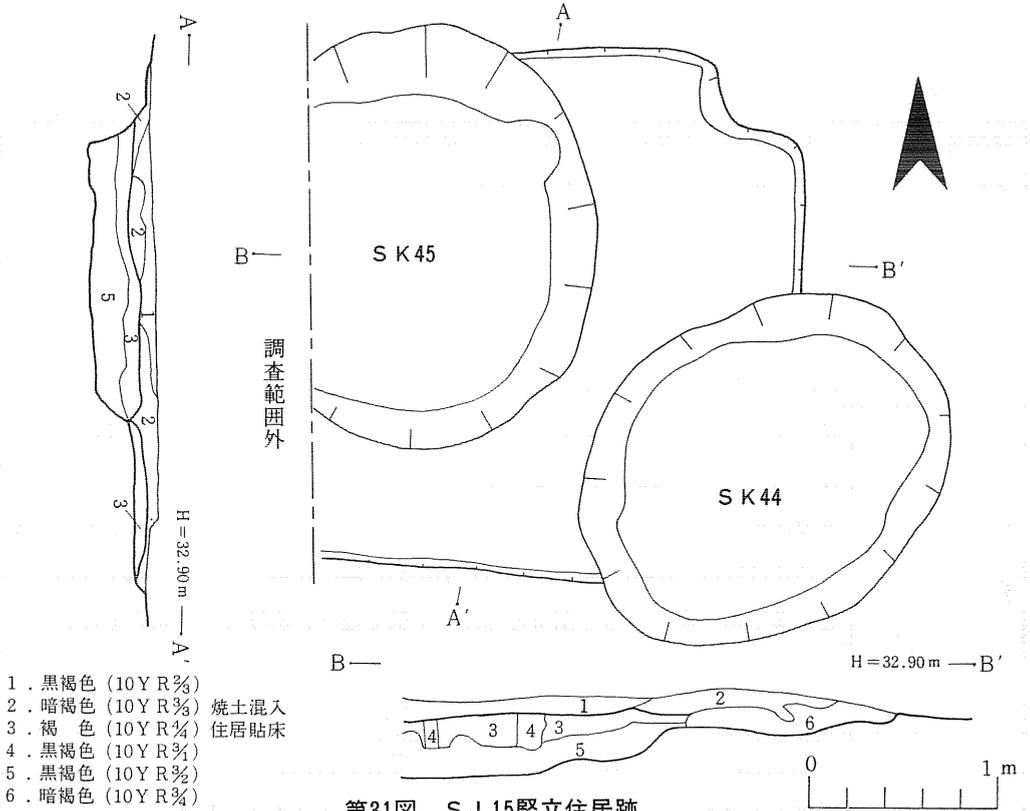
## S I I 4 竪穴住居跡 (第30図 図版12)

確認面	MC56・MD56グリッド地山面で検出した。
重複	なし
平面形・規模	西壁285cm、南壁290cmの方形で、面積8.3㎡である。
床面	全体にほぼ平坦で、細かな凹凸がないが、特に踏み固められた部分もない。
壁	四壁ともに低く10cm前後の高さで、ほぼ垂直に立ち上がっている。
壁溝	なし
ピット	P1・33cm、P2・10cm、P3・13cm、P4・32cm、P5・31cm、P6・16cmの深さである。このうちP1・4・5が柱穴と考えられるが、西南隅には検出されなかった。P6には焼土が多量に混入しているが、この位置で火をたいたものではない。
カマド	検出されない。
炉	なし
遺物	土師器坏、甕の小破片が少量出土した。
備考	



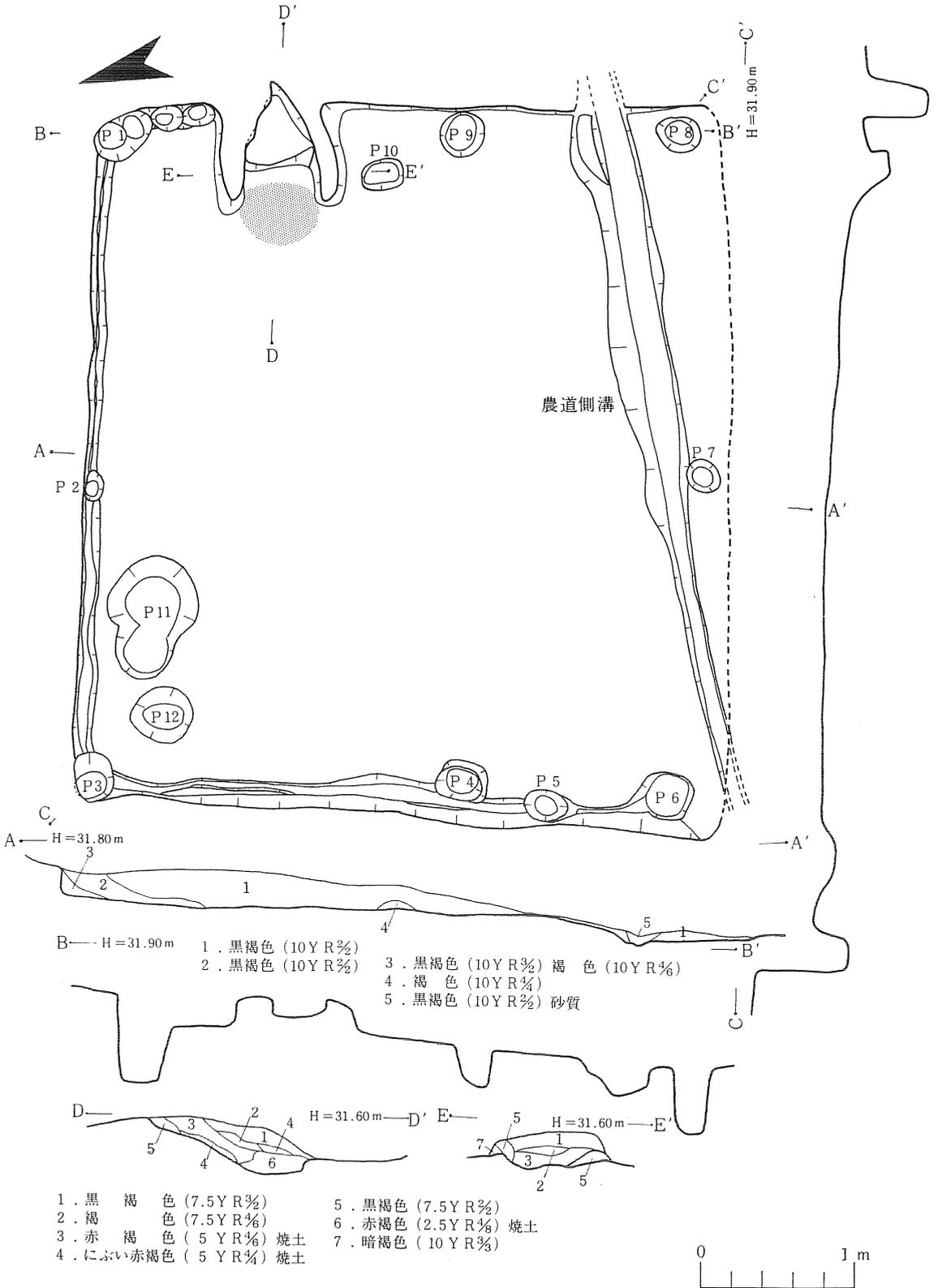
S 1 1 5 竪穴住居跡 (第31図 図版12)

確認面	ME54グリッド地山面で確認した。
重複	S K 44・45に大きく掘り込まれている。
平面形・規模	西側が調査範囲外に入り込んでおり全容は不明であるが、北壁と南壁の間は280cmある。
床面	幾分凹凸があり、さほど堅くはない。
壁	残存する壁は全体に低く5～8cmの高さで、丸みを帯びて外方に傾斜しながら立ち上がる。
壁溝	なし
ピット	なし
カマド	検出されない。
炉	なし
遺物	(第32図) 土師器坏(1～8)が比較的多く出土した。9～11は甕口縁部破片である。他に土製紡錘車が各1点出土した。
備考	カマド・柱穴は残存していないが、壁の状況から竪穴住居跡であると考えられる。



## S I 1 6 竪穴住居跡 (第33図 図版12)

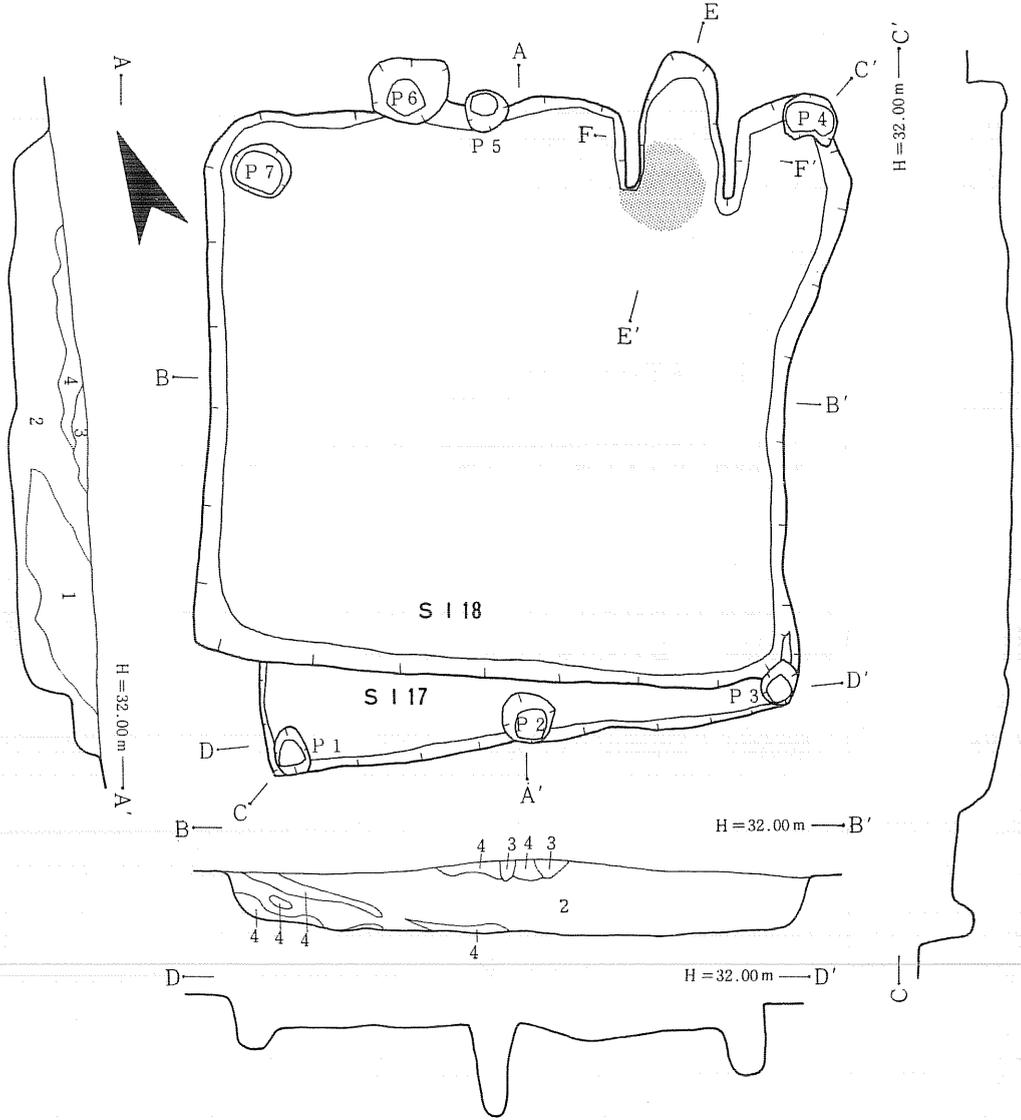
確認面	L E 40・41、L F 40・41グリッドの地山面で検出した。
重複	現代の農道によって住居南側が破壊を受けている。
平面形・規模	北壁450cm、東壁400cmの方形で、面積19.1㎡を測る。
堆積土	住居跡の輪郭を確認した時点で住居堆積土上面の一部に火山灰を検出した。住居確認面に点々としており、幾分塊状となって3cmほどの厚さを有するものもあった。堆積土下方には全く見られなかった。
床面	細かな凹みが見られ、南ほど床面レベルが低くなり、南北両端では18cmの高低差がある。床中央部が固くなっている。
壁	西壁が幾分外方に傾斜するが、北・東壁はほぼ垂直に立ち上がっている。北壁と西壁は20cm～38cmの高さがある。しかし、地山が南に向かって低くなることと、農道端の溝によって南ほどしだいに低くなり、南壁は全く残存しない。
壁溝	北壁と西壁に幅8～20cm、深さ10cm～15cmほどで構築されている。
ピット	P 1・37cm、P 2・9cm、P 3・22cm、P 4・21cm、P 5・10cm、P 6・17cm、P 7・13cm、P 8・41cm、P 9・28cm、P 10・33cm、P 11・6cm、P 12・14cmの深さである。このうちP 1～4・6～9が柱穴と考えられる。
カマド	東壁の北寄りに付設されている。煙道部は極めて短く、燃焼部から緩やかに立ち上がり、壁外にわずかに出ているにすぎない。袖には地山黄褐色土と暗褐色土を用いている。
炉	なし
遺物	土師器高台坏と土師器甕口縁部の破片が出土している。坏は内面に黒色処理が施されている。
備考	



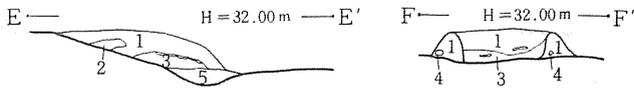
第33図 S I 16 竪穴住居跡

## S I 17 竪穴住居跡 (第34図 図版8・12)

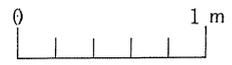
確認面	LD45グリッド地山面で確認した。
重複	S I 18によって大部分が切られている。
平面形・規模	南壁が280cmあり、一辺がほぼこの大きさの方形を呈するものと考えられる。
床面	南端部のみであるが、平坦な床である。
壁	残存するのは南壁と、東・西壁の一部のみである。ほぼ垂直に近い立ち上がりを示す。
壁溝	検出されない。
ピット	P 1・10cm、P 2・50cm、P 3・25cmの深さで、この3本が住居南側の柱穴である。
カマド	検出されない。
炉	なし
遺物	なし
備考	



- 1. 極暗褐色 (7.5YR $\frac{5}{2}$ ) 明褐色 (7.5YR $\frac{6}{2}$ )
- 2. 黒褐色 (7.5YR $\frac{3}{2}$ )
- 3. 明褐色 (7.5YR $\frac{6}{2}$ )
- 4. 黒褐色 (7.5YR $\frac{3}{4}$ )



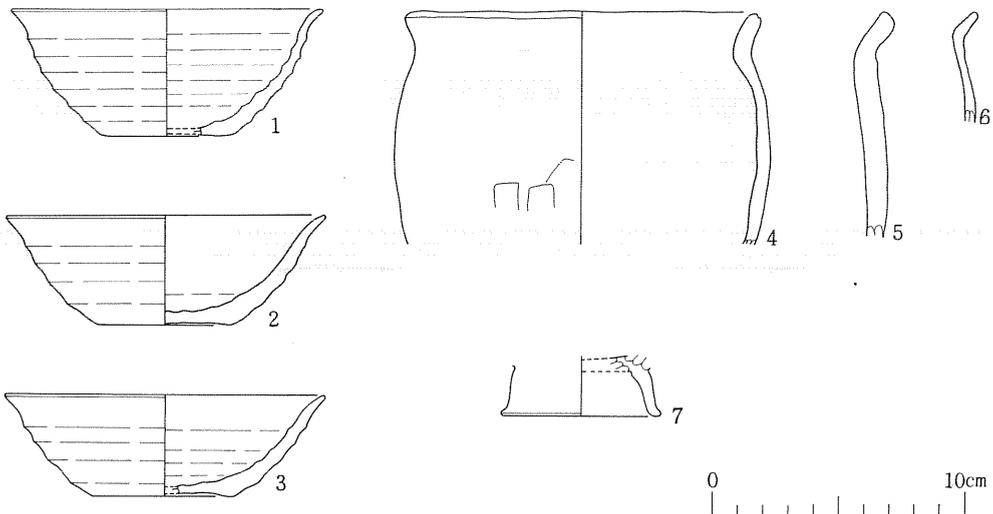
- 1. 黒褐色 (7.5YR $\frac{5}{2}$ )
- 2. 褐色 (7.5YR $\frac{4}{2}$ )
- 3. 黒褐色 (7.5YR $\frac{3}{2}$ ) 赤褐色 (5YR $\frac{6}{2}$ )
- 4. にぶい黄褐色 (10YR $\frac{6}{2}$ )
- 5. 赤褐色 (2.5YR $\frac{6}{2}$ ) 焼面



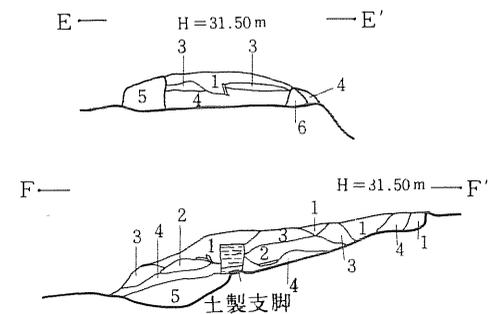
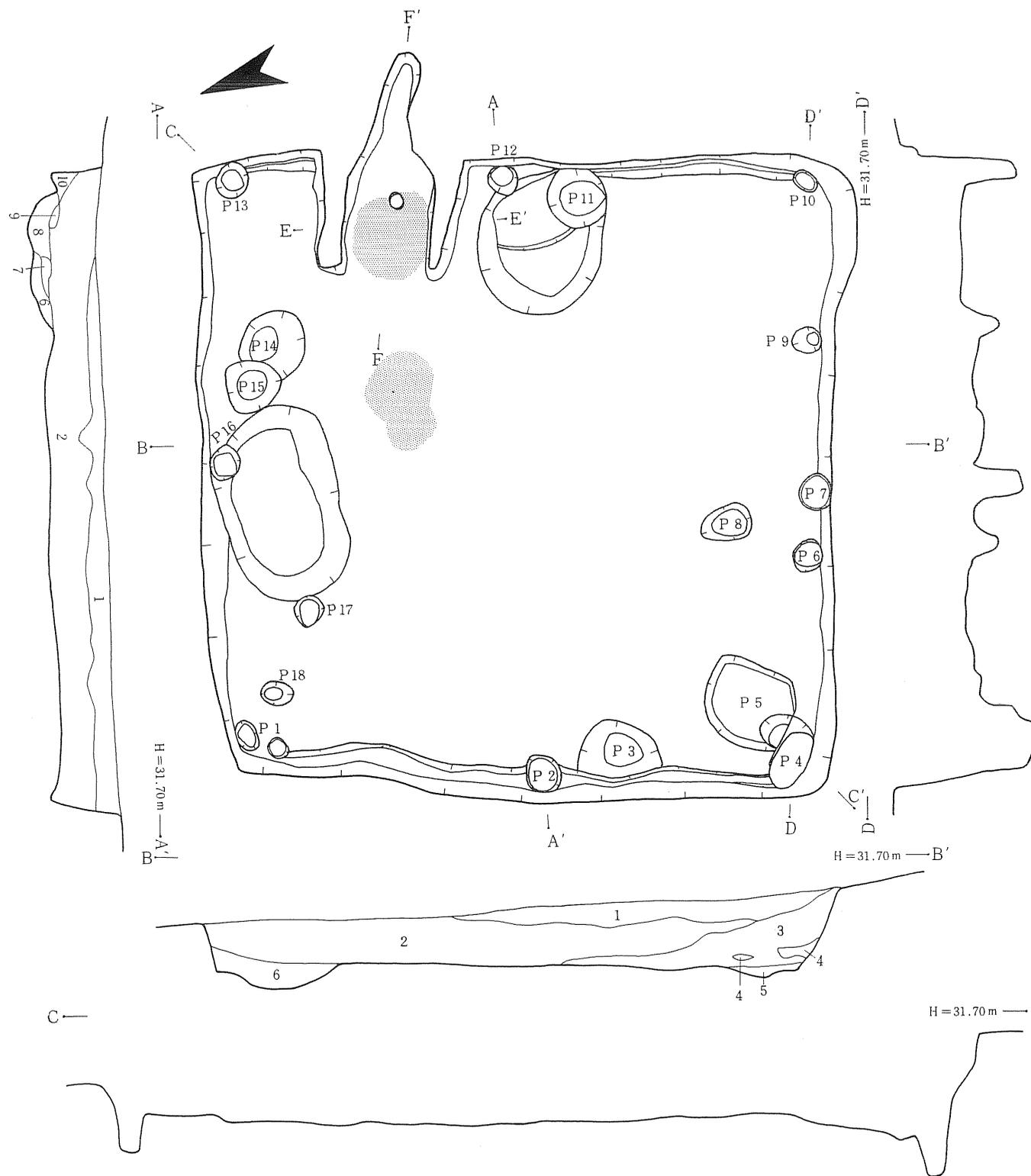
第34図 S I 17・18 竪穴住居跡

S I 18 竪穴住居跡 (第34図 図版12)

確認面	LC45・LD45グリッド地山面で検出した。
重複	S I 17を切って構築している。
平面形・規模	東壁320cm、北壁330cmの方形を呈する。面積は9.7㎡である。
床面	全体に平坦でしっかりとしている。殊に中央部が踏み固められている。
壁	北壁は幾分外方に傾斜するが、他は垂直に近い立ち上がりを示している。南壁が最も高く、確認面まで35cmある。
壁溝	なし
ピット	P4・23cm、P5・37cm、P6・26cm、P7・9cmの深さである。P4・5・7は本柱居跡の柱穴と考えられるが、北壁以外にピットは検出されなかった。
カマド	北壁の東寄りに付設されている。両袖は残存するが天井部は崩落している。煙道部は短かく、緩やかに外方に立ち上がっている。
炉	なし
遺物	(第35図) 土師器坏(1~3)、土師器甕(4~6)、高台(7)が出土した。
備考	

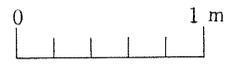


第35図 S I 18竪穴住居跡出土遺物



- 1. 黑褐色 (7.5YR $\frac{3}{2}$ )
- 2. 明赤褐色 (2.5YR $\frac{5}{6}$ ) 烧土
- 3. 黄褐色 (10YR $\frac{5}{6}$ )
- 4. 暗褐色 (7.5YR $\frac{3}{4}$ )
- 5. 褐色 (7.5YR $\frac{4}{4}$ ) 砂質
- 6. 明褐色 (7.5YR $\frac{5}{6}$ )
- 7. 暗赤褐色 (2.5YR $\frac{3}{6}$ ) 烧面

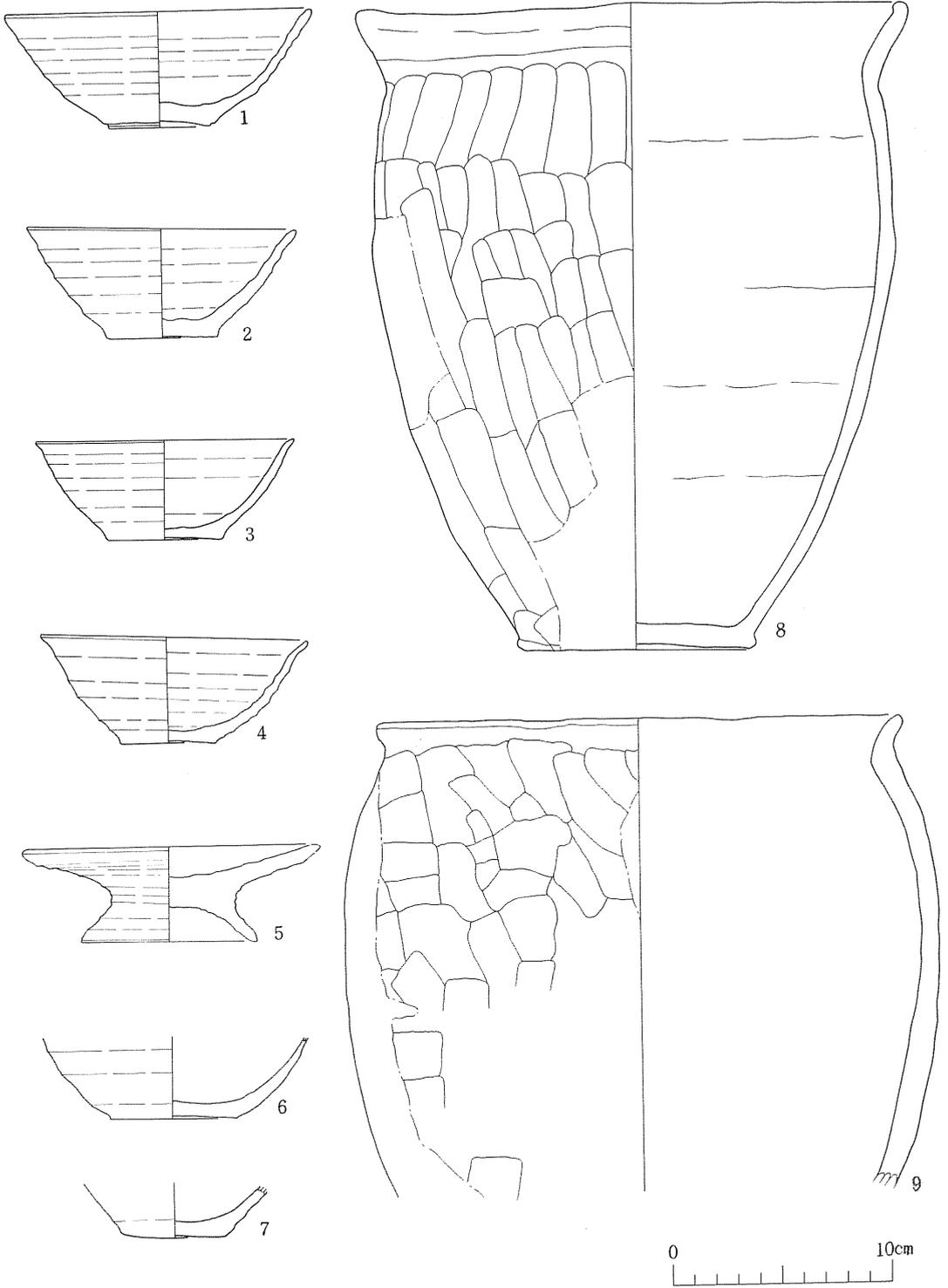
- 1. 黑褐色 (7.5YR $\frac{3}{2}$ )
- 2. 暗褐色 (7.5YR $\frac{3}{4}$ )
- 3. 褐色 (7.5YR $\frac{4}{4}$ )
- 4. 黑褐色 (7.5YR $\frac{3}{2}$ )
- 5. 暗赤褐色 (5YR $\frac{3}{6}$ )
- 6. 黑褐色 (7.5YR $\frac{3}{2}$ ) 褐色 (7.5YR $\frac{4}{4}$ )
- 7. 暗褐色 (7.5YR $\frac{3}{4}$ )
- 8. 暗褐色 (7.5YR $\frac{3}{4}$ )
- 9. 褐色 (7.5YR $\frac{4}{4}$ )
- 10. 暗褐色 (7.5YR $\frac{3}{4}$ )



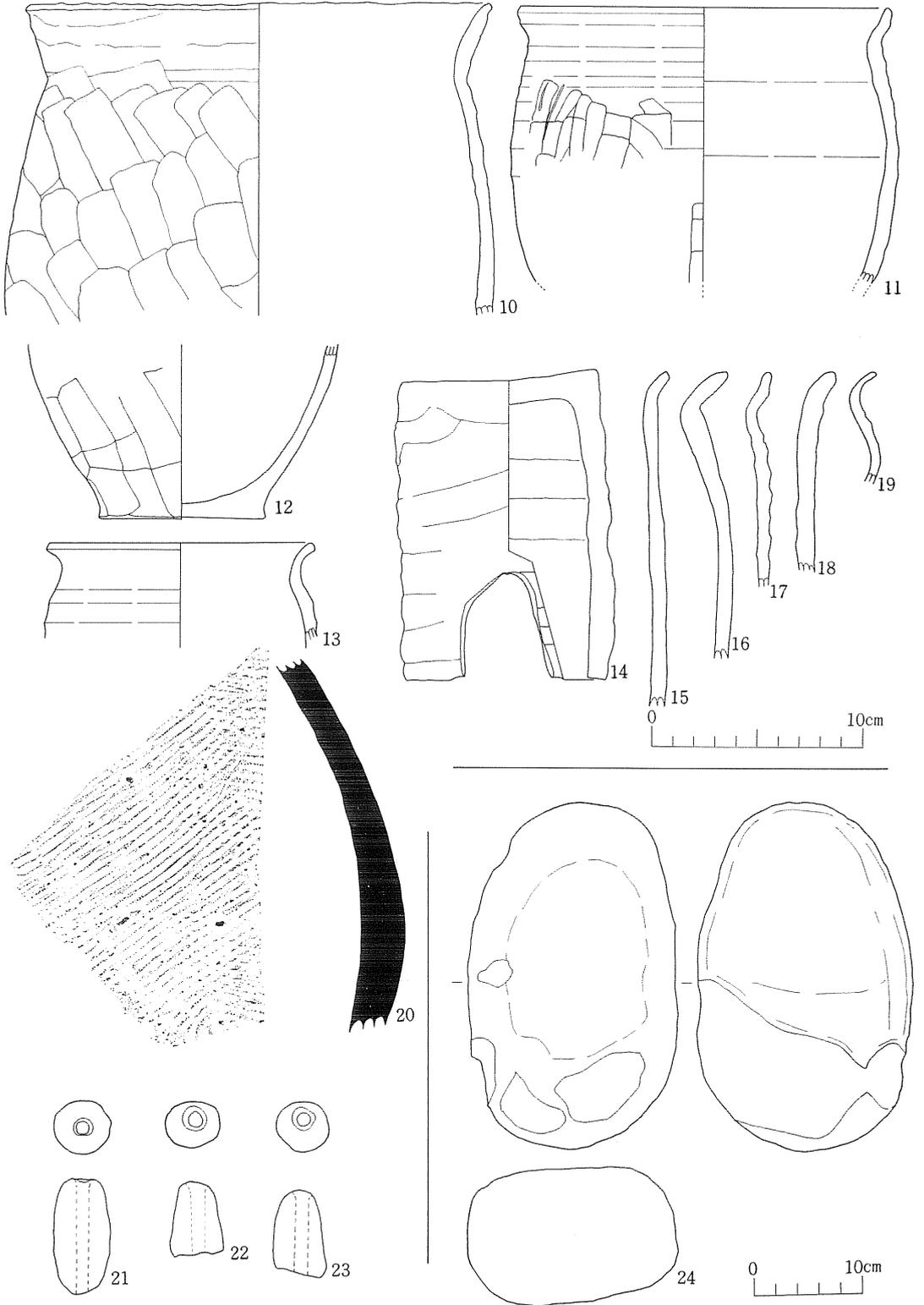
第36图 S119竖穴住居跡

## S119 竪穴住居跡 (第36図 図版8・12)

確認面	L B45、L C45・46グリッドの地山面で確認したが、遺構の輪郭が不鮮明なため、遺構内を掘り下げてから住居輪郭の検出に努めた。
重複	なし
平面形・規模	東壁460cm、南壁440cmの方形で、面積は19.3㎡である。
床面	全体にはほとんど同一レベルであるが、中央部に細かな凹凸がありあまり堅くない。
壁	南壁が幾分外方に傾斜するほかはほぼ垂直に近い立ち上がりを示す。
壁溝	東・西壁に幅15～22cm、深さ5～7cmほどに構築されているが南・北壁には認められない。
ピット	P1・64cm、P2・32cm、P3・12cm、P4・45cm、P5・41cm、P6・17cm、P7・34cm、P8・17cm、P9・11cm、P10・32cm、P11・27cm、P12・30cm、P13・28cm、P14・14cm、P15・18cm、P16・27cm、P17・22cm、P18・24cmの深さである。このうち、P1・2・4・7・10・12・13・16が柱穴であろう。
カマド	東壁の北寄りに付設されている。煙道部は燃焼部から緩やかに立ち上がり、壁の外方には70cmほど突出する。袖は地山の砂質土を用いており土製支脚が置かれている。
炉	カマド西側床面に、70×48cmの範囲で焼土がある。
遺物	(第37図・第38図) 1～4・6・7は土師器坏、5は土師器高台皿である。8は全形を知り得る唯一の甕で、9～13、15～19も土師器甕である。14はカマド燃焼部に置かれていた土製支脚、20は須恵器甕である。21～23は管状土錘、24は河原石の片面に磨痕を有するもので、P14上面から出土した。
備考	北壁寄り中央部床面に、135×82cmの楕円形で、深さ20cmほどの凹みがある。東壁のカマド右側にも106×85cm深さ15cmほどの浅い凹みがあり、この中には焼土が混入している。



第37図 S I 19 竪穴住居跡出土遺物(1)



第38図 S I 19 竖穴住居跡出土遺物(2)

## 2 土壙

調査区内のほぼ全域から検出され、その総数は47基である。うち遺物の出土した遺構は25基で、これらはいずれも平安時代に属する。他のものについても、形態、規模、遺構の確認面（主として2層中位面から下位面にかけて検出）等から同時代に属すると考えられ本項で一括して記載した。

### S K 0 1 土壙 （第39図 図版13）

平面形は130cm×120cmの楕円形。深さ10cm。堆積土に多量の炭化物と焼土を混入する。壁面の一部は火熱により硬化している。

出土遺物 （第47図・13） 底面より土師器坏、甕及び須恵器甕の破片出土、坏は底部に回転糸切り痕。須恵器甕13は、外面に斜状の、内面に放射状のタタキ及びアテ痕を留どめており、その他自然釉を付着している細片も出土。

### S K 0 2 土壙 （第39図 図版13）

平面形は150cm×134cmの楕円形。深さ34cm。底面は凹凸が激しく、中央部で1段挿鉢状に凹む。堆積土は焼土を混入する軟質の黒褐色土であるが、凹み部分では多量の褐色土を混入する。

出土遺物 1層より土師器坏の破片出土

### S K 0 3 土壙 （第39図 図版13）

平面形は170cm×142cmの楕円形。深さ8～16cm。東側が1段凹む。堆積土は地山褐色土を多量に混入する他、凹み部分では焼土、炭化物の混入が多い。

出土遺物 4層より土師器坏、甕の破片出土。坏は底部片で回転糸切り痕を留める。

### S K 0 4 土壙 （第39図 図版13）

平面形は130cm×120cmの楕円形。深さ16cm。中央部が不整形に1段凹む。全層にわたり焼土と少量の炭化物を混入。

### S K 0 5 土壙 （第39図 図版13）

2層中位面で焼土マウンドを検出。マウンドを精査するにつれ地山面で土壙プランを確認。平面形は長辺110cm、短辺60cmの隅丸方形。深さ16cm。中央部が緩やかに盛り上がっており、壁面の一部は火熱により硬化している。堆積土に多量の焼土を混入する。

出土遺物 底面より土師器甕の細片出土。

### S K 0 6 土壙 （第40図 図版13）

平面形は140cm×160cmの楕円形。深さ18cm。北側の底面は壁に沿って溝状にやや凹んでいる。南側の壁部がSK07土壙と重複。SK07が新しい。

### S K 0 7 土壙 （第40図 図版13）

平面形は230cm×200cmの楕円形。深さ26cm。北側を除く3方の底面は、壁に沿い幅細く溝状

に凹んでいる。堆積土に多量の焼土を混入。焼土は特に西側に多く、壁から底面にかけて流れこんだ状態で堆積。焼土の一部は赤褐色に硬化。壁及び底面に火熱痕跡は無い。

出土遺物 2層より土師器坏、甕、須恵器坏、壺と羽口の断片出土。

S K 0 8 土壙 (第40図 図版13)

平面形は220cm×200cmの不整楕円形。深さ16cm。壁部に沿って6本の柱穴状ピット。ピットの深さ15～28cm。堆積土に焼土と少量の炭化物混入。

出土遺物 1層より土師器坏、甕の破片出土。坏は底部片で回転糸切り痕を留める。

S K 0 9 土壙 (第41図 図版14)

平面形は200cm×180cmの楕円形。深さ30cm。底面は東側が1段高まる。

出土遺物 1・2層より土師器甕の破片出土。南側でSI04堅穴住居跡と重複。土壙が新しい。

S K 1 0 土壙 (第41図)

平面形は直径90cmの円形。深さ34cm、堆積土に多量の焼土と炭化物を混入。壁及び底面の一部は火熱により赤褐色に硬化。底面には炭化材が集積している。

出土遺物 (第46図1・5・7、第47図14～16) 主として下層より土師器坏、甕と須恵器甕の破片出土。1は高台坏で坏部は浅い皿状を呈する。底部以下は欠損。土師器甕は口縁が比較的幅広いものと、狭い幅のものがあり、後者では、口縁にいていねいな横ナデを施すものが多い。14は口唇部が厚くつくられ、口唇部上面に沈線を巡らす。

S K 1 1 土壙 (第41図 図版14)

平面形は146×132cmの楕円形。深さ20cm。底面は凹凸が激しい。

出土遺物 1層より土師器坏、甕の破片出土。

S K 1 2 土壙 (第41図)

平面形は短径が90cmの楕円形。長径は重複するSI05堅穴住居跡の土層から確認、約170cmと考えられる。堆積土に焼土と炭化物を混入、北側壁付近では特に多量。壁及び底面の一部に白色粘度が残存。内面に貼り付けられていたと思われ、赤褐色に硬化している。

出土遺物 (第46図8) 堆積土上層より土師器甕の底部片出土。底面付近には粗いヘラケズリを施している。

S K 1 3 土壙 (第41図)

2層中位面で焼土が厚く堆積しているのが検出された。焼土を精査した段階で土壙プランを確認。平面形は長辺110cm、短辺90cmの方形。深さ24cm。堆積土上層に多量の焼土混入。焼土の一部は火熱により硬化している。SD05溝と重複。溝が新しい。

出土遺物 底面付近より土師器坏、甕の破片出土。坏は2点が内面に黒色処理を施している。

S K 1 4 土壙 (第41図)

平面形は100cm×80cmの楕円形。深さ26cm。堆積土に多量の地山褐色土を混入。SD05溝と重複。溝が新しい。

出土遺物 5層から土師器坏、甕の破片出土。坏は1点が内面に黒色処理を施す。

S K 1 5 土壙 (第42図)

2層中位面で焼土がマウンド状に堆積しているのが検出された。焼土マウンドを精査するにつれて地山面で土壙プランを確認。平面形は1辺100cmの隅丸方形。深さ12cm。堆積土に多量の焼土、炭化物を混入。

出土遺物 1層より土師器坏の底部破片。底部に回転糸切り痕を留める。

S K 1 6 土壙 (第42図)

平面形は140cm×124cmの楕円形。深さ14cm。堆積土に多量の焼土と炭化物(その一部は炭化材として残存)混入。壁及び底面の一部は火熱により赤褐色に硬化している。

S K 1 7 土壙 (第42図 図版14)

平面形は160cm×144cmの楕円形。深さ30cm。底面は緩やかな凹凸を呈している。堆積土全層に多量の地山黄褐色土を混入。下層部分は堅くしまっている。

出土遺物 1層より土師器坏、甕の破片出土。坏は底部に回転糸切り痕を留める。

S K 1 8 土壙 (第42図 図版14)

平面形は140cm×124cmの楕円形。深さ24cm。堆積土は2層を基本とし、上層は多量の焼土を混入する軟質土。下層は地山褐色土を主体にして堅くしまっており、人為的な埋め戻しが行なわれたものと考えられる。下層上面は火熱により硬化している。

出土遺物 3層より土師器甕の破片出土。

S K 1 9 土壙 (第42図)

2層中位面で、広範囲にわたり焼土が散布しているのを確認。このうち焼土が比較的厚く堆積している部分を精査する事によって、2層下位面で土壙プランを検出した。平面形は106cm×94cmの楕円形。深さ40cm。堆積土に多量の焼土を混入。壁面の一部は火熱により硬化している。

出土遺物 2層より土師器坏、甕の破片出土。

S K 2 0 土壙 (第42図)

平面形は200cm×184cmの楕円形。深さ34cm。底面は中央部が一段鍋底状に凹む。堆積土は2層を基本とし、上層は焼土、炭化物を混入する軟質土。下層は地山褐色土を主体とした堅くしまった層で、人為的な埋め戻しが行なわれたものと考えられる。

出土遺物 (第46図 2・3 図版18) 1・2層より土師器坏、甕及び須恵器壺の胴部片出土。坏はいずれも底部に回転糸切り痕を留め、2は内面に黒色処理を施す。甕は底面が砂底で

あるもの1点。

#### S K 2 1 土壙 (第43図 図版14)

2層下位面で黄褐色砂質がマウンド状に堆積。砂質土除去の段階で地山面に土壙プラン確認。平面形は160cm×136cmの楕円形。堆積土上層に地山層中の黄褐色砂質土を混入する。

出土遺物 2層から土師器坏、甕の破片と鉄滓1点出土。

#### S K 2 2 土壙

平面形は直径120cmの円形。深さ180cm。円筒状に掘り込まれ、底面には浅い円形の凹みを有する。堆積土は3層を基本とし、上層及び中層は軟質の黒褐色土で、中層には多量の地山褐色土を混入する。下層は極めて軟質の黒色土で、炭化物を混入。

#### S K 2 3 土壙 (第43図)

平面形は直径110cmの円形。深さ42cm。堆積土全層に多量の地山黄褐色土を混入。

出土遺物 (第46図4・6 図版18) 1層より土師器坏、甕と鉢形土師器出土。坏はいずれも底面に回転糸切り痕を留める。6の鉢形土器はほぼ完形で、胴部は球状にふくらみながら立ち上り、口縁部でわずかに直立する。ロクロ成形による丁寧なつくりである。

#### S K 2 4 土壙 (第43図 図版14)

2層中位面で、焼土堆積を検出。焼土を精査していく段階で、土壙プランを確認。平面形は124cm×100cmの楕円形。深さ10cm。堆積土に焼土、炭化物を多量に混入。上層部分には炭化材が残存。

出土遺物 2層より土師器坏、甕の破片出土。

#### S K 2 5 土壙 (第43図)

2層中位面で焼土がマウンド状に堆積しているのを検出。焼土マウンドを精査するにつれ地山面で土壙プラン確認。平面形は170cm×126cmの楕円形。深さ34cm。確認面からの堆積土は3層を基本とし、上層は炭化物混入の焼土層。層下位部の焼土は一部が火熱により硬化している。中層は焼土を多量に混入する黒褐色土。下層は地山褐色土を多量に混入する堅くしまった土層で、人為的な埋め戻しによるものと考えられる。

出土遺物 2層より土師器坏、甕の破片出土。

#### S K 2 6 土壙 (第43図 図版14)

平面形は148cm×140cmの不整楕円形。深さ24cm。堆積土下層に多量の褐色土混入。SI08堅穴住居跡と重複。土壙が新しい。

#### S K 2 7 土壙 (第43図 図版14)

2層中位面で、一帯に焼土が散布しているのを検出。焼土の比較的厚く堆積している部分を精査した結果、地山面でSK28と共に2基の土壙確認。平面形は直径128cmの円形。深さ24cm～

60cm。底面は凹凸が激しく、中央部にピット状の凹みを有する。堆積土に焼土混入。上層部分は特に多い。

出土遺物 2層より土師器甕の破片出土。内1点は底部片で、砂底を呈する。

#### S K 2 8 土壙 (第44図)

平面形は70cm×62cmの楕円形。深さ14cm。土壙の周囲はリング状に盛り上がっている。堆積土は3層を基本とし、上層は焼土、炭化物混入層。中層は焼土層で、下位部は火熱による硬化した焼土。下層は地山褐色土が主体で堅くしまり、層上位部分は火熱により硬化している。

出土遺物 (第47図17～20・22) 1・2層より土師器甕の破片、砥石及び少量の鉄滓が出土。甕は底部片のものが砂底を呈する。

#### S K 2 9 土壙 (第44図 図版15)

表土層の2層中位面で、焼土と炭化物が多量に散布しているのを検出。焼土範囲を精査するにつれ2層下位面で土壙プラン確認。平面形は150cm×130cmの楕円形。確認面からの深さ40cm。底面は凹凸が激しい。堆積土は3層を基本とし、上層は焼土を主体とする。焼土の一部は火熱により硬化している。中層は地山褐色土を多量に混入する堅くしまった層で、層上位部分は火熱により硬化。下層は多量の焼土を混入し、底面は赤褐色に硬化。

出土遺物 (第46図・47図9～12・21) 1・2・5層より多量の土器片出土。その多くは土師器甕片であり、いずれも外面には縦方向のヘラナデ及びヘラケズリ、内面には横方向のヘラナデを施す。10、11は口縁部分が幅広く、くの字状に強く屈曲する。底部片は1点が砂底。その他9は須恵器壺で、外面の一部に自然釉が付着している。

#### S K 3 0 土壙 (第44図)

平面形は直径94cmの円形。深さ16cm。

出土遺物 (第47図23～25) 1層より土師器坏、甕の破片出土。坏は底部に回転糸切り痕を留める。甕は25がロクロ成形による薄手のもの。

#### S K 3 1 土壙 (第44図)

平面形は140cm×114cmの楕円形。深さ12cm。堆積土は極めて軟質の黒褐色土で、底面付近では多量の地山褐色土がブロック状に混入している。

#### S K 3 2 土壙

平面形は長辺140cm、短辺120cmの長方形。深さ10cm。堆積土に多量の炭化物を混入。

#### S K 3 3 土壙

平面形は長辺120cm、短辺90cmの隅丸方形。深さ16cm。

#### S K 3 4 土壙 (第44図 図版15)

SK39土壙と重複しており、東側の壁部は消滅。平面形は楕円形と考えられる。短径10cm。

底面は壁付近が凹み、壁際に沿って溝状に巡る。SK39土壌が新しい。

#### S K 3 5 土壌 (第15図 図版15)

SI05竪穴住居跡と重複しており、西及び南側の壁部は消滅している。平面形は円形を呈すると思われ、現状での確認径90cm(深さ34cmで挿鉢状の断面形を呈する)、堆積土に比較的多くの地山褐色土混入。住居跡が新しい。

#### S K 3 6 土壌 (第23図)

SI10竪穴住居跡と重複しており、土壌の北側は不明。平面形は楕円形を呈すると思われ、確認状態での長径110cm。底面中央にピット状の凹みを有する。深さ35cm。土壌が新しい。

#### S K 3 7 土壌 (第23図 図版15)

SI10竪穴住居跡と重複しており、北側は不明。平面形は底面の形体から楕円形を呈すると考えられる。上面での確認長径70cm。深さ40cm。竪穴住居跡が新しい。

#### S K 3 8 土壌

平面形は1辺110cmの方形。深さ15cm。堆積土に多量の炭化物を混入。

#### S K 3 9 土壌 (第44図 図版15)

SK34土壌と重複。北壁は不明だが、堆積土層の観察から長径は180cmと推定される。平面形は楕円形を呈し、短径160cm。深さ30cm。壁、底面共凹凸が激しい。

#### S K 4 0 土壌 (第44図)

平面形は直径100cmの円形。深さ15cm。堆積土に地山層中の灰黄褐色砂質土を混入。西側の壁部が、SI12竪穴住居跡と重複。土壌が新しい。

#### S K 4 1 土壌 (第45図)

平面形は124cm×70cmの楕円形。深さ14cm。底面は平坦で、西側壁付近に柱穴状ピットを有する。堆積土に焼土と炭化物を混入。

出土遺物 底面より土師器甕の破片出土。

#### S K 4 2 土壌 (第30図)

SI14竪穴住居跡と重複しているため、南側の壁の一部を除き他は消滅している。平面形は楕円形と考えられる。住居跡が新しい。

出土遺物 底面付近より土師器坏の細片出土。

#### S K 4 3 土壌

平面形は120cm×84cmの楕円形。深さ12cm。底面は凹凸が激しく南側部分では所々ピット状に凹んでいる。堆積土の上層部分に比較的多くの炭化物と焼土を混入する他、南側部分では多量の地山褐色土が含まれている。

#### S K 4 4 土壌 (第45図)

平面形は210cm×170cmの楕円形。確認面からの深さ24cm。堆積土の上層に多量の焼土混入。焼土の一部は火熱により硬化している。SI15堅穴住居跡と重複しており、土壌が新しい。

出土遺物 (第47図26～28) 1層・2層から比較的多く出土。遺物は土師器坏、甕及び緑釉の破片で、坏は底部のものが回転糸切り痕を留める。その他内面に黒色処理を施したのも1点出土。坏、甕の多くは、2次火熱により色調が赤変しているものが多い。緑釉は2片出土しており、内1点は碗の口縁部破片。胎土はいずれも軟質で黄白色の色調を呈しており、上釉は濃緑色を発する。

#### SK45土壌 (第45図)

西側は調査区外のため不明だが、平面形は楕円形を呈すると思われる。長径224cm。堆積土は1・2層が重複するSI15堅穴住居跡の堆積土。3層は地山褐色土を主体とする堅くしまった層で、住居跡の貼り床部分と考えられる。5層は土壌堆積土で、焼土混入の軟質の黒褐色土。

出土遺物 底面より土師器坏の細片出土。

#### SK46土壌 (第45図)

平面形は径66cmの円形。深さ16cm。堆積土は軟質の黒褐色土で上層部分に少量の炭化物を混入する。

#### SK47土壌 (第45図)

SI03堅穴住居跡と重複しており、北側の壁部は不明。平面形は円形を呈するものと思われる。直径90cm。深さ32cm。土壌が新しい。

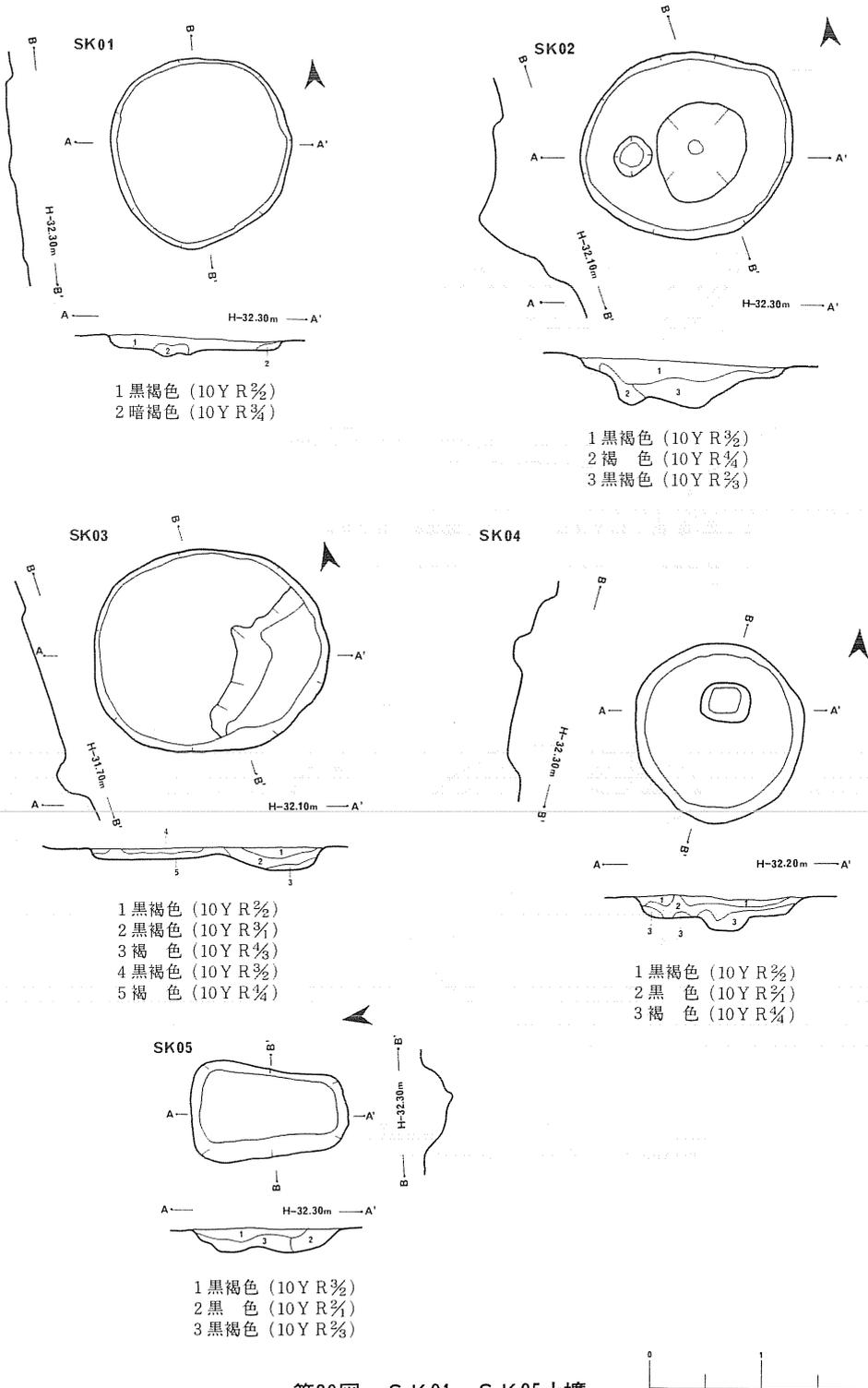
### 3 遺構外出土遺物

#### (1) 土師器・須恵器 (第59図1～11)

遺物の多くは2層中位面から3層にかけて出土している。出土地点はほぼ全域にわたっているが2層中位面で所々に検出された焼土痕跡(散布)に伴い、この範囲内に集中して出土する場合も多い。出土量は土師器坏・甕が最も多く、須恵器は極めて少ない。1～9は土師器坏で、高台を付する坏も多く、高台は裾が開いた高いものと、幅細の粘度紐を巻きつけた形の低いものがある。5は坏部が浅い皿状を呈する。6・8・9は内面に黒色処理を施している。いずれも底面に回転糸切り痕。10は土師器壺の口頸部品。11は土師器甕で口縁部分から胴部にかけてロクロ成形、底部付近は粗いヘラケズリ痕跡を留めている。須恵器はいずれも甕の胴部破片である。

#### (2) 土製品 (第59図12～14 図版19)

土錘で調査区の東側区域より出土。12は長さ6cm・胴部最大径3.5cm・内孔径1.2cm、13は長さ3.5cm・胴部最大径3.8cm・内孔径0.5cmを計る。

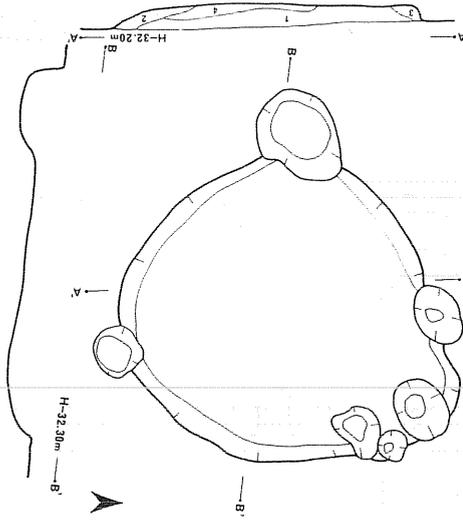


第39図 SK01～SK05土壤

第40図 SK06～SK08土壌

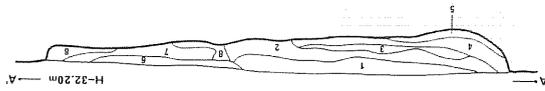


- 1. 黒褐色 (10 Y R%)
- 2. 黒褐色 (10 Y R%)
- 3. 暗褐色 (10 Y R%)
- 4. 暗赤褐色 (2.5 Y R%)



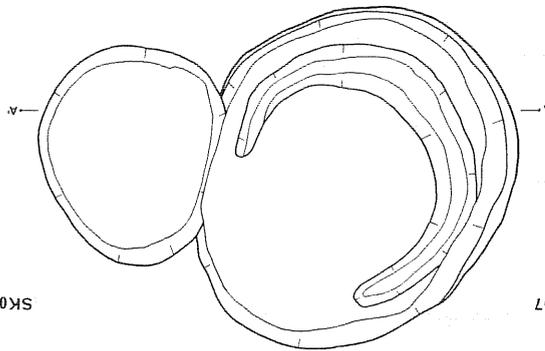
SK08

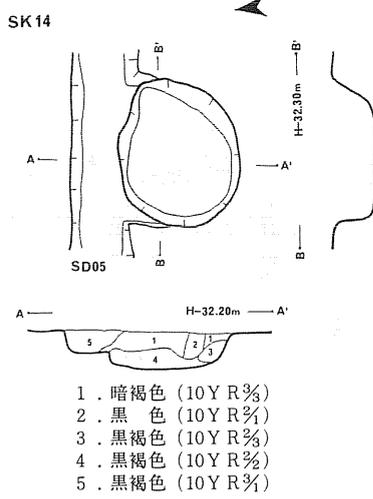
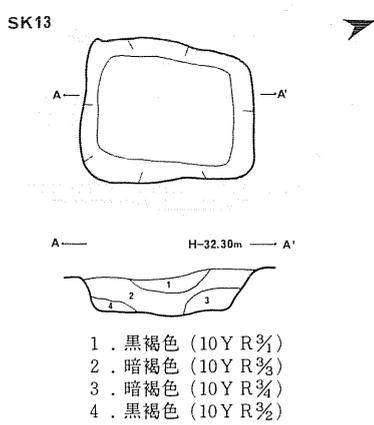
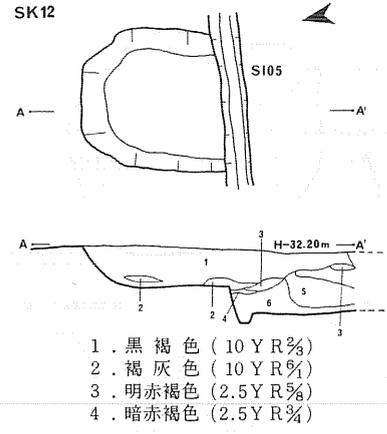
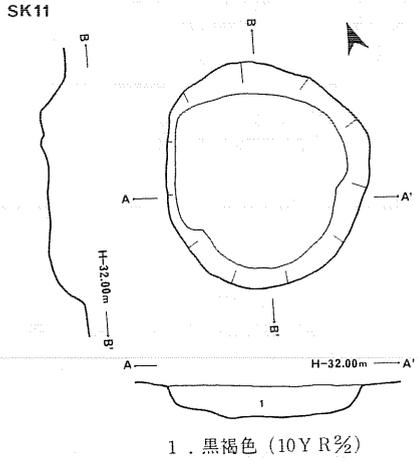
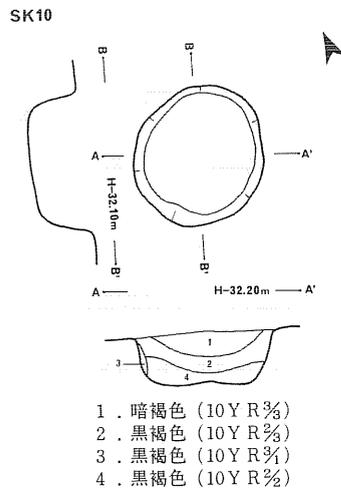
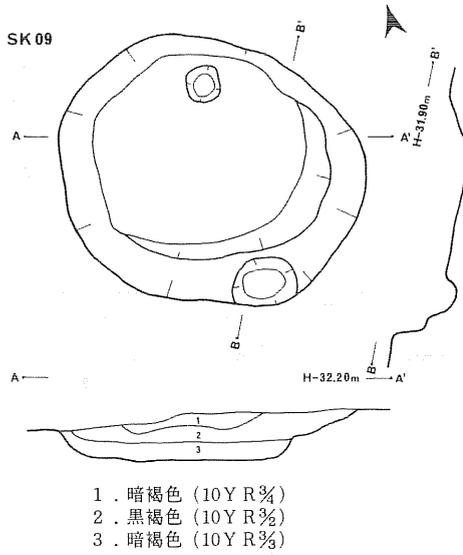
- 1. 黒褐色 (10 Y R%)
- 2. 黒褐色 (10 Y R%)
- 3. 暗赤褐色 (2.5 Y R%)
- 4. 黒褐色 (10 Y R%)
- 5. 暗褐色 (10 Y R%)
- 6. 黒褐色 (10 Y R%)
- 7. 暗褐色 (10 Y R%)
- 8. 褐色 (10 Y R%)



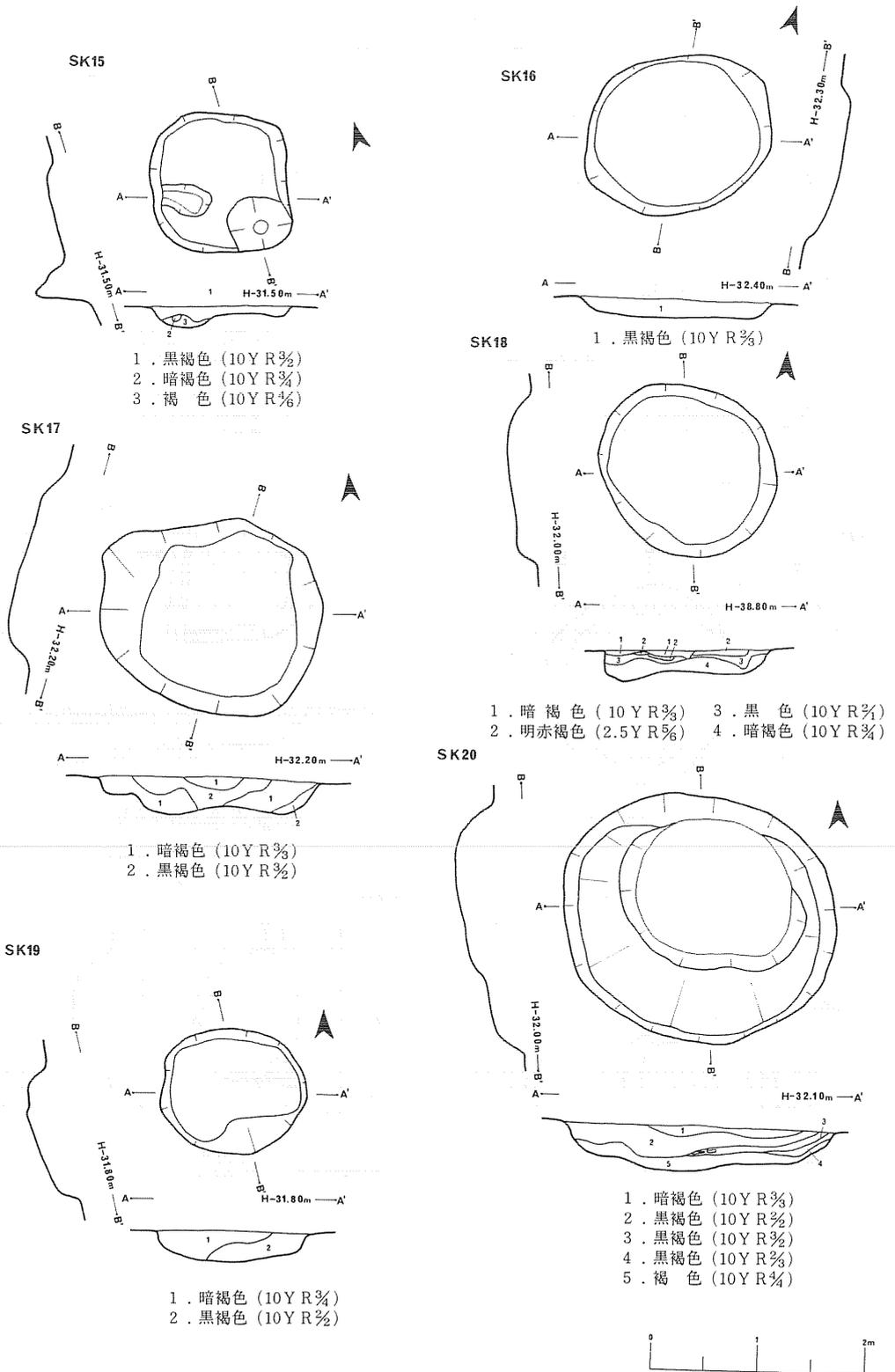
SK07

SK06

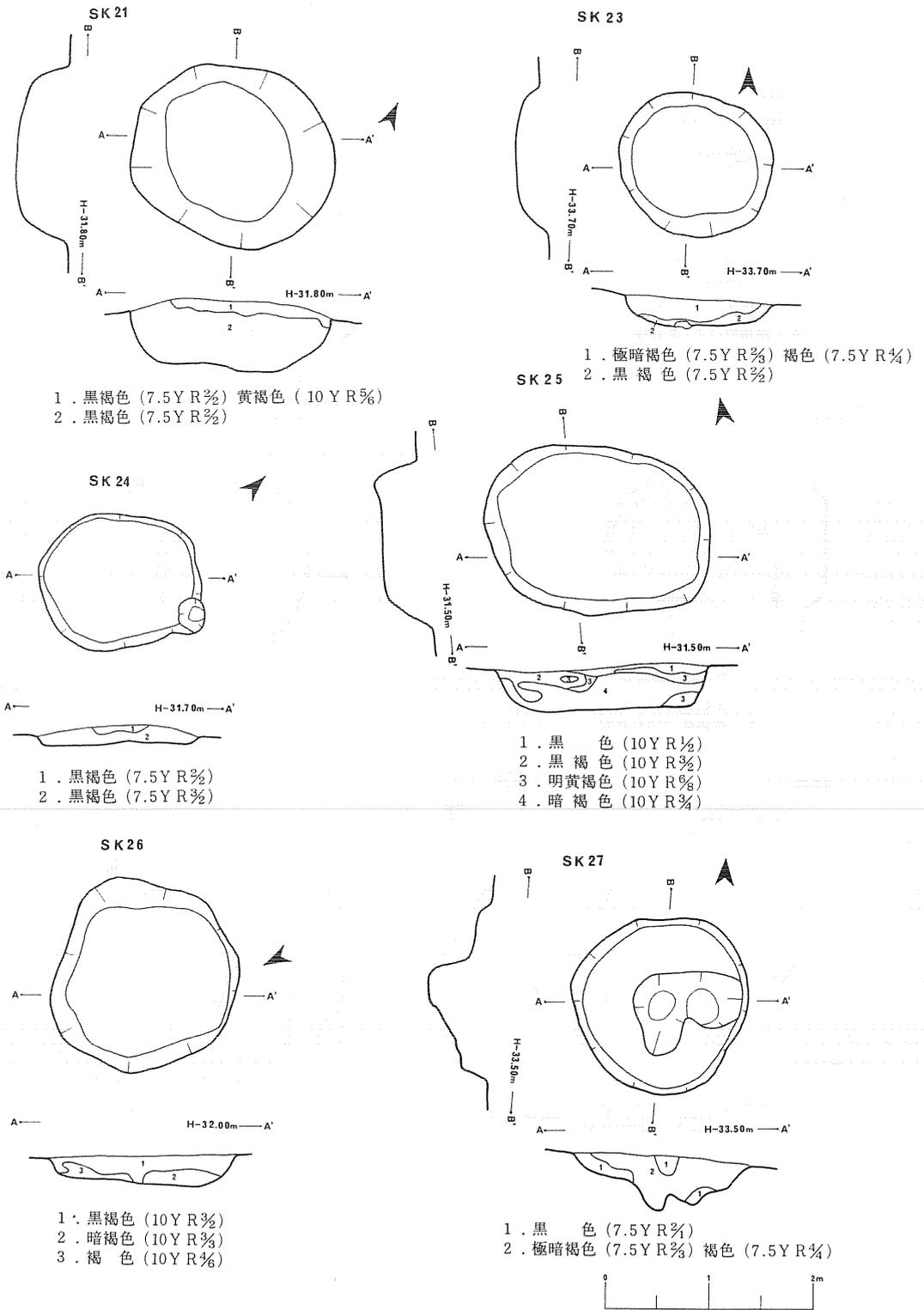




第41図 SK09~SK14土壌

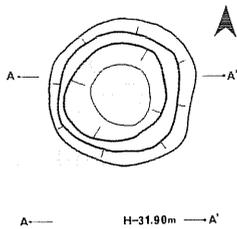


第42図 SK15~SK20土壌



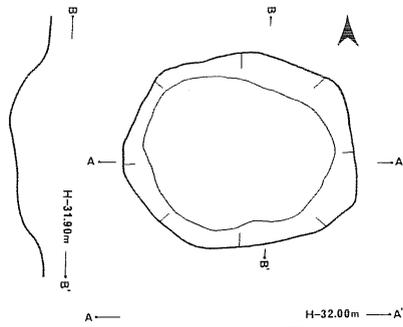
第43図 SK 21・23～SK 27土壌

SK28



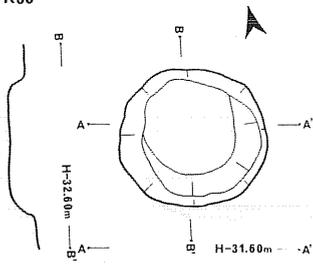
1. 黒褐色 (10 YR 2/3)
2. 赤褐色 (2.5 YR 4/6)
3. 暗褐色 (10 YR 3/4)
4. 褐色 (10 YR 4/4)

SK29



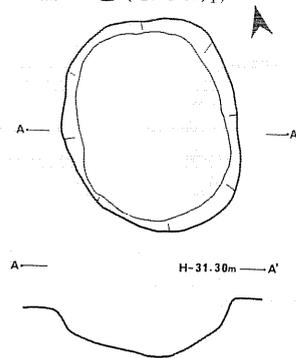
1. 黒褐色 (10 YR 2/3)
2. 暗赤褐色 (2.5 YR 4/4)
3. 黒褐色 (10 YR 3/3)
4. 褐色 (10 YR 4/4)
5. 黒色 (10 YR 1/1)

SK30

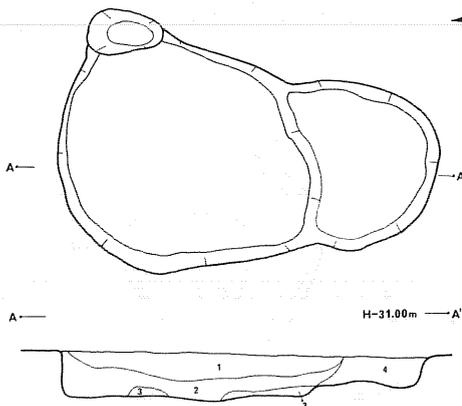


1. 黒褐色 (10 YR 2/3)
2. 暗褐色 (10 YR 3/4)

SK31



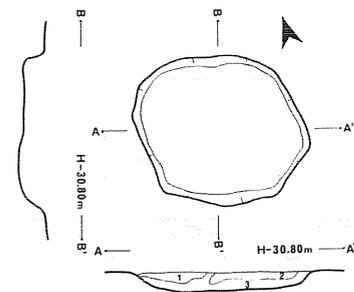
SK39



1. 黒褐色 (10 YR 2/3)
2. 黒褐色 (10 YR 3/2)
3. 褐色 (10 YR 4/4)
4. 黒褐色 (10 YR 3/1)

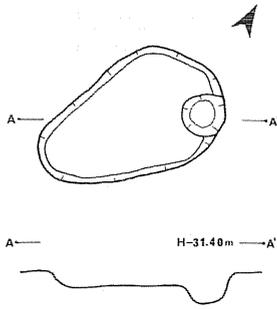
SK34

SK40

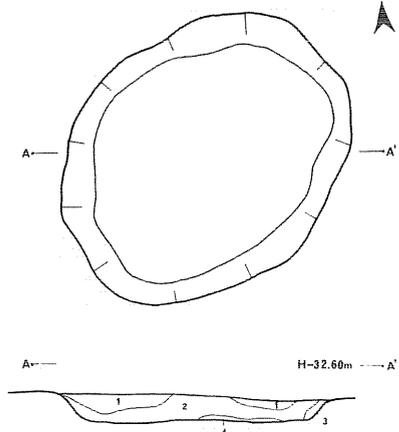


第44図 SK28~31・34・39・40土壤

SK41

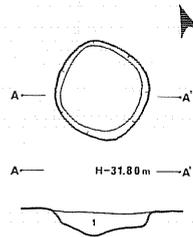


SK44

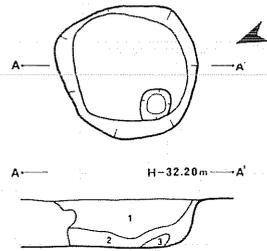


1. 黒褐色 (10Y R $\frac{2}{6}$ )
2. 黒褐色 (10Y R $\frac{2}{6}$ )
3. 暗褐色 (10Y R $\frac{2}{6}$ )
4. 褐色 (10Y R $\frac{3}{6}$ )

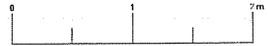
SK46



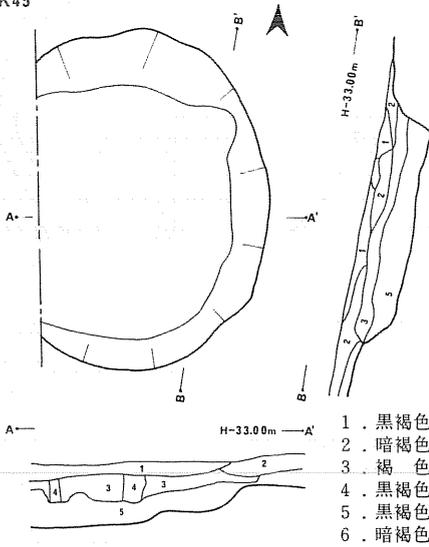
SK47



1. 極暗褐色 (7.5Y R $\frac{2}{6}$ )
2. 黒褐色 (7.5Y R $\frac{2}{6}$ )
3. 褐色 (7.5Y R $\frac{3}{6}$ )



SK45



1. 黒褐色 (10Y R $\frac{2}{6}$ )
2. 暗褐色 (10Y R $\frac{2}{6}$ )
3. 褐色 (10Y R $\frac{3}{6}$ )
4. 黒褐色 (10Y R $\frac{2}{6}$ )
5. 黒褐色 (10Y R $\frac{2}{6}$ )

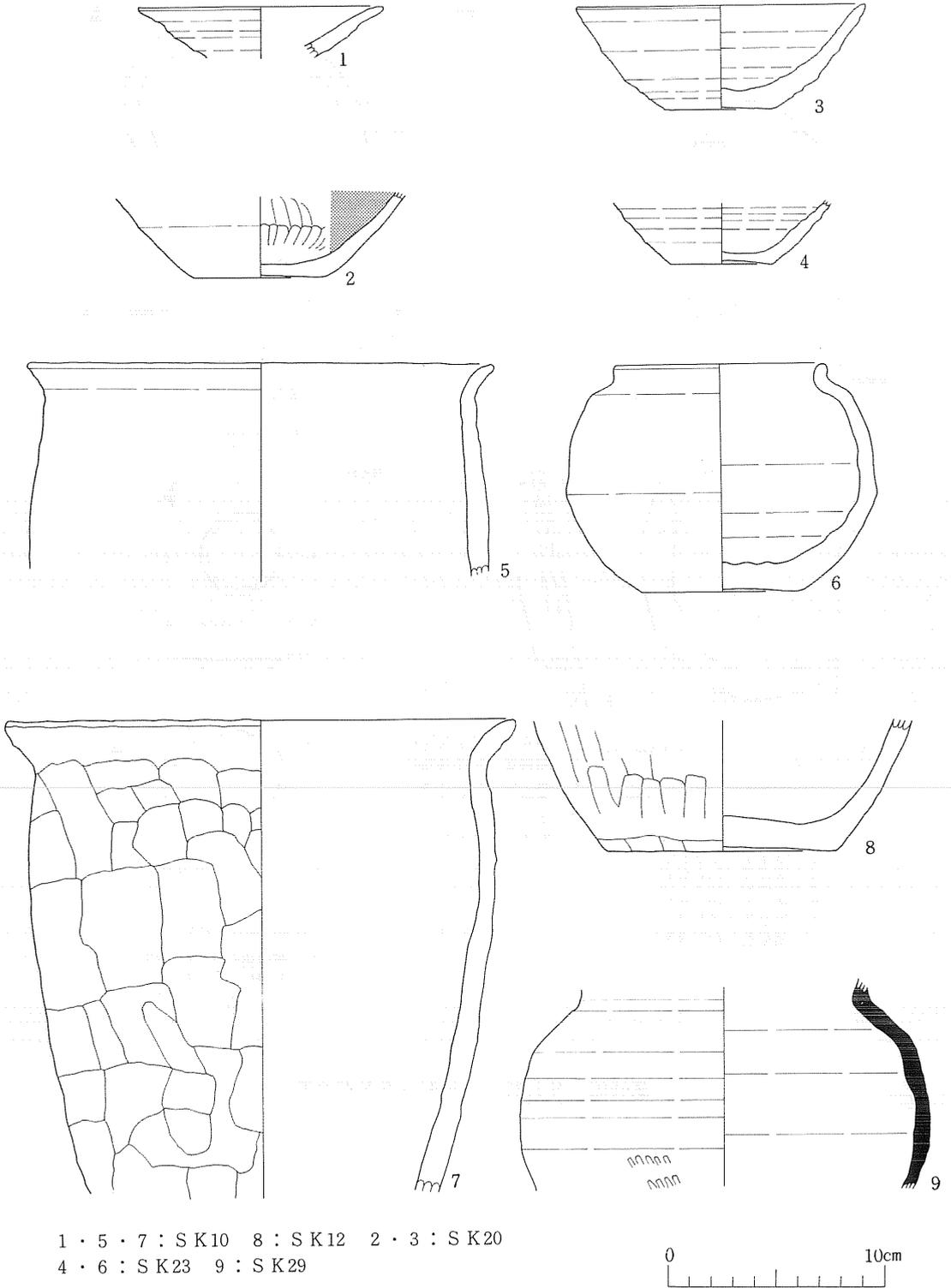
1. 黒褐色 (10Y R $\frac{2}{6}$ )
2. 暗褐色 (10Y R $\frac{2}{6}$ )
3. 褐色 (10Y R $\frac{3}{6}$ )
4. 黒褐色 (10Y R $\frac{2}{6}$ )
5. 黒褐色 (10Y R $\frac{2}{6}$ )
6. 暗褐色 (10Y R $\frac{2}{6}$ )

第45図 SK41・SK44～SK47土境

(3) 石製品 (第59図15～17 図版19)

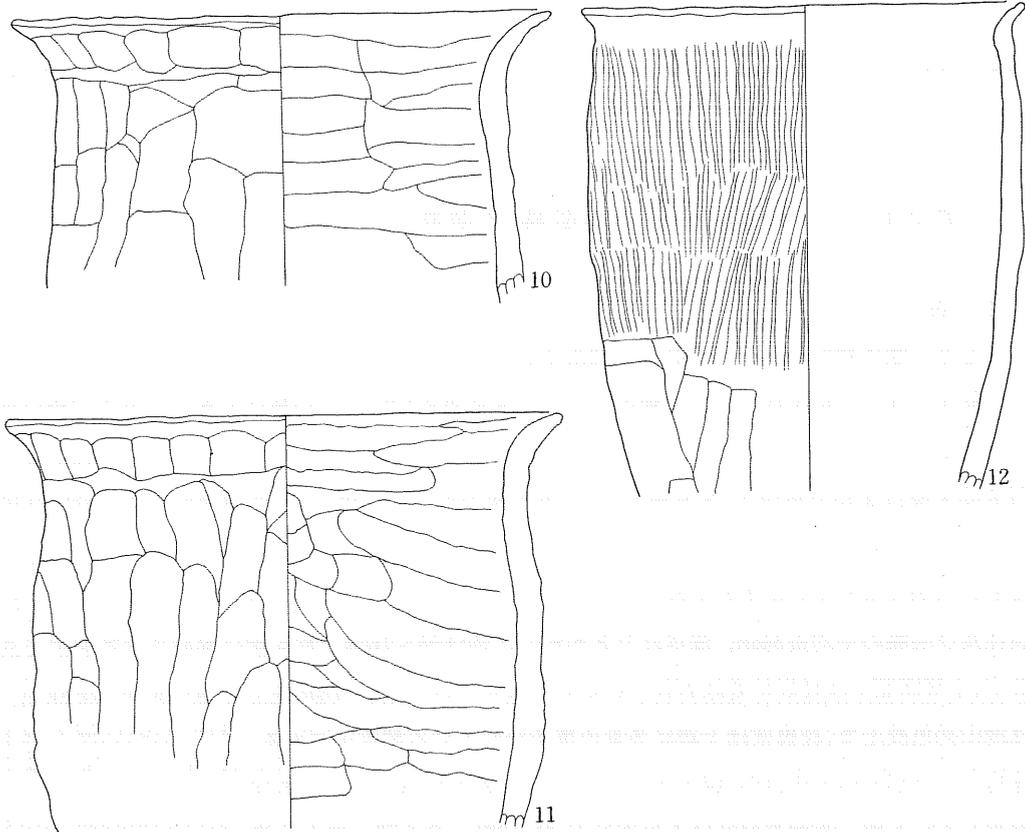
砥石で、調査区東側の2層より出土。いずれも一方の端部が欠損。現状で16は長さ5.5cm・幅2.4cm。17は長さ9.5cm・幅2cm。石質は凝灰岩。

(4) 鉄製品 (第59図18・19 図版19)

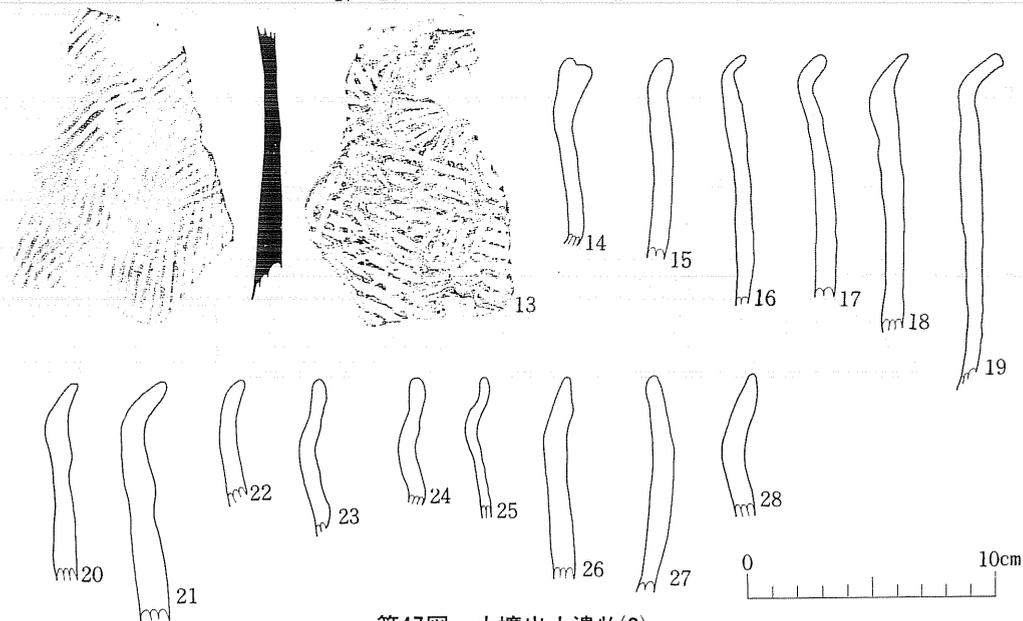


1・5・7：SK10 8：SK12 2・3：SK20  
4・6：SK23 9：SK29

第46図 土壌出土遺物(1)



10~12 : S K 29 13 : S K 01 14~16 : S K 10  
 17~20・22 : S K 28 21 : S K 29 23~25 : S K 30 26~28 : S K 44



第47図 土壌出土遺物(2)

調査区東側と中央部区域の表土層2層上位面より出土。18は角釘で末端を平らに叩きのばてから折り曲げている折頭釘。19は楔で完存。長8cm・幅2.3cm・厚さ0.6cm。

### 第3節 その他の時代の遺構と遺物

#### 1 掘立柱建物跡

##### SB01 掘立柱建物跡 (第48図 図版7)

2層中位面から地山面にかけて検出された。本遺構周辺にはこの他にも多くの柱穴が検出され、確認された掘立柱建物跡のうち約半数の6棟がこの区域に集中している。遺構の構造は桁行3間・梁行2間で東西5.8m南北4.7mの東西棟。E-23°-Sの方向を示す。柱間は梁行の場合南1間がそれぞれ2.3mで相対応。桁行は北側・南側共東1間が2.0mで相対応する他、南側では西2間がそれぞれ1.9mで同値である。柱穴プランは楕円形及び隅丸方形で、長径及び長軸の平均長34cm、深さはP8が浅く、他は28~16cm。柱痕部は平面では不明瞭であるが、土層断面では良好に確認されているものもあり、径は14~16cm埋土は地山褐色混土で、柱痕部は上層に多量の焼土を混入する軟質土である。建物の北側部分がSB02建物跡と重複。両遺構の桁行はほぼ同一の方向を示している他、西側の梁行はそれぞれがN-22°-Eの同一線上に設定されている。

第1表 SB01柱穴計測表(cm)

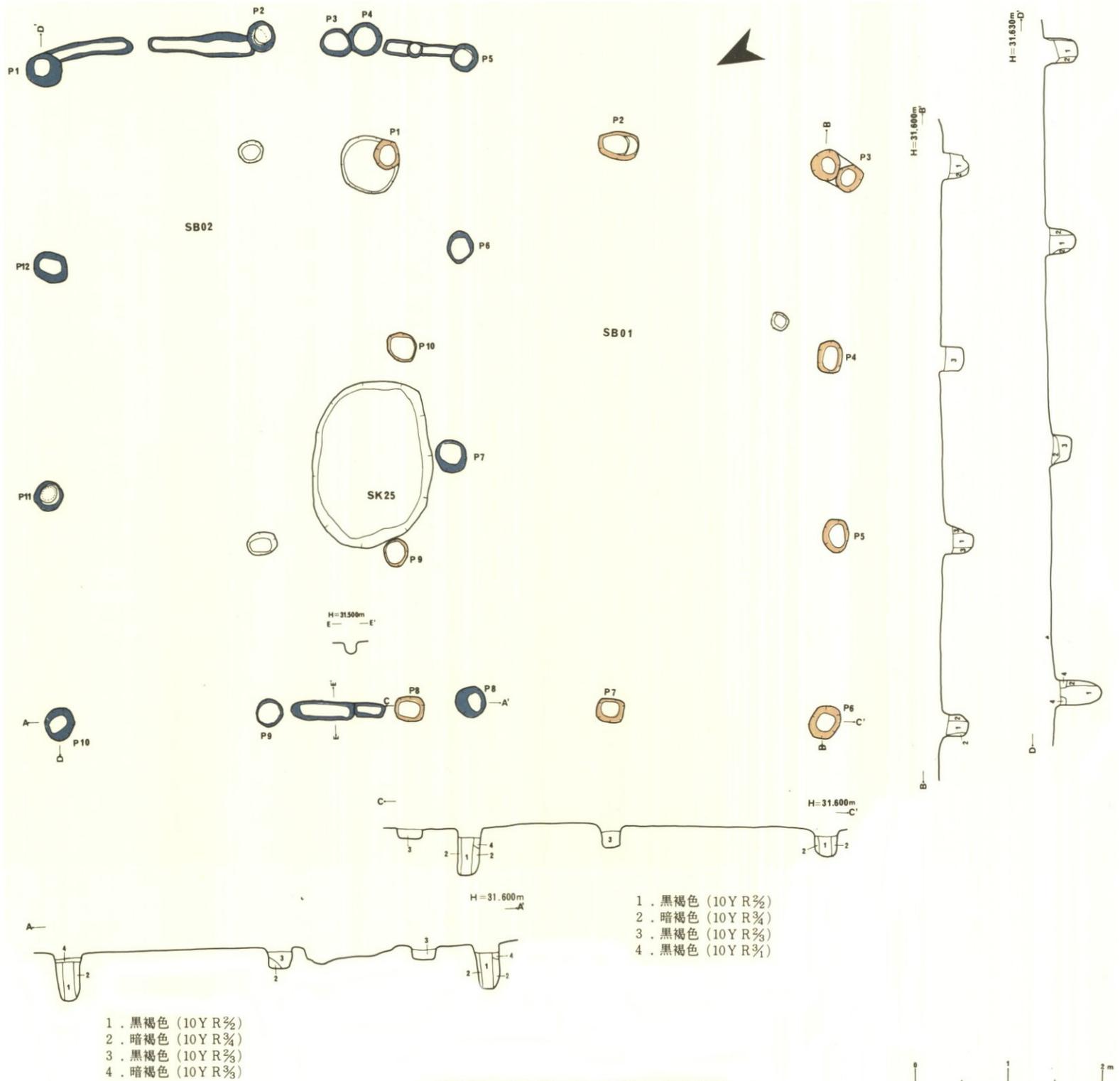
P. No.	長径	短径	深さ
P. 1	32	27	24
2	43	31	25
3	34	34	28
4	34	27	25
5	35	28	33
6	39	31	30
7	29	25	25
8	32	27	10

##### SB02 掘立柱建物跡 (第48図 図版7)

2層中位面から地山直上にかけて検出された。建物の構造は桁行3間・梁行2間で東西6.9m・南北4.6mの東西棟。E-25°-Sの方向を示す。柱間は西側の場合2.3mで等分割。東側は2.4m・2.1mだが中央柱の南側に浅い柱穴が2本連続する。桁行は北側で西から2本目までがそれぞれ2.4mで同値を示す。柱穴プランは円形と楕円形で、長径の平均長32cm。深さは隅柱が他よりも深い傾向を示すが、中でも西側のものは最も深く50cm東側は36cm。他の柱穴は平均24cm。柱痕部は2本の柱穴で、上面から確認されており、その径14cm・18cm。埋土は地山褐色混土で、柱痕部はやや軟質の黒褐色土である。梁行部分には柱穴を介して布掘り状の溝を伴う。溝は東側では梁行全長にわたっており、西側では中央柱から西側隅柱までの間にみられる。溝の上面幅15~25cm深さは7~15cmと一様でないが、東側がより深い傾向を示している。底面は凹凸が激しく、特に東側では段状になったり、ピット状に凹んだりしている。遺物は東側の溝及びP4の掘り方埋土より土師器坏片が出土した。

第2表 SB02柱穴計測表(cm)

P. No.	長径	短径	深さ
P. 1	38	35	38
2	32	32	35
3	33	30	41
4	34	34	22
5	29	29	28
6	36	29	30
7	35	32	34
8	32	32	48
9	30	30	23
10	36	32	50
11	32	32	23
12	39	31	23



## S B 0 3 掘立柱建物跡 (第49図 図版7)

2層下位面から地山にかけて検出された。遺構の立地する地形は、東に向いやや傾斜している。遺構は身舎とその北面に付属する庇からなる。身舎部は桁行3間・梁行2間で東西6.9m・南北4.9mの東西棟。E-26°-Sの方向を示す。柱間は東側・西側いずれにおいても2.4m・2.5mに分割されている。桁行は北側・南側共東1間が2.4mで相対する他、北側では中間の柱間を介して東・西それぞれの寸法が2.4mの同値を示す。柱穴プランは身舎部が楕円形で、長径は30~40cm。深さはP7を除く他の隅柱と、間仕切り溝と接続するP4・P5が深く32~49cm。他は平均26cm。底部は身舎部と異なり方形を呈し、一辺の長さ17.5~35cm深さは31~44cmで身舎部とほぼ同値。柱痕部は身舎・庇共不明瞭である。西側の梁行及び北側桁行の一部に柱穴を介する布掘り状の溝を検出。桁行では西から2間にわたって掘り込まれている。溝の上面幅12~20cm。深さ7~12cm。底面は凹凸を呈しており、特に桁行部分では激しく、一部にピット状の凹みを有する。その他建物内にも2条検出されており、これらの溝は間仕切りのもと考えられる。幅は5~15cm。深さ5~8cm。底面は比較的平坦である。

表3第3表S B 03柱穴計測表(cm)

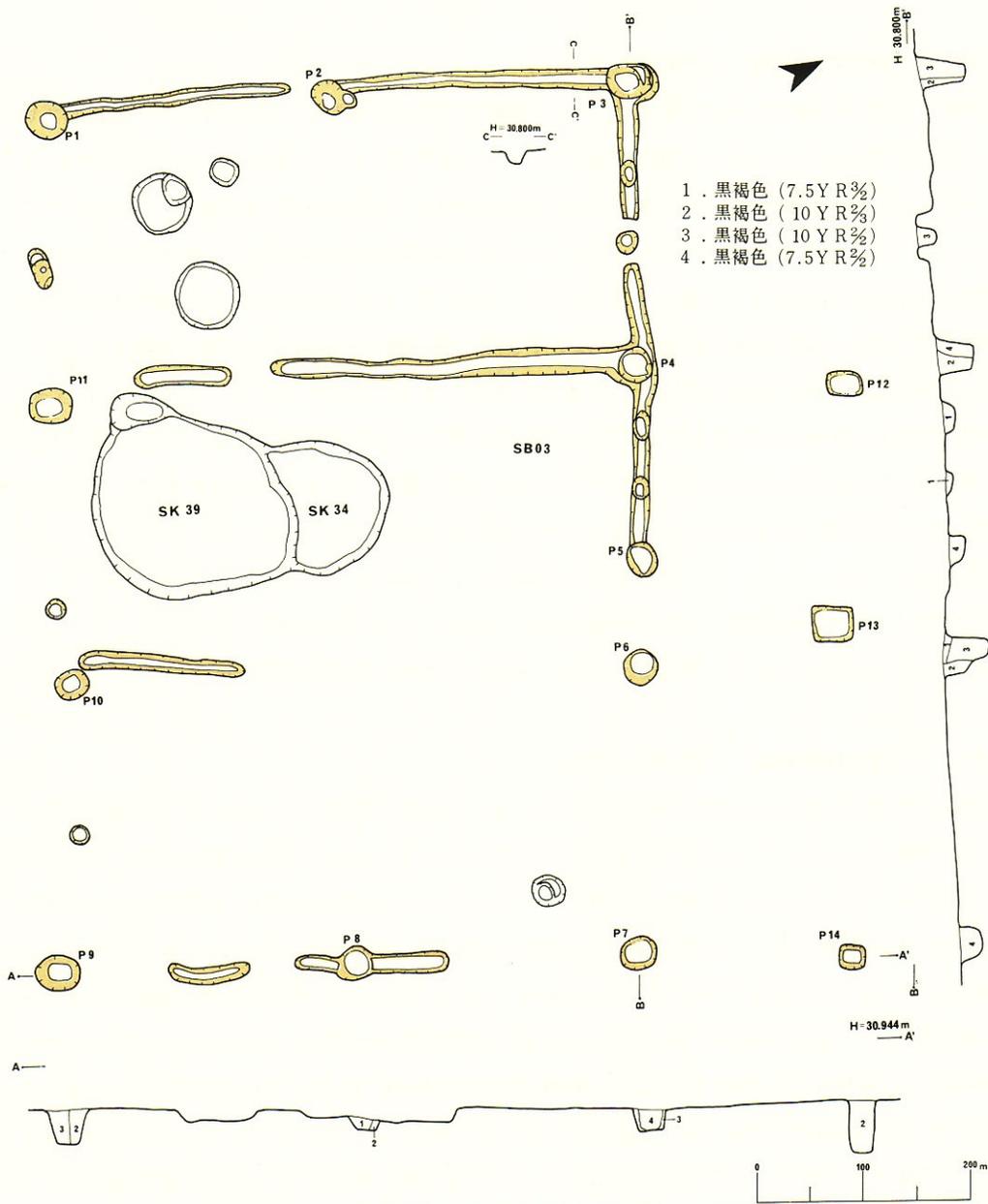
P. No	長径	短径	深さ
P. 1	34	30	32
2	30	26	48
3	49	28	45
4	30	29	47
5	26	26	30
6	30	30	49
7	30	27	23
8	32	27	18
9	38	30	31
10	28	26	43
11	35	30	49
12	30	21	31
13	36	30	32
14	22	19	45

## S B 0 4 掘立柱建物跡 (第50図 図版7)

2層中位面でほぼ全ての柱穴が確認された。又、この面で建物プラン内とその周辺に多量の焼土が散布しており、P5周辺では特に厚く堆積している。建物の構造は桁行2間・梁行3間で、東西8.5m・南北6.4mの東西棟。E-17°-Sの方向を示す。本遺跡の中では最も規模の大きい建物である。柱間は梁行が東側・西側共3.4mで等分割されており、それぞれが相対する。桁行は東・西各1間がいずれも2.9mで相対。中間部分は北側が2.6m・南側が2.7mで近似値を示す。柱穴プランは楕円形及び隅丸方形で、長径は70cmを最大に平均58cm、深さは隅柱が深い傾向を示し45~50cm。他は平均44cm。柱痕部は8本の柱穴で、上面から確認されており径15~17cm。埋土は地山褐色混土で、底面付近は特に混入が多い。P1・P3・P4・P9・P10では、掘り方底面に5~7cmの厚さで地山褐色土をしきつめ根固めとしている。柱痕部は軟質の黒褐色土で上層に焼土、炭化物を混入。西側梁行と南側桁行部分の一部に溝を検出。溝はところどころで中断しているが、本来はS B 03と同様に柱穴を介する布掘り状のものであり、確認された状態はその残存する一部と考えられる。溝の幅10~20cm。深さ5~14cm。底面は凹凸を呈し、一部でピット状に凹む。遺物はP4・P7の掘り方埋土中より土師器坏片出土。

第4表S B 04柱穴計測表(cm)

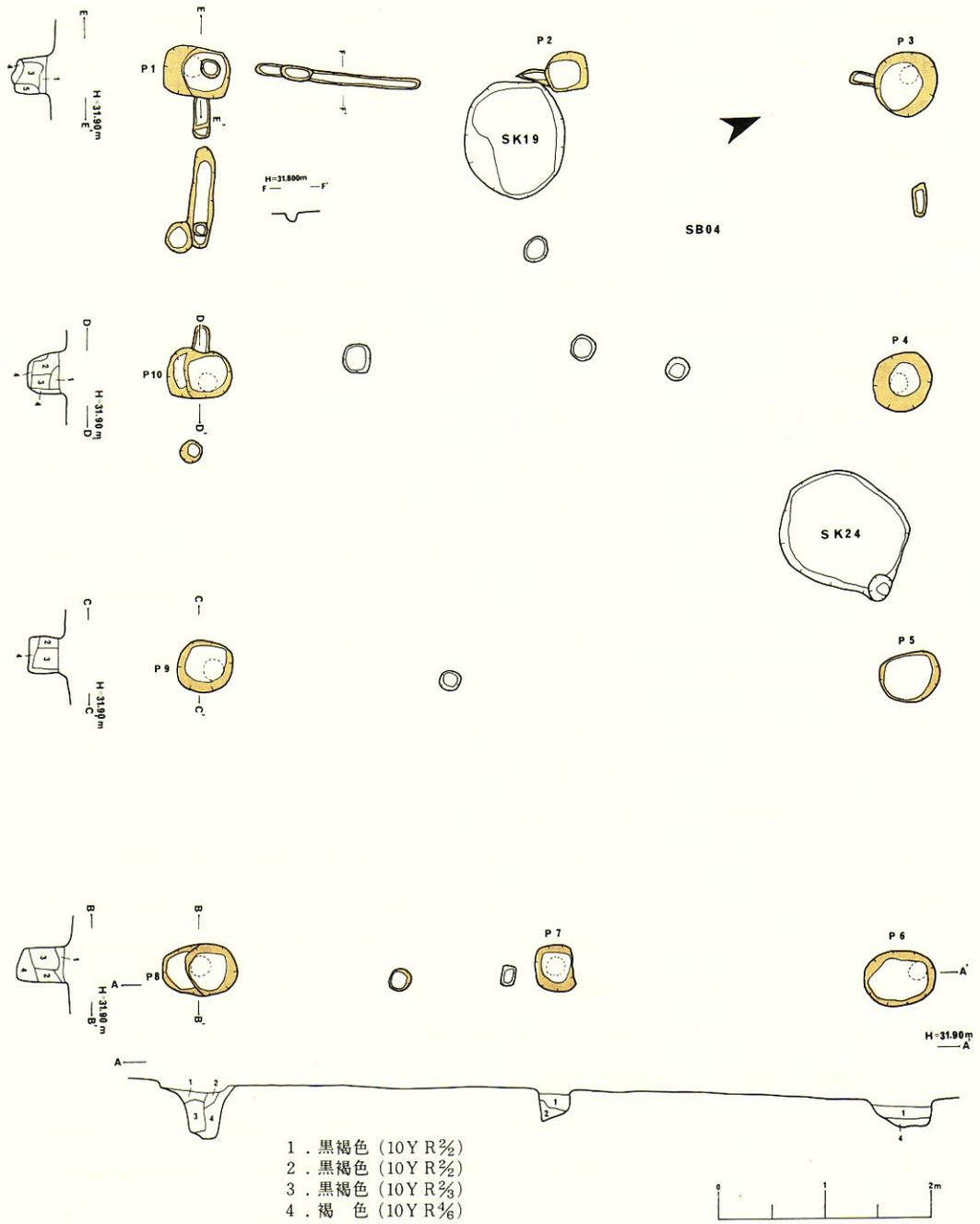
P. No	長径	短径	深さ
P. 1	62	44	18
2	42	42	25
3	62	60	42
4	59	56	30
5	57	48	30
6	66	50	24
7	48	34	30
8	51	47	28
9	53	53	34
10	60	44	36



第49図 SB03掘立柱建物跡

SB05掘立柱建物跡 (第51図 図版7)

2層下位面から地山直上にかけて検出。建物の構造は身舎とその南面に付属する庇からなり、建物の構造は身舎部の場合、桁行が南側で3間、梁行が東側で2間を呈しており、東西7m・南北8mの東西棟である。建物方向はE-8°-S。柱間は梁行が西側で2.5m・2.7mであり、東側はSI04 竪穴住居跡と重複している事から中間の柱は不明。桁行は南側が2.7m



第50図 SB04掘立柱建物跡

2.6m・2.7mで、南2間は北側の柱間とそれぞれ相対する。柱穴プランは上面が円形もしくは楕円形であるが、底面は多くの場合方形・隅丸方形を呈する。上面径は30~34cm、深さは50cmを最深とし平均45cm。底部は桁行4間であるが柱間は不規則。柱穴は円形及び楕円形で身舎部と比較して小さく浅い。径18~30cm、深さ10~12cm。埋土は身舎・庇共比較的多くの地山褐色土を混入する。東側梁行・南側梁行及び西側の梁行の一部に溝を検出。溝はいずれも柱穴を介して布掘り状に掘りこまれている。上面幅10~18cm、深さ5~10cm、底面は凹凸を呈し、特に桁行では激しく部分的にピット状の凹みを有する。西側梁行部分がSI04堅穴住居跡及びSK09土壌と重複。堅穴住居跡の場合、確認面及び堆積土中にも検出されなかった。土壌では堆積土除去後底面にて柱穴痕跡を確認。

第5表 S B05柱穴計測表(cm)

P. No	長径	短径	深さ
P. 1	28	23	27
2	33	22	23
3	30	33	37
4	34	34	52
5	32	32	51
6	31	25	32
7	35	27	51
8	48	35	56
9	34	22	47
10	31	29	41
11	50	41	40
12	18	16	12
13	42	18	22
14	20	20	13
15	20	20	24

S B 0 6 掘立柱建物跡 (第51図 図版7)

2層下位面から地山直上にかけて検出。建物の構造は桁行3間・梁行2間で東西6.6m・南北5mの東西棟。E-15°-Sの方向を示す。柱間は梁行の場合東側が2.2mで等分割され、西側は南1間が東側と同値で相対、北西隅柱は重複する土壌により消滅したと思われる検出されなかった。桁行は南側の場合2.1m・2.2m・2.5mで南1間は北側のものと相対する。北側は2間とも2.1mで同値である。柱穴プランは楕円形及び円形で長径はいずれも近似値を示し平均42cm。深さは一様でなく、73cmを最深に、他は24~35cmの範囲に集中する。埋土は比較的多量の地山褐色土を混入。柱痕部は不明瞭。

第6表 S B06柱穴計測表(cm)

P. No	長径	短径	深さ
P. 1	40	37	33
2	36	36	27
3	34	33	35
4	44	33	13
5	50	41	40
6	46	42	28
7	44	40	73
8	29	37	24
9	41	41	25

S B 0 7 掘立柱建物跡 (第52図 図版7)

2層下位面から地山直上にかけて検出。遺構の立地する地形は南に向いやや傾斜している。遺構は東-西・南-北各1間の建物跡で、柱間は南側列が3.0mであるのを除き他はいずれも2.7m。柱穴プランは円形及び楕円形で、長径は25~35cm・深さ20~42cm。柱痕部は土層断面で良好に確認され、径13cm。埋土は大粒の地山褐色土を混入。柱痕部は炭化物を混入する軟質の暗褐色土。

第7表 S B07柱穴計測表(cm)

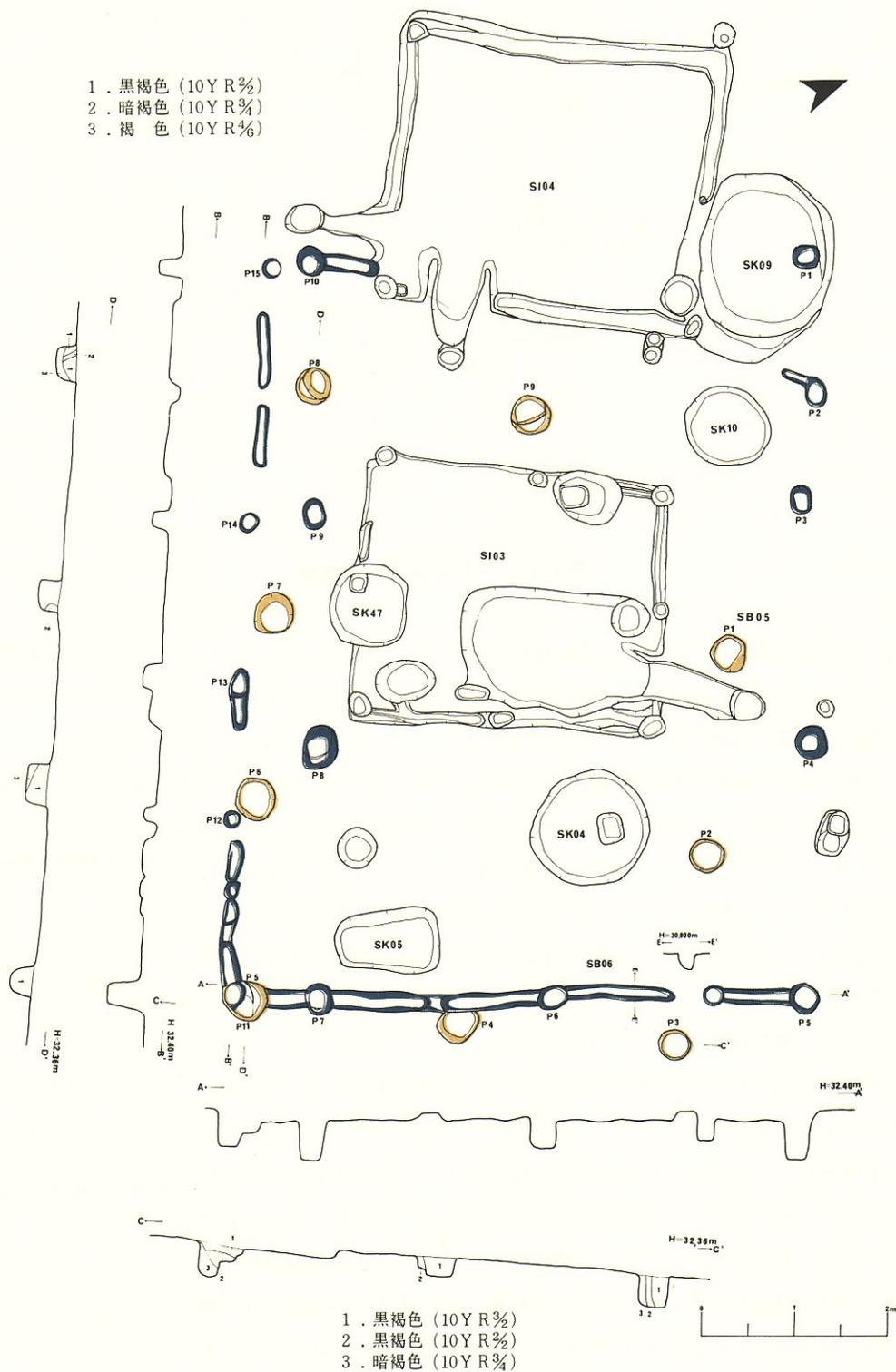
P. No	長径	短径	深さ
P. 1	32	28	
2	36	32	40
3	36	33	36
4	30	29	34

S B 0 8 掘立柱建物跡 (第53図 図版7)

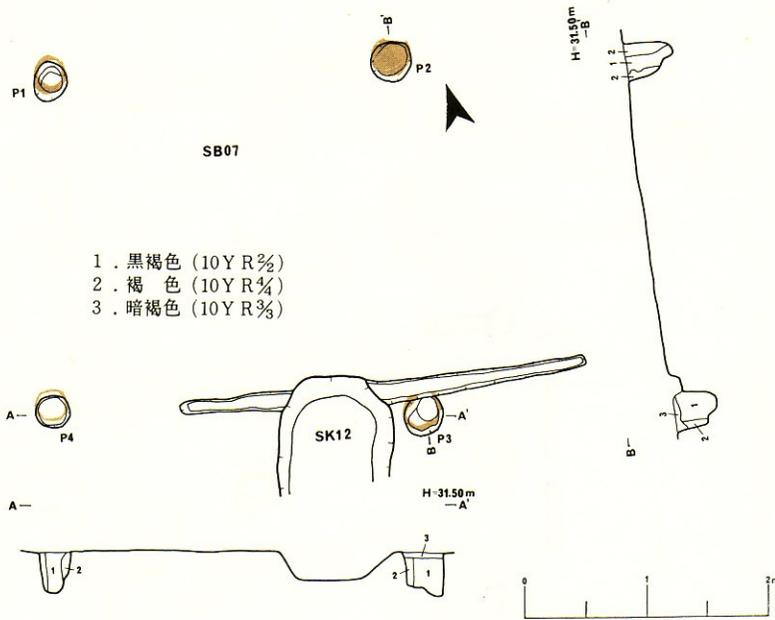
2層下位面から地山にかけて検出。遺構の立地する地形は東に向い傾斜している。確認された遺構は東-西・南-北各1間の建物で、東側は不明。柱間は西側が3.5m、南側が1.7m。柱穴プランはいずれも円形で径は西側隅柱が大きく35~42cm。深さ25~40cm。埋土は焼土を少量含む地山褐色混土で

第8表 S B08柱穴計測表(cm)

P. No	長径	短径	深さ
P. 1	28	24	32
2	40	40	22
3	42	42	42



第51図 SB05・SB06掘立柱建物跡



- 1. 黒褐色 (10Y R $\frac{2}{6}$ )
- 2. 褐色 (10Y R $\frac{4}{6}$ )
- 3. 暗褐色 (10Y R $\frac{3}{6}$ )

第52図 SB07掘立柱建物跡

ある。東側を除く3方の柱列に溝を検出。溝は柱穴を介して掘りこまれており、幅12~25cm・深さ8~15cm。底面は西側が比較的平坦だが、他はやや凹凸を呈する。

SB09掘立柱建物跡 (第53図 図版7)

2層下位面で検出。建物の構造は桁行3間・梁行1間で東西5.9m・南北3.5mの東西棟。E-4°-Sの方向を示す。全体の形が台形を呈する。柱間は梁行が東側で3.5m、西側で3.4m。桁行は北側がそれぞれ1.8mで等分割される。南側は中間の柱間が1.8mで北側と相対応。柱穴プランは方形及び楕円形で、長径の平均値34cm。深さは最深で35cm、他は浅く平均27cm。埋土は比較的軟質の黒褐色土。

第9表SB09柱穴計測表(cm)

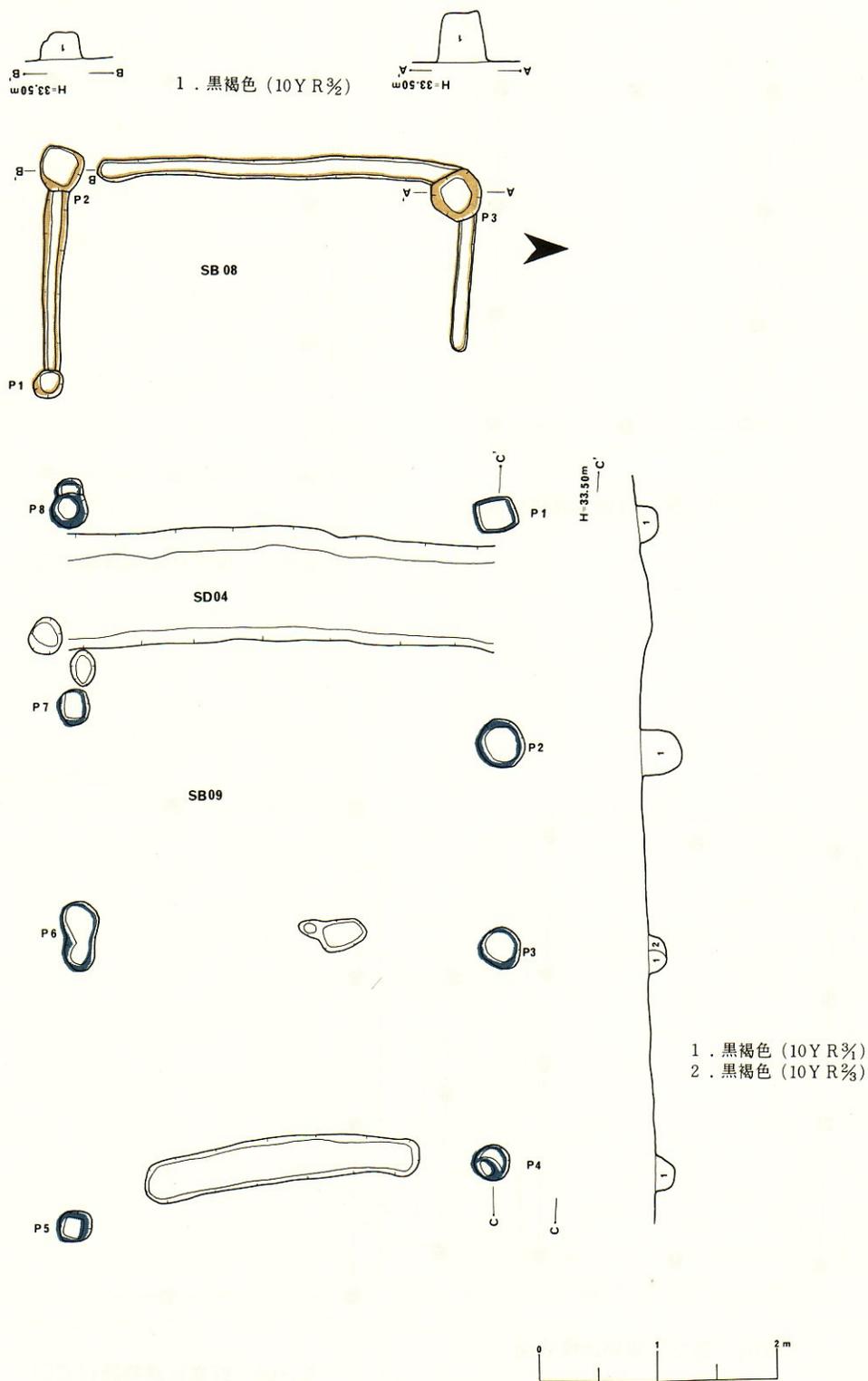
P. No.	長径	短径	深さ
P. 1	40	36	18
2	42	39	34
3	35	34	15
4	30	30	17
5	30	28	35
6	58	23	22
7	30	26	21
8	31	30	18

SB10掘立柱建物跡 (第19図)

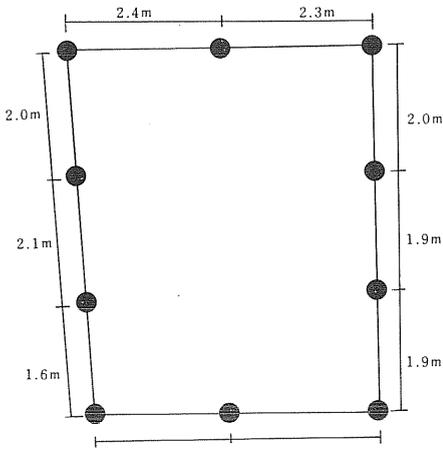
2層中位面から地山にかけて検出された。遺構の構造は東一西・南一北各2間の建物で、柱穴を介する布掘り状の溝を伴う。柱間は東一西方向の場合2m・2.4mに分割され、北側及び南側それぞれの間尺が相対応する。南一北方向では西1間が2.2mで相対応。柱穴のプランは楕円形で長径20~36cm。深さ15~36cm。長径・深さ共、隅柱が大きくて深い。埋土は褐色土を混入する軟質の暗褐色土。建物の南側柱列部分に検出された布掘り状の溝は、SI08 竪穴住居跡の壁にほぼ平行して掘り込まれている。溝の上面幅16~30cm。深さは6~28cm。SI07・08 竪穴住居跡と重複しているが、新旧関係は不明。

第10表SB10柱穴計測表(cm)

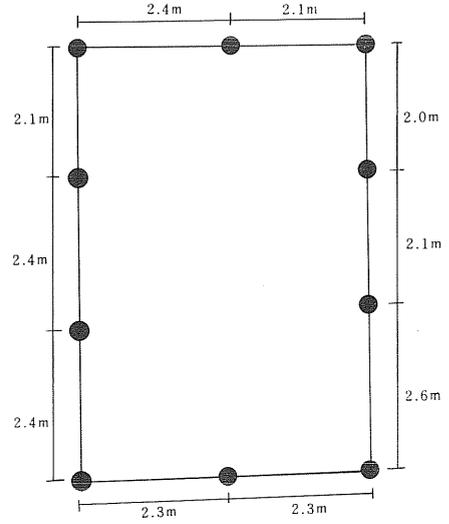
P. No.	長径	短径	深さ
P. 1	26	22	38
2	28	18	25
3	24	22	36
4	28	22	25
5	28	19	21
6	32	28	59
7	32	12	30



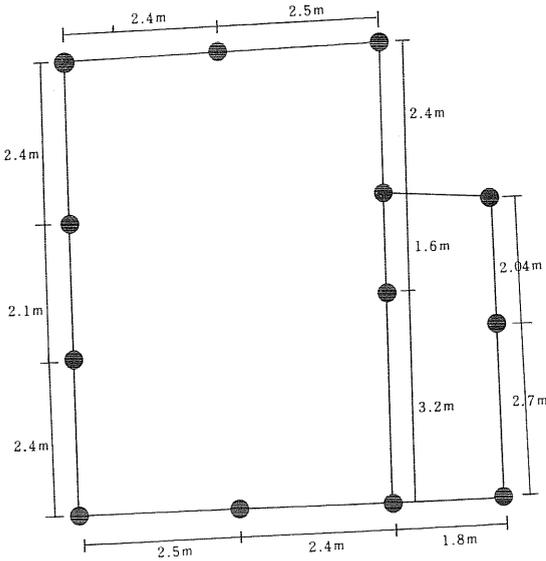
第53図 SB08・SB09掘立柱建物跡



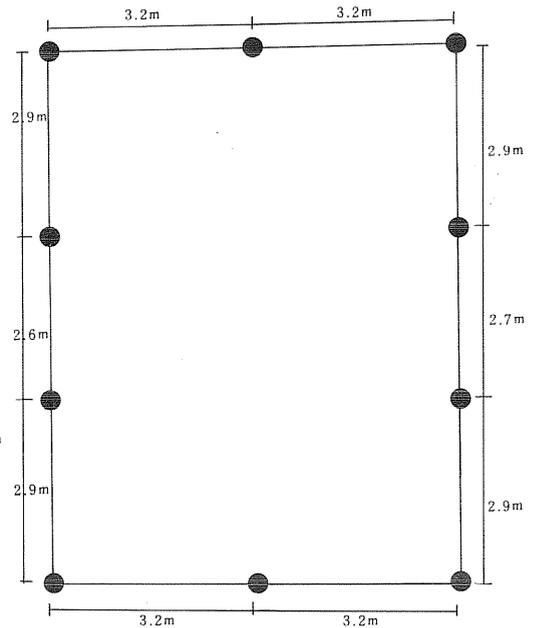
S B01 掘立柱建物跡模式図



S B02 掘立柱建物跡模式図

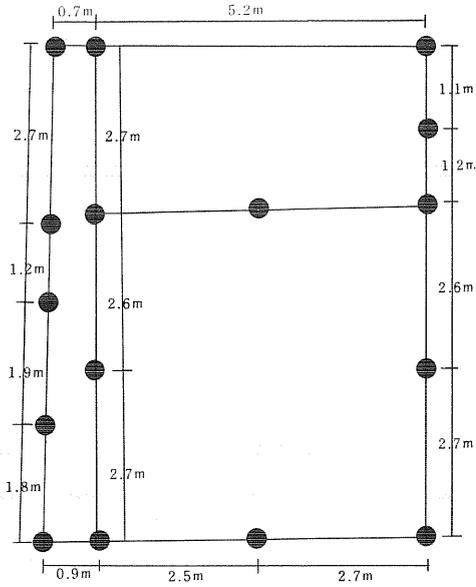


S B03 掘立柱建物跡模式図

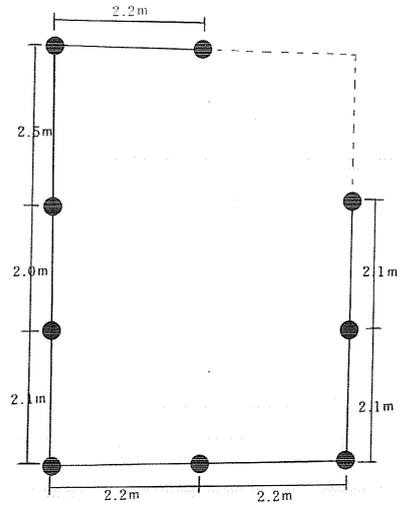


S B04 掘立柱建物跡模式図

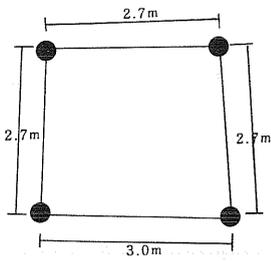
第54図 S B01～S B04掘立柱建物跡模式図



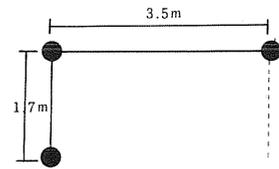
S B 05 掘立柱建物跡模式図



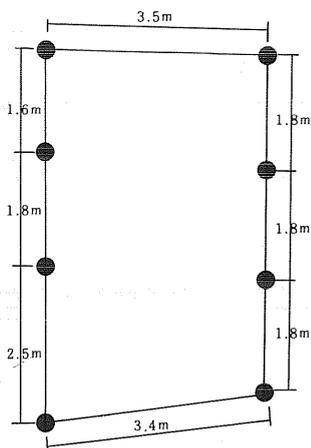
S B 06 掘立柱建物跡模式図



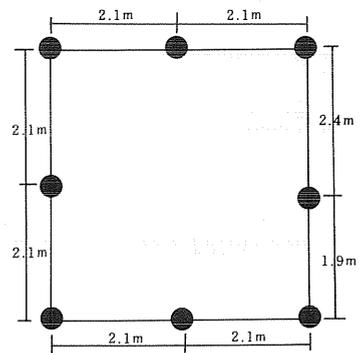
S B 07 掘立柱建物跡模式図



S B 08 掘立柱建物跡模式図



S B 09 掘立柱建物跡模式図



S B 10 掘立柱建物跡模式図

第55図 S B 05～S B 10掘立柱建物跡模式図

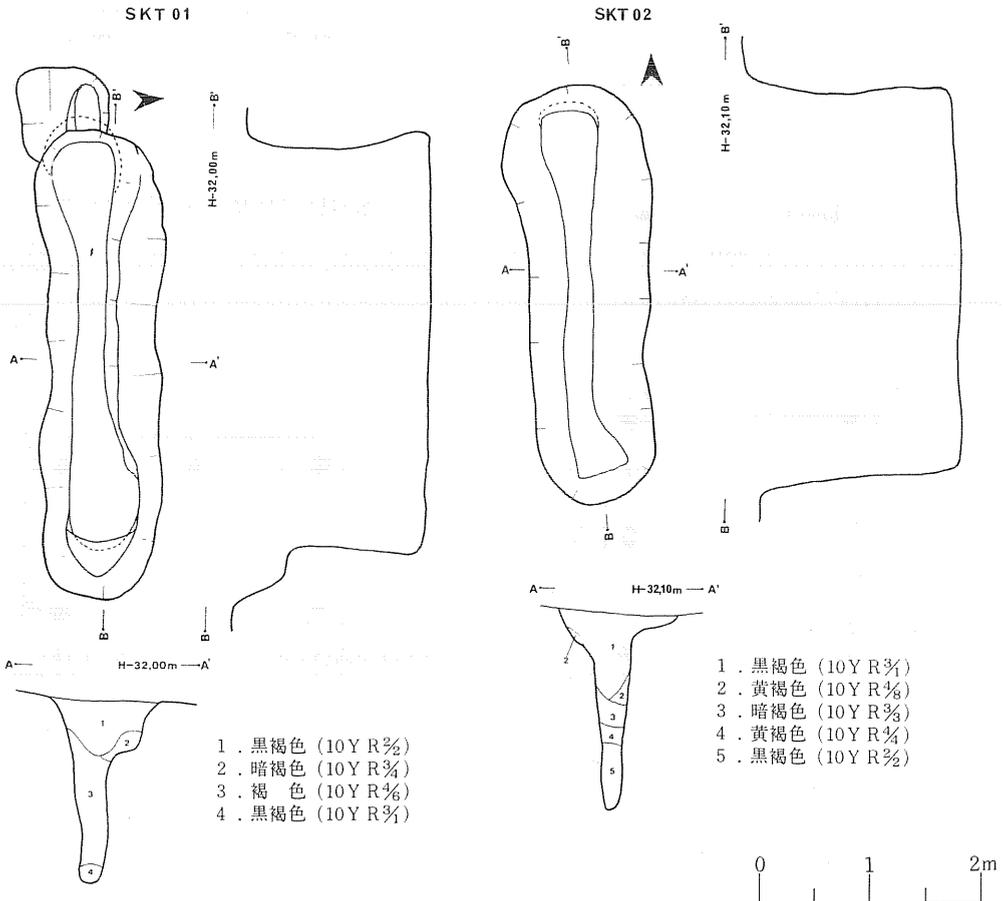
2 陥し穴状遺構

S K T 0 1 陥し穴状遺構 (第56図)

調査区中央部の平坦地で検出。遺構確認面は地山直上。開口部長軸3.1m、短軸0.7m。断面形は壙口部が広く壙底部になるにつれ幅狭くなる楔形を呈し、北壁は上面下30cmの部分で段を形成。長軸方向の東・西壁は弓状に落ち込む。深さ1.3m。堆積土は上層が軟質の黒褐色土。中層以下は壁崩落土である地山褐色土を多量に混入し、最下層には粘質の黒褐色土。壙底部長軸2.8m、短軸0.14m。

S K T 0 2 陥し穴状遺構 (第56図 図版15)

調査区東側の緩斜面地で検出。遺構確認面は2層下位面。確認時遺構周辺に地山褐色混土が厚く堆積。開口部長軸2.8m、短軸1.2m。断面形は楔形を呈し、東壁、西壁共上面直下で段を形成、その後ほぼ垂直に落ち込む。長軸方向の北壁は弓状の落ち込み。深さ1.3m。堆積土は上層が褐色土混入の黒褐色土。中層以下は地山褐色土を多量に混入し最下層は軟質の黒色土。壙底部長軸2.5m。短軸0.1m。



第56図 S K T 01・S K T 02陥し穴状遺構

### 3 溝

#### SD01溝 (第57図)

調査区の南側に検出された東一西にのびる溝で東側がSD02溝と切り合っている。西側ではS105竪穴住居跡と重複するため痕跡が不明となるが、SD05溝と接続し同一の溝となる可能性も考えられる。上面幅42～28cmで西方向程幅狭になる。底面の傾斜は西一東。深さ8～18cm。

#### SD02溝 (第57図)

調査区南東側に検出された北東一南西にのびる溝。上面幅110cm～70cm。南方向程幅広くなる。底面の傾斜は北一南。深さ5～12cm。

#### SD03溝 (第57図)

調査区南西側に検出された。南一北にのびる溝で北端は調査区内で消滅している。上面幅57cm～15cm。南方向程幅広くなる。底面の傾斜は北一南。深さ4～12cm。

#### SD04溝 (第57図)

調査区西側に検出された南北にのびる溝。上面幅はほぼ一定で70cm。底面の傾斜は北一南。深さ6～18cm。表土層での観察から現代に近い時期に掘りこまれたものと考えられる。

#### SD05溝 (第57図)

調査区の南側に検出された。溝は西側で二股に分かれ、一方は北側に向って調査区を通りぬける。東側はS105住居跡の部分で南におれ、幅広くかつ深くなって南進する。土面幅は42～100cm。底面の傾斜は西一東。深さ8～45cm。

#### SD06溝

調査区の西側に検出された南一北にのびる溝。上面幅は71～120cm。底面の傾斜は南一北。深さ5～12cm。

#### SD07溝 (第57図)

調査区の南東側に検出された南一北にのびる溝。上面幅は50～90cm。底面の傾斜は北一南。深さ5～20cm。SD02溝の途中から分離しており、両者は同一の溝とも考えられる。

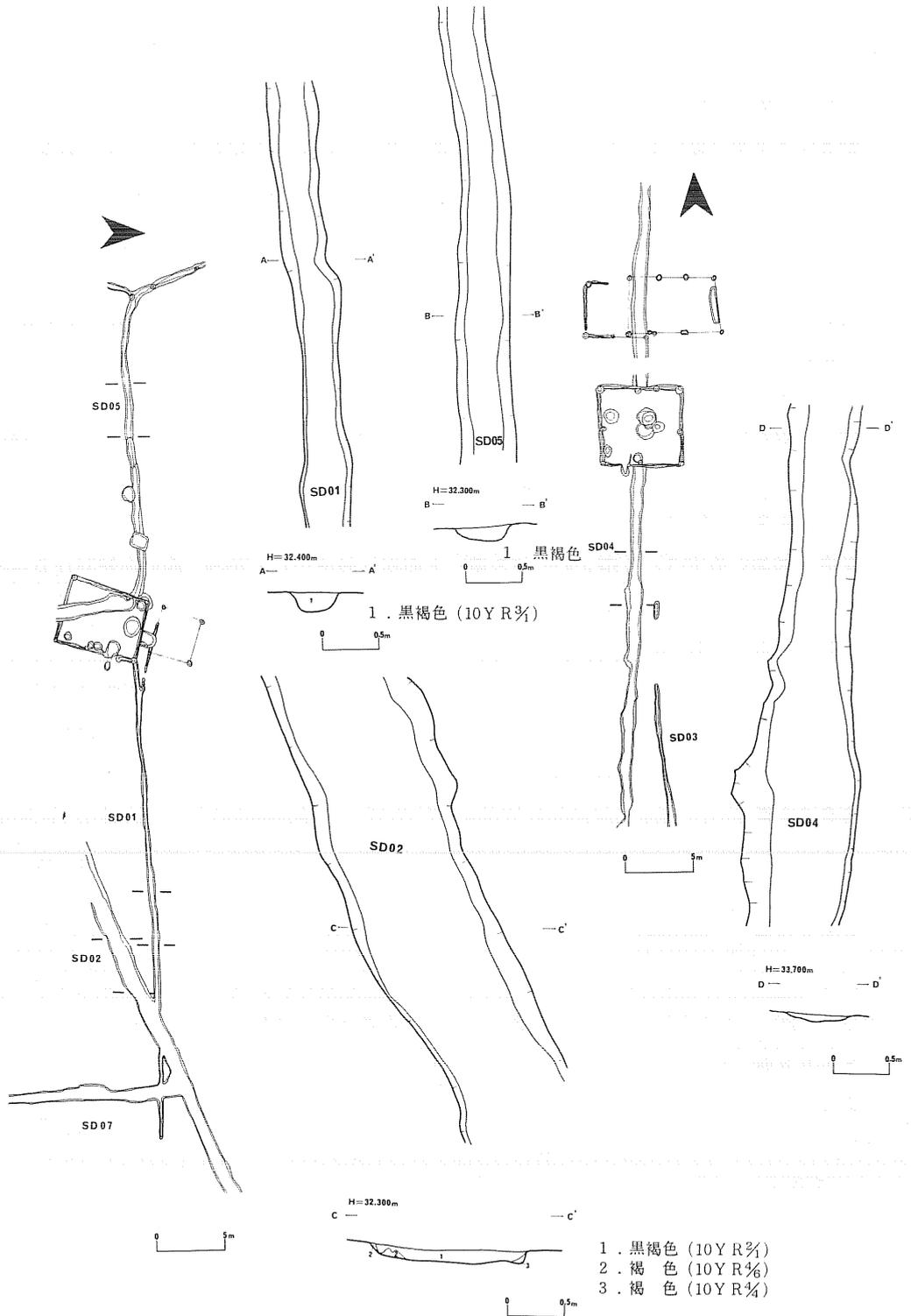
#### SD08溝

調査区の南東側に検出された南一北にのびる溝。上面幅15～24cm。底面の傾斜は北一南。深さ10cm。

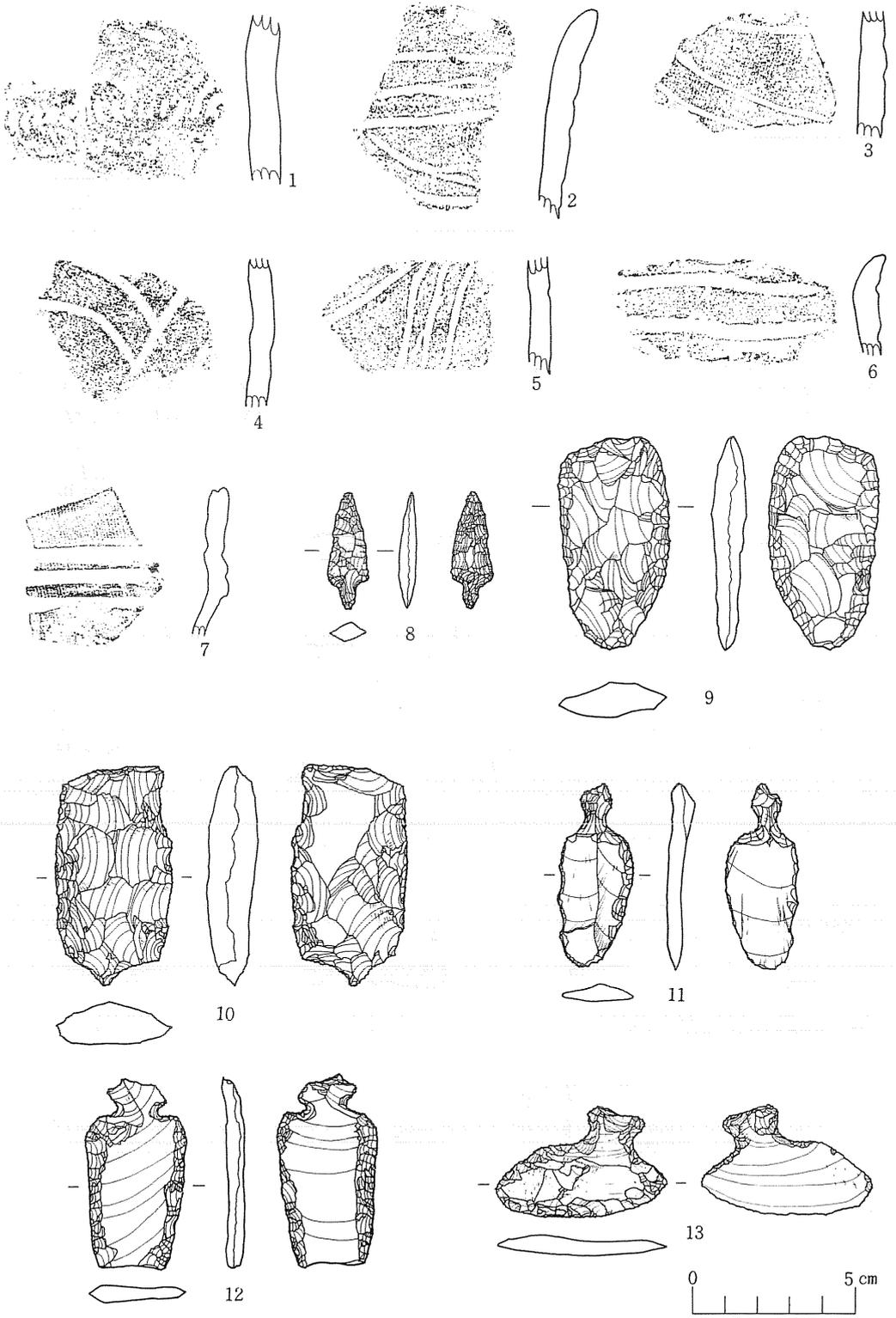
### 4 遺構外出土遺物

#### 青磁

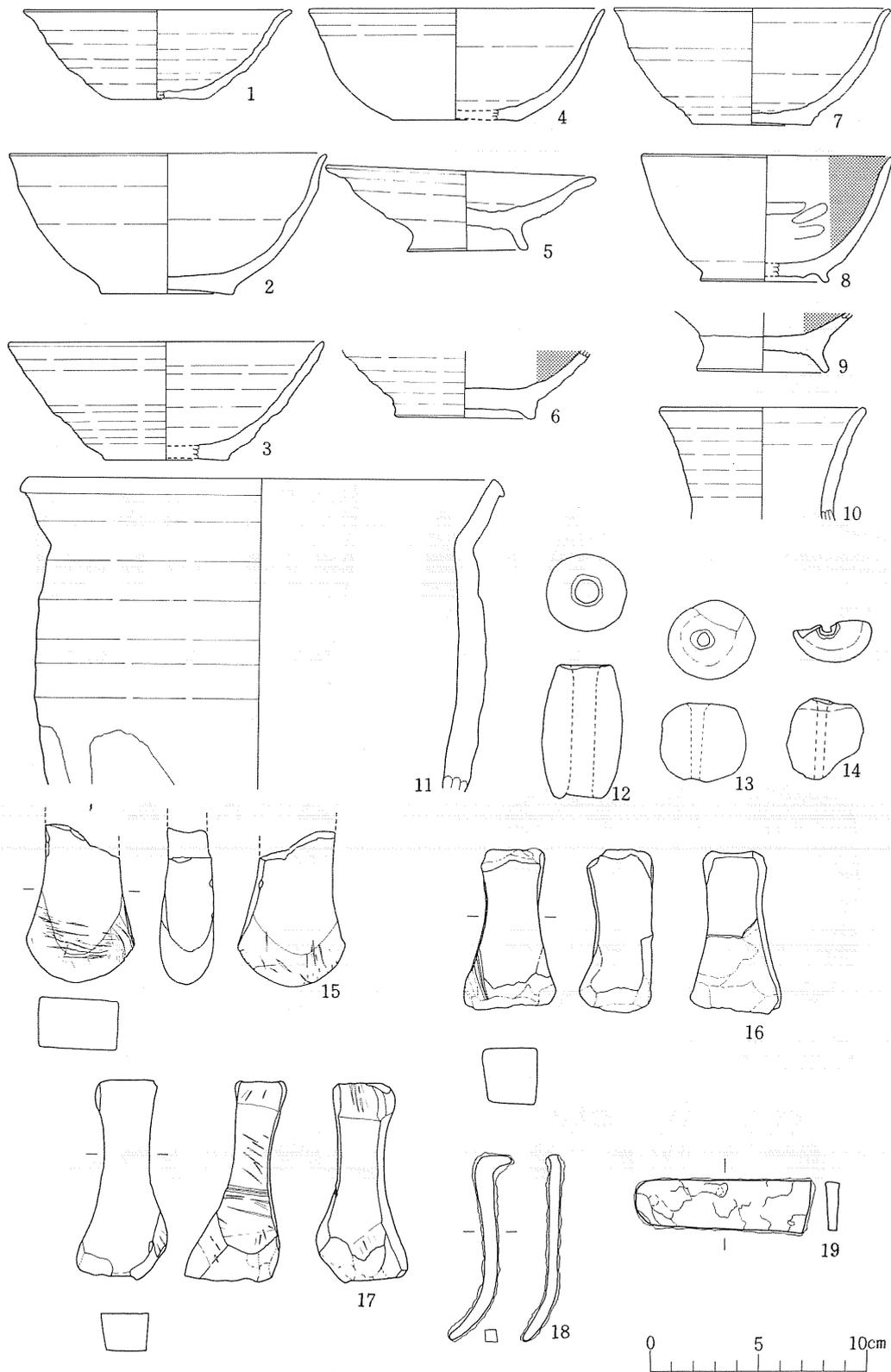
調査区中央部区域の2層から1点出土。龍泉窯系青磁碗の高台部破片である。



第57図 SD01~SD05・SD07溝



第58図 遺構外出土遺物（縄文時代）



第59図 遺構外出土遺物(平安時代)

## 第5章 理化学的分析

### 第1節 火山灰分析

#### 能代市上の山Ⅱ遺跡の火山灰分析結果について

群馬大学教育学部 新井 房 夫

1. 超音波水洗・乾燥処理した3試料について、鉱物組成、火山ガラスの形態の特徴、本質物質とみなせる火山ガラスおよびアルカリ長石の屈折率特性を記載した(第11表)。

2. 3試料ともごく細粒のガラス質火山灰で、本質物質とみなせる火山ガラスおよびアルカリ長石の屈折率特性はよく一致し、火山ガラスの形態・粒度の特徴ともあわせて、白頭山一苦小牧火山灰(B-T m)に対比(同定)できる。

表に示した重鉱物、石英などの結晶粒は比較的粗粒の破片からなりそれらの大部分は周辺土層からの混交物とみなせるもので、この火山灰層を特徴づけるものではない。

3試料中では、S I 09が最も高純度で、S I 16～S I 17の順に不純となる。

3. B-T m火山灰は東北地方北部～北海道南部の広域に分布するアルカリ岩質粒ガラス質火山灰で、西方の日本海海底にも広く追跡され、給源は白頭山と考えられている。その年代はこれまでに知られた考古遺跡との関係から約800～900年前と推定されている。

4. 高純度なS I 09、S I 16の火山ガラス形態的特徴を示す顕微鏡写真を付す。

平均最大粒径0.3mm前後のごく薄手の軽石型(センイ状～スジの入るもの)を主とし、バブル型(平板状に見える)を伴う。またやや淡色を帯びることが特徴である。

第11表 上の山II遺跡火山灰分析結果

試料	1 試 度	2 系 相 対 量 比	3 成 分 比	4 結 晶 度	5 大 山 ガ ラ ス の 形 態	6 大 山 ガ ラ ス の 結 晶 度	7 基 質 の 成 分				8 粒 数 glass	9 glassの 色	10 記 事	
							pl	al	an	ab				
S 107 (2~5cm)	C	hohyan, mt(bl)	pl	++	pa>bw	r	pl al(n <sub>1</sub> )	1.511-1.520 1.522-1.524	1.515-1.519	—	1.523	0.2-0.3mm	無色透明	結晶の大部分は歪変によるもの、 B-Tm ash (不純)
S 109 (1cm)	A	ky, ka, mt(bl)	pl	+	pa>bw	vr	pl al(n <sub>1</sub> )	1.512-1.520 1.522-1.524	1.515-1.520	—	1.523	0.3	同上	高純度のB-Tm ash (結晶の大部分は歪変によるもの)
S 116 (3cm)	B	ky, ka, mt(bl)	m	+	pa>bw	vr	pl al(n <sub>1</sub> )	1.511-1.520 1.522-1.524	1.515-1.520	—	1.523	0.3	同上	やや不純なB-Tm ash ( )

凡例 1. 試度 A(非純に多い), B(普通), C(多い) 2. 鉱物種略号 pl(ガラス), ky(斜方輝石), ka(角閃石), mt(普通輝石), mc(磁鉄鉱), al(アリの石)  
 3. 結晶に対する基岩物比 pl(多い), mt(普通), pl(少ない), vt(非常に) 4. 石英含有量 ++(多くある), +(ある), -(ない)  
 5. 火山ガラスのタイプ pa型(斜方輝石型), bw型(角閃石型) 6. 結晶に対する火山ガラス片で記号は3と同様



S 109, 上の山II, B-Tm; N10 0.1mm



S 116, 上の山II, B-Tm; N10 0.1mm

第60図 S 109・16竪穴住居跡から検出された  
火山灰の火山ガラス顕微鏡写真

## 第6章 ま と め

上の山Ⅱ遺跡は東西650m、南北300mの範囲に及ぶ広大な遺跡であり、本年度はこのうち沢地に面する南側の一部を調査したものである。東側は昭和58年度に調査されており、平安時代の集落跡である事が確認されている。

調査の結果、本遺跡は主として平安時代に営まれた集落跡である事が判明した。以下、遺跡の特徴について、検出された遺構及び出土遺物を混じえながら下記に述べたい。

1. 検出された遺構について。竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壇、陥し穴状遺構、溝及び土器埋設遺構が確認された。この内本項では竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壇について記載する。

竪穴住居跡はすべて平安時代に属し、その構造に類似性を持つものが多い。柱穴はいずれも壁柱穴を基本としており、4本の隅柱と隅柱間に中間の柱を持つものが多い。又、壁溝を有するものも多く、平面形態が長方形のものは全ての遺構に伴う。カマドは各辺壁の端に寄せて構築されており、その設定基準として辺壁長を4等分し、その1方の側部分に設定される傾向を持つ。カマドの主軸方向(燃烧方向)は、南東、北東、及び南方向であり、このうち南東のものが最も多い。この事は本地域の風向と密接な係りを持つと思われ、同時に地形的には斜面下に向けて煙出し部を設定する傾向がみられる。その他3遺構の床面中央部に径1～2.7mの楕円形の掘り込みが検出された。SI01、09竪穴住居跡では堆積土層の観察から住居跡に伴うものと考えられ、SI11についてもその可能性が考慮される。その使用方法としては、床面が板敷と考える事によって、床下の収納施設としての利用が考えられる。又、SI03、SI06竪穴住居跡の場合は、床面が1段凹んでおり、前者はカマドに付随した作業空間、後者は間仕切り部分と思われ住居跡内における空間の使い分けが行なわれていたと考えられる。

掘立柱建物跡については、5棟が梁もしくは桁行部分に柱穴を介した布掘り状の溝を伴うものであるが本遺構で検出された建物跡についてはその構築の時期を明確にすることが出来なかった。しかし時期を考慮する上で次の様な事を確認しており、今後の類例と兼ね合わせ参考としていきたい。一部の柱穴の掘り方埋土及び溝から土師器坏片が少量出土している。又、SB05建物跡の西側梁行部分に伴う溝はSI04竪穴住居跡と重複するが、住居跡の堆積土にその痕跡は観察されなかった事である。布掘り溝を伴う建物跡については本県では平安時代と考えられている北の林Ⅱ遺跡で確認されているのみである。しかし近世に属するものとしては岩手県で数例検出されており(天沼Ⅰ遺跡、下猿田Ⅳ遺跡)、布掘り溝の用途として「壁の構造や設計段階の縄張りに関連する可能性がある」とし、加えて地域的な工法例とも考えられている。

土壌は形態、確認面、堆積土状況の類似から、いずれも平安時代に属すると考えられる。このうち多くの土壌から焼土、炭化物が検出されている。中でも多量に検出されたものについてみると、二次的な堆積や投げ込み等によるもの（SK07）の他、明らかに土壌内で火熱作業を行ったもの（SK05・10・12・13・16・25・28・29）がある。後者の場合いずれも底面、壁面もしくは堆積土の一部が火熱により硬化しており、その他内部に多量の炭化物や炭化材が集積している（SK10・16）、多量の土器を出土、その一部は2次加熱により部分的に赤変している（SK26・44）、鉄滓を出土する（SK28）等の特徴を持つものがある。加えてSK10・25・28・29では底面に地山褐色混土を人為的に埋め戻し固めて、その上面を火床面として利用しており、土壌が火熱を目的とする用途のため構築された事を示している。

2. 出土遺物について。本遺跡から出土した遺物は土器が縄文土器(前期・後期・晩期)、土師器、須恵器、陶磁器としては緑釉陶器、青磁があり、その他土製品として土錘、フイゴの羽口がある。石器は石匙等の定形石器、石製品として砥石がある。これらのうち出土量が多いのは平安時代の遺物の中でも土師器が最も多い。須恵器は完形のものが高台付皿形土器1個であり、その他は破片で量は少ない。本項では土師器について記述すると共に、出土量は少ないが、県内における集落跡からの出土としては希少な緑釉陶器についても合わせて記載する。

土師器のうち甕は遺構内外から多量に出土した。器体は器高25cm以上の比較的大形のものとしてそれ以下の小型のものに大別される。大型では胴部がややふくらんで立ち上るものが多く、小型では胴部はより緩やかなふくらみを示すものと、直線状に立ち上るものがある。口縁部は幅が3cm以上の広いものと、それ以下のものがあり、前者では多くの場合口縁部に丁寧な横ナデが施されており、形状は、くの字形にやや強く屈折するものが多い。後者では横ナデが施されたものの他、指で摘み出したままの粗雑なつくりのものも多く、多くの場合比較的緩やかに外反する。器面調整は、外面ではヘラナデ、ヘラケズリを施しており、少量ではあるがタタキ具の痕跡を留めているものもある。この場合内面には刷毛目痕が認められる。成形はロクロによるものが小型の甕にみられるが数は少ない。又、底面が砂底であるものも比較的多く出土している。

杯は遺構内より多く出土している。底部は①いずれも回転糸切りによる切り離しで、無調整である。器形は体部が直線的に立ち上るもの、②やや内湾しながら曲線的に立ち上るものと、その他③底部がやや厚くつくられ、体部下半が外反気味に立ち上って平坦緩く屈曲し、その後曲線状に立ち上るものがある。口縁部は①では直線的なものが多い。②では直線的の他、緩く外傾したり、上半でわずかにくびれその後強く外反するもの等があり、量的には外傾するが多い。③の場合はいずれも緩く外傾する。その他高台を付するものも少量ある。高台は低いものと、外側に向かって開いた高いものがあり前者では内面に黒色処理を施す杯が多く後者

は杯部が浅い皿状を呈する。口径を1とした場合の底径比率は①が0.38～0.49、②が0.33～0.47となり、そのうち①では0.41～0.43、②では0.35～0.39のものが最も多い。③では0.33～0.41で、その多くは0.3台である。又、遺構から出土した杯について、その共伴関係をみてみると、①、②、③いずれの場合も共伴するが全体において①の占める比率は少なく、量的には②が多い。又、②のうち口縁部が強く外反するものは数も少なく、出土する遺構もSI01、13堅穴住居跡に限られる。同様に③についてもSI01、15堅穴住居跡にのみ検出されている。

緑釉陶器は、碗の破片で3個出土している。いずれも遺構内より出土しているが、このうちSK44のものは出土層が明確でなく、重複するSI15堅穴住居跡に伴う事も考えられる。この場合、緑釉陶器の出土するSI01、SI15両堅穴住居跡は、出土遺物である土師器杯が上記分類③に属するものであり、かつこれらの遺構のみに出土している事から、緑釉陶器についても③の土師器杯と限定された形で共伴する事が想定される。又、緑釉陶器は近江系で、その生産は短期間のものであり、その使用期間を考慮しても、10世紀後半を中心に11世紀初頭までに限られる事から、共伴する遺物についての良好な年代資料となろう。

3. 火山灰について。検出された火山灰は粉状で、黄白色の色調を呈しており、分析の結果苦小牧火山灰と判明した。この火山灰は東北地方北部から北海道南部にわたって広く分布しており、その供給源は韓国・北朝鮮国境の白頭山と考えられている。噴出年代は11～12世紀後半に想定されている。本遺跡では2棟の堅穴住居跡から検出されており、SI07堅穴住居跡では堆積土上層に、SI09堅穴住居跡では床面直上に薄く層として観察される。この事から火山灰は2棟の住居跡が廃絶した後に降下堆積したと考えられるが、SI09堅穴住居跡では住居跡廃絶と火山灰降下の間における時間的隔りは極めて短いものと思われる。

最後に本遺跡の年代は次の様に考えられる。遺物のうち土師器杯の多くは全て回転糸切り無調整のもので、所謂須恵<sup>(註8)</sup>系土器であり、これら杯と共伴する緑釉陶器は限られた期間内に生産されたものである事、さらに苦小牧火山灰が検出された遺構については、その廃絶した時期が火山灰降下よりもやや以前である事等から、主として平安時代中葉の10世紀後半を中心とした時期に生活が営まれたものと考えられる。

註1 秋田県内における沿岸地域の風向 (昭和37年)

1月—北西	2月—西北西	3月—西北西	4月—東南東	5月—南東	6月—南東
7月—南東	8月—南東	9月—南東	10月—東南東	11月—北西	12月—北西

- 註2 秋田県教育委員会「下乳牛遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書XI』1984(昭和59年) 竪穴住居跡より敷板材が検出されている。
- 註3 秋田県教育委員会「北の林II遺跡」『東北自動車道発掘調査報告書IV』1982(昭和57年)
- 註4 (財)岩手県埋蔵文化財センター「天沼遺跡」『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』1984(昭和59年)
- 註5 (財)岩手県埋蔵文化財センター「下猿田IV遺跡」『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』1984(昭和59年)
- 註6 高橋興右衛門「岩手県に於ける中・近世の掘立柱建物跡」『(財)岩手県埋蔵文化財センター紀要I』1983(昭和58年)
- 註7 新井房夫「テフラと日本考古学」『古文化財に関する保存学と人文・自然科学』1984(昭和59年)
- 註8 白鳥良一「多賀城出土土器の変遷」『宮城県多賀城調査研究所・研究紀要VII』1980(昭和55年)



図版1 上ノ山II遺跡周辺地形（航空写真）



SI 01 竖穴住居跡・SK44 土壙出土緑釉陶器



SI 19 竖穴住居跡出土遺物



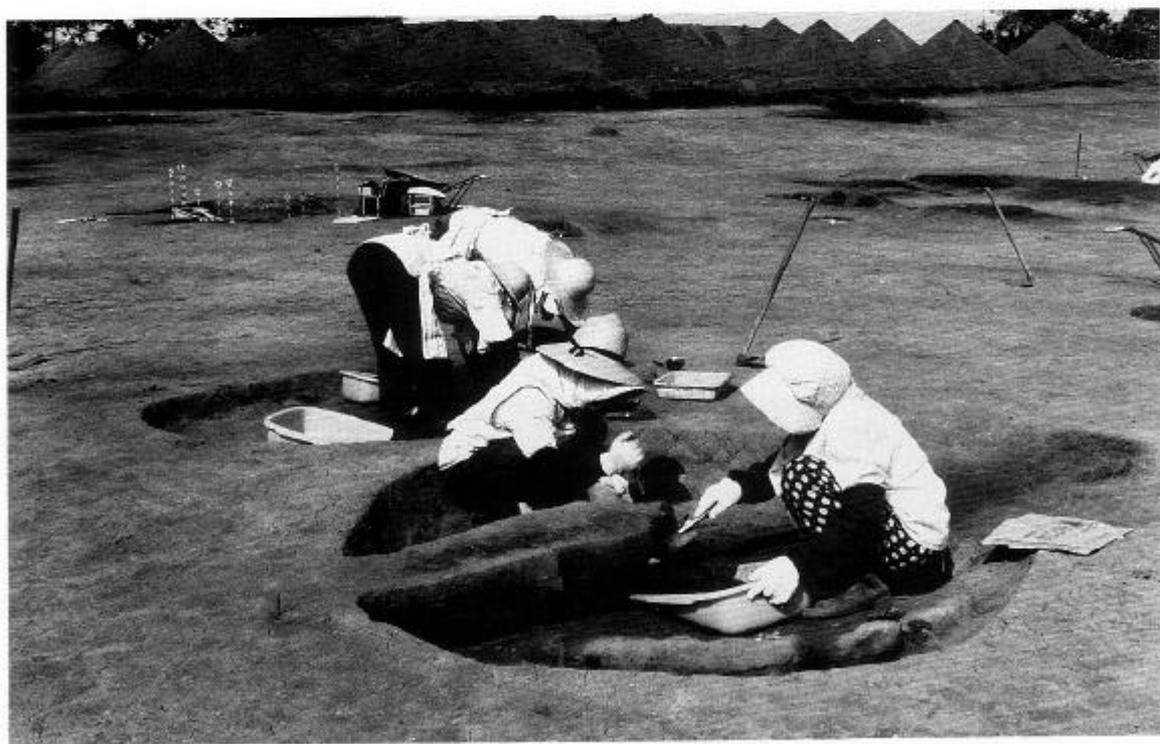
遺跡遠景（北-南）



遺跡遠景（東-西）



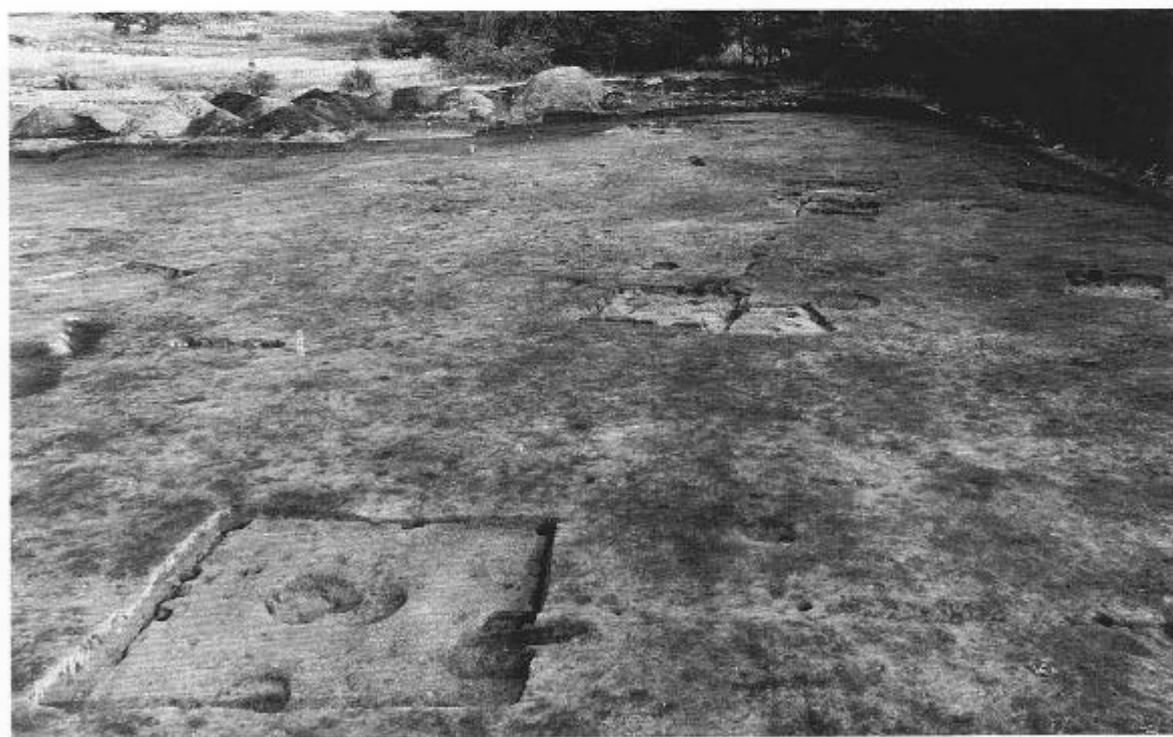
調査区現況（北-南）



調査風景



調査風景



遺跡全景（北-南）



遺跡全景（南—北）



遺跡全景（東—西）



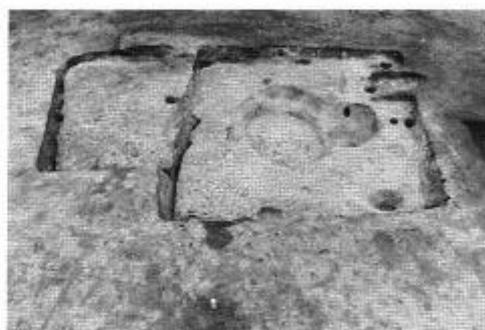
S I 01・02・17・19 竪穴住居跡 (北-南)



S I 01・02・17・19 竪穴住居跡 (南-北)



S I 01・02 竪穴住居跡 (南-北)



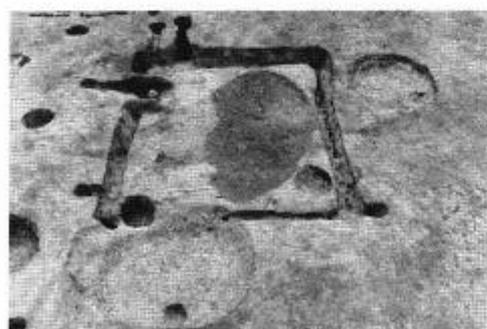
S I 01・02 竪穴住居跡 (西-東)



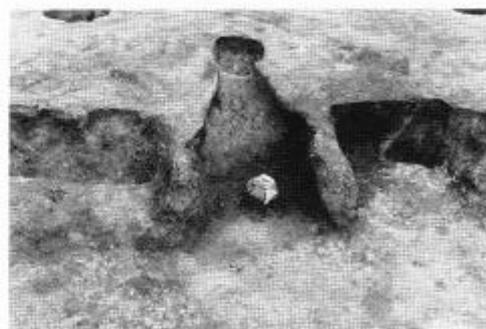
S I 03 竪穴住居跡 (西-東)



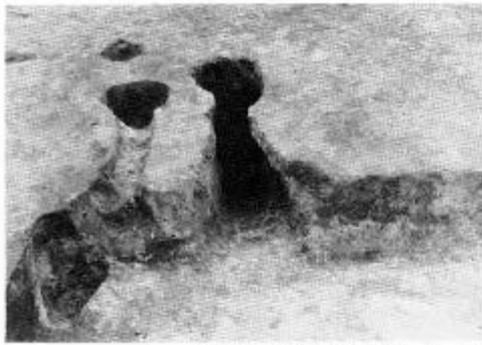
S I 03 竪穴住居跡 カマド



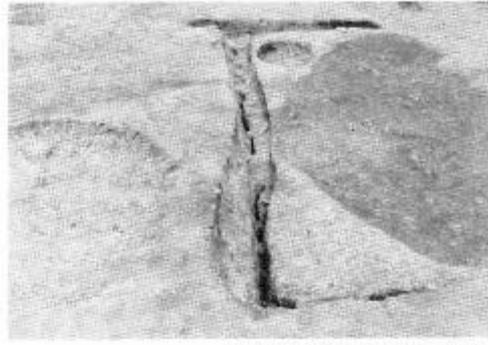
S I 04 竪穴住居跡 (北-南)



S I 04 竪穴住居跡 カマド



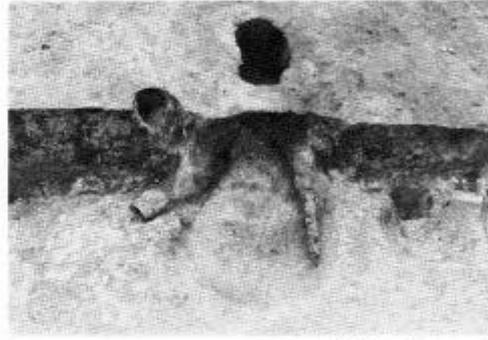
SI04 竪穴住居跡 カマド



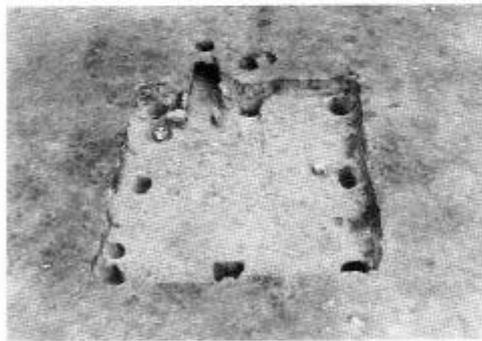
SI04 竪穴住居跡 壁溝



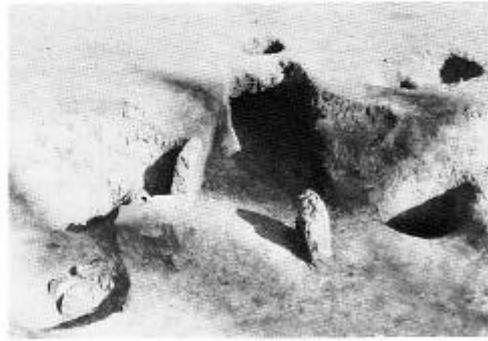
SI05 竪穴住居跡 (東-西)



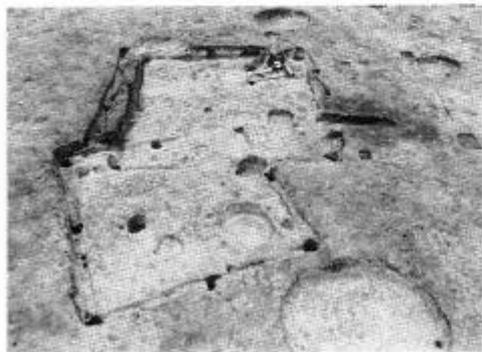
SI05 竪穴住居跡 カマド



SI06 竪穴住居跡 (北-南)



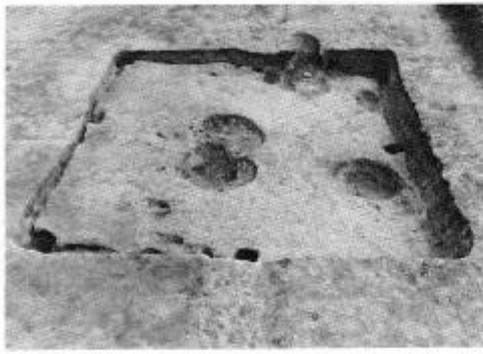
SI06 竪穴住居跡 カマド



SI07・08 竪穴住居跡 (西-東)



SI08 竪穴住居跡 カマド



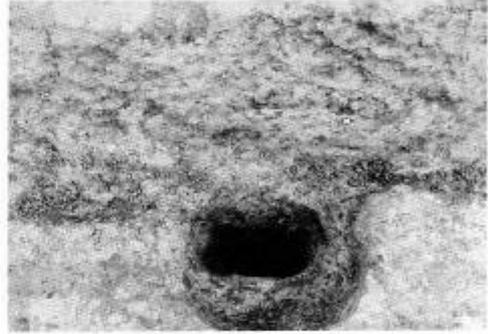
SI 09 竪穴住居跡 (東-西)



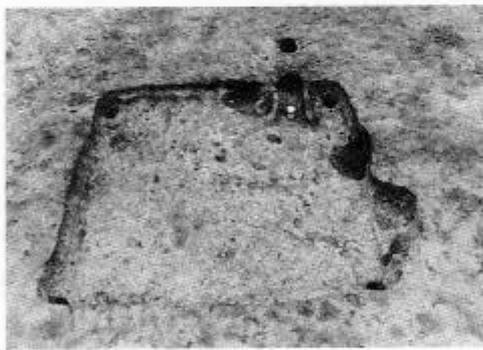
SI 09 竪穴住居跡 カマド



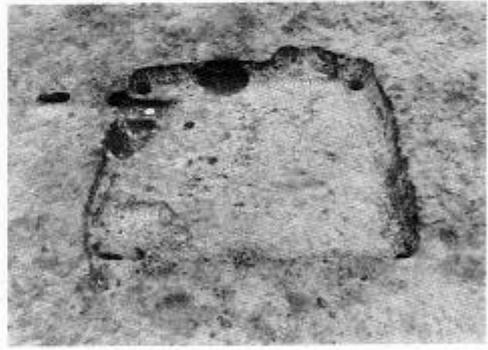
SI 09 竪穴住居跡 堆積土



SI 09 竪穴住居跡 柱穴



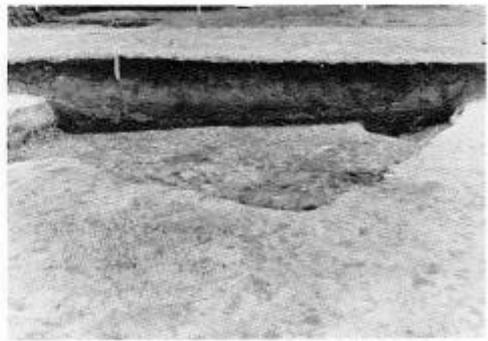
SI 10 竪穴住居跡 (北-南)



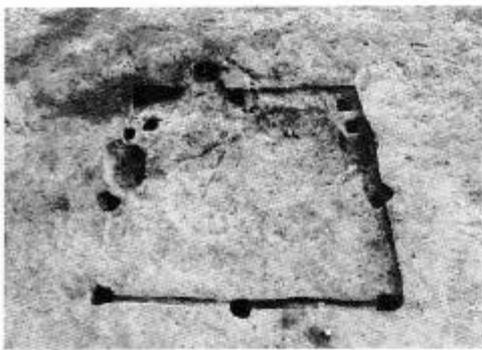
SI 10 竪穴住居跡 (東-西)



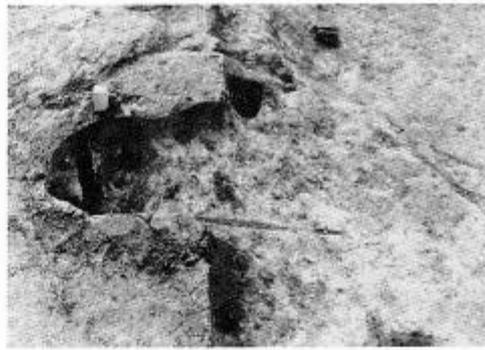
SI 10 竪穴住居跡 カマド



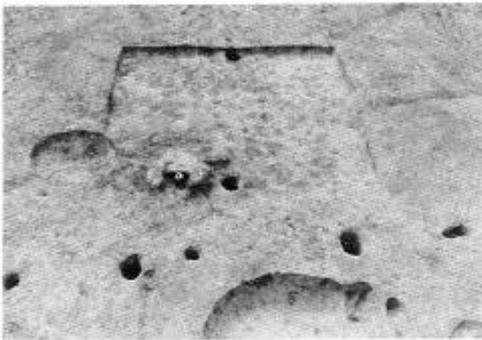
SI 10 竪穴住居跡 堆積土



SI 11 竪穴住居跡 (東-西)



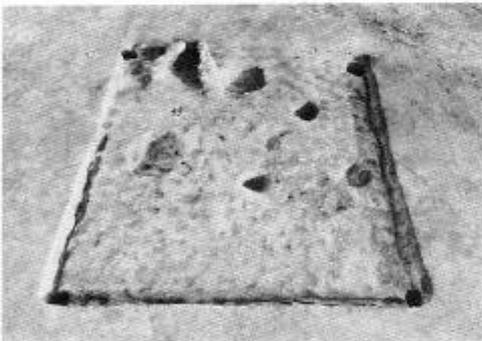
SI 11 竪穴住居跡 カマド



SI 12 竪穴住居跡 (東-西)



SI 12 竪穴住居跡 カマド



SI 13 竪穴住居跡 (北-南)



SI 13 竪穴住居跡 カマド



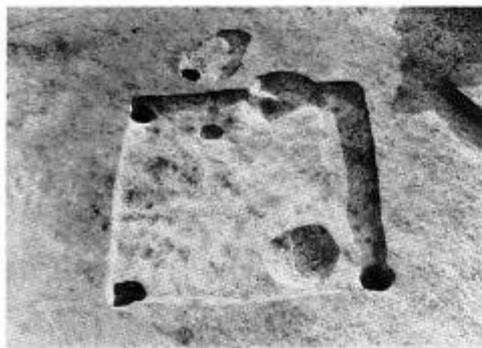
SI 13 竪穴住居跡・カマド内土器出土状態 ①~③



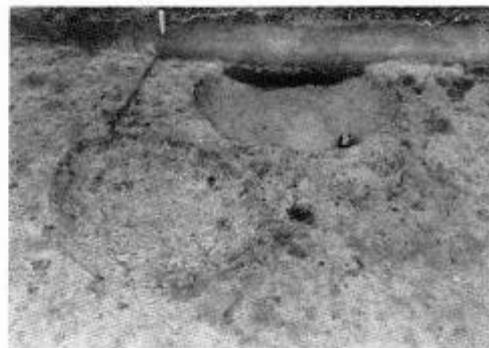
②



③



SI 14 竖穴住居跡 (東-西)



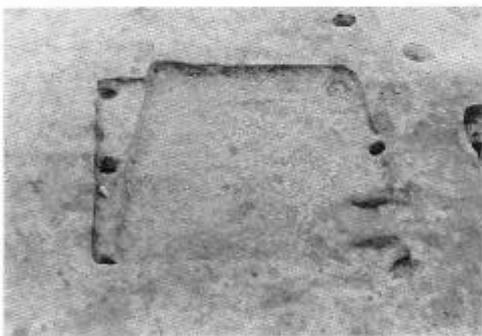
SI 15 竖穴住居跡 (南-北)



SI 16 竖穴住居跡 (北-南)



SI 16 竖穴住居跡カマド



SI 17・18 竖穴住居跡 (西-東)



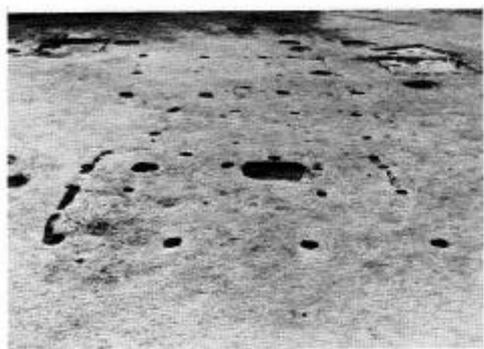
SI 17・18 竖穴住居跡カマド



SI 19 竖穴住居跡 (南-北)



SI 19 竖穴住居跡カマド



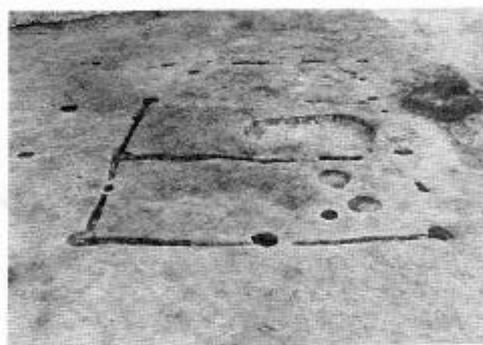
SB01·02 掘立柱建物跡（東—西）



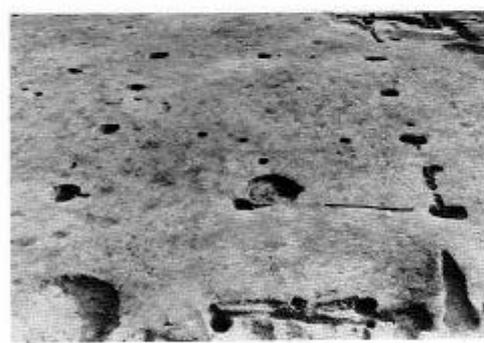
SB01 掘立柱建物跡（南—北）



SB02 掘立柱建物跡（南—北）



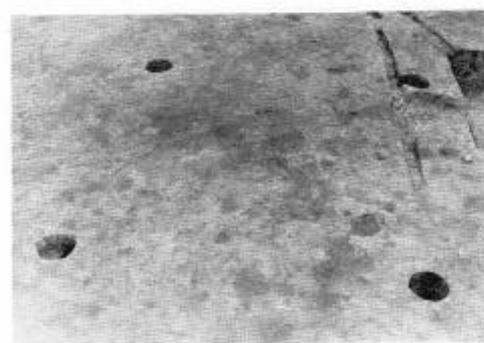
SB03 掘立柱建物跡（南—北）



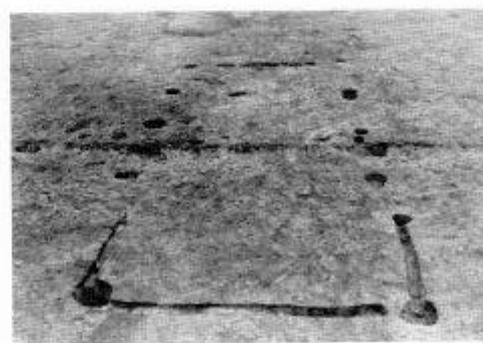
SB04 掘立柱建物跡（北—南）



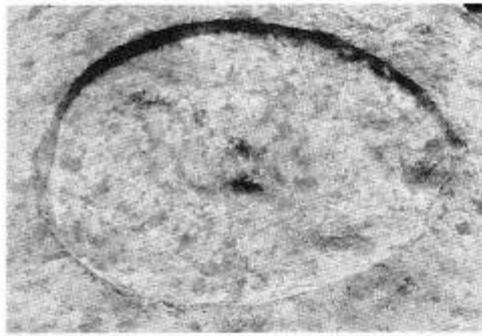
SB05·06 掘立柱建物跡（南—北）



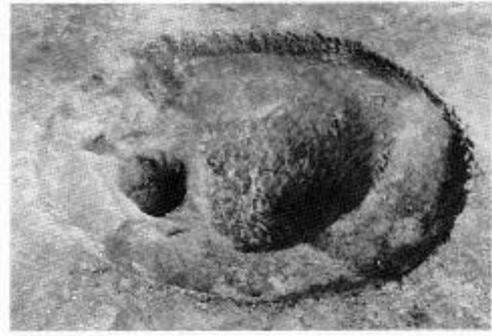
SB07 掘立柱建物跡（南—北）



SB08·09 掘立柱建物跡（南—北）



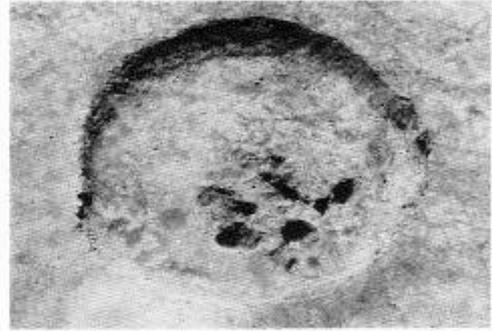
SK01 土 壙



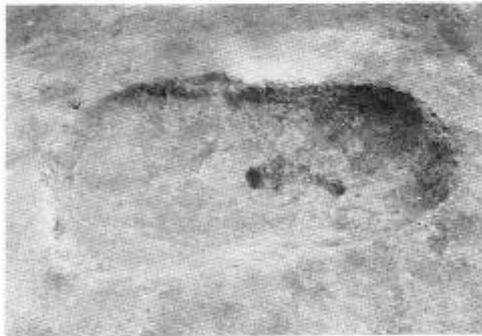
SK02 土 壙



SK03 土 壙



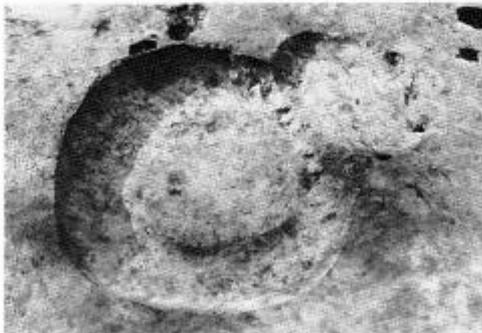
SK04 土 壙



SK05 土 壙



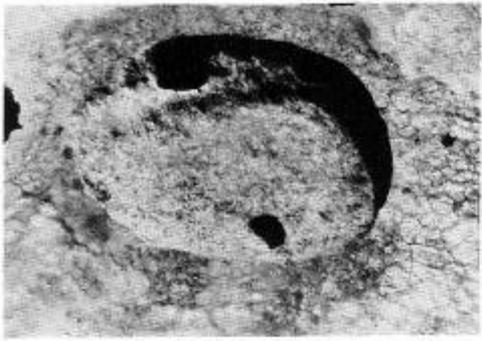
SK06-08 土 壙



SK07 土 壙



SK08 土 壙



SK09 土 壙



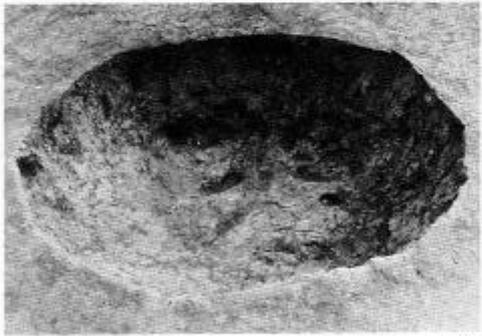
SK11 土 壙



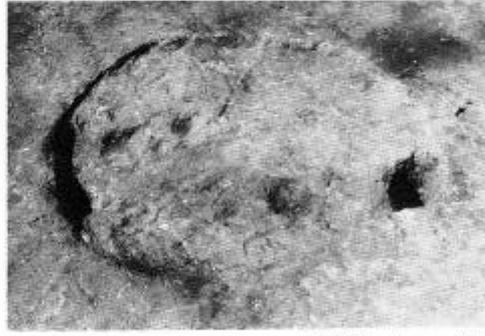
SK17 土 壙



SK18 土 壙



SK21 土 壙



SK24 土 壙



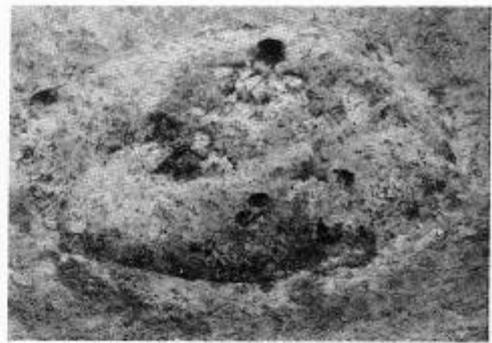
SK26 土 壙



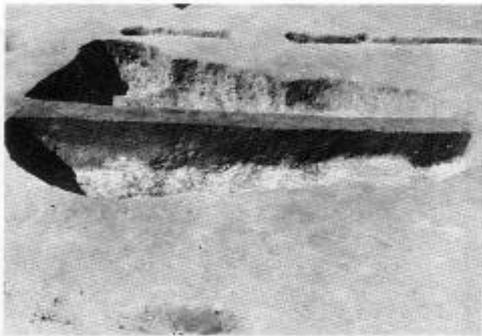
SK27 土 壙



SK29 土壙遺物出土狀態



SK29 土壙



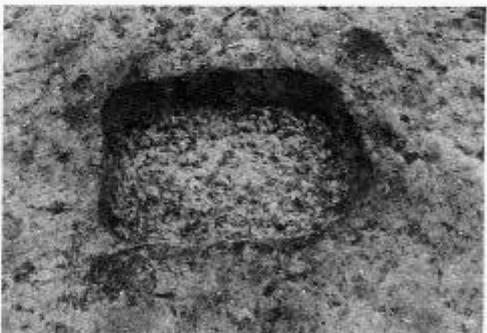
SK34・SK39 土壙堆積土



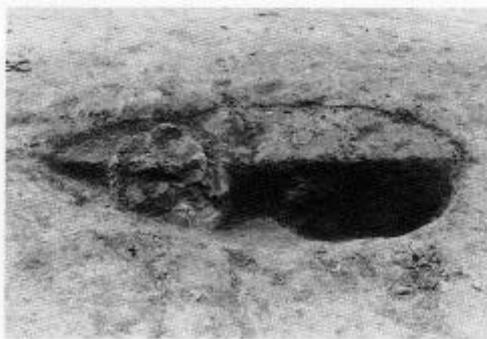
SK34・SK39 土壙



SK35 土壙



SK37 土壙



SR01 土器埋設遺構



SKT01 陥し穴状遺構



SKT02 陥し穴状遺構



1



2



3



4



5



6



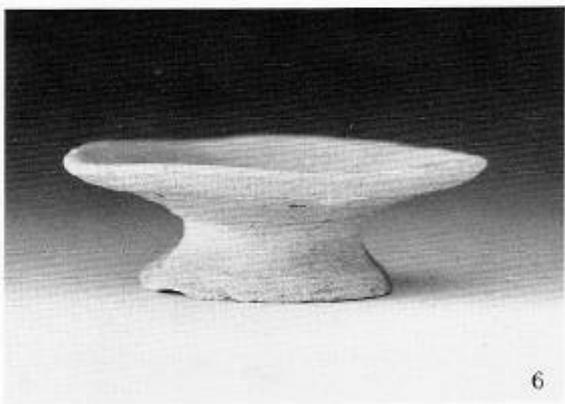
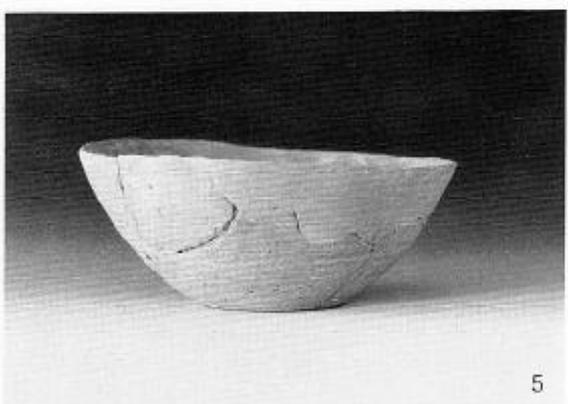
7



8

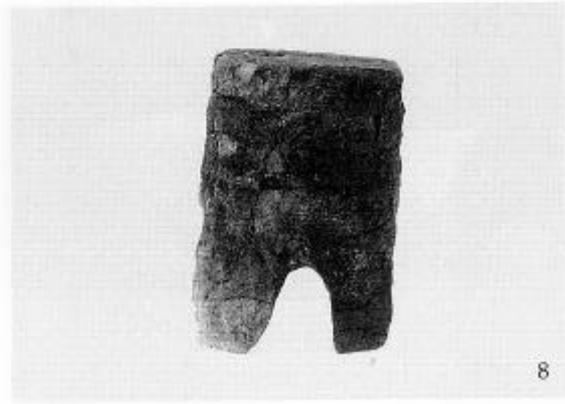
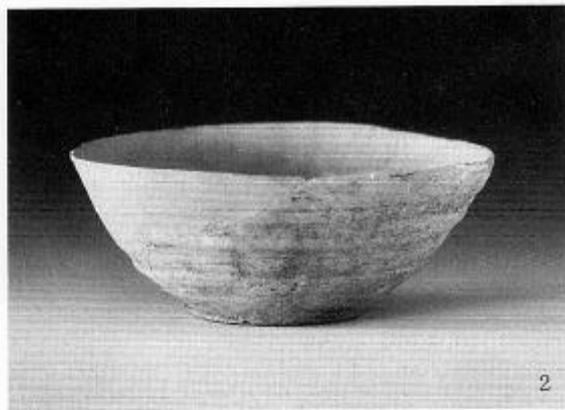
1 : SI03 2 : SI05 3 : SI08 4 : SI09 5 : SI11 6 ~ 8 : SI13

図版16 竪穴住居跡出土遺物（土師器・須恵器）



1 : SI13    2~5 : SI15    6~8 : SI19

図版17 竪穴住居跡出土遺物（土師器）



1 : S119 2 : SK20 3 : SK23 4 : 遺構外 5 : S108 6 : S110 7 : S112 8 : S119

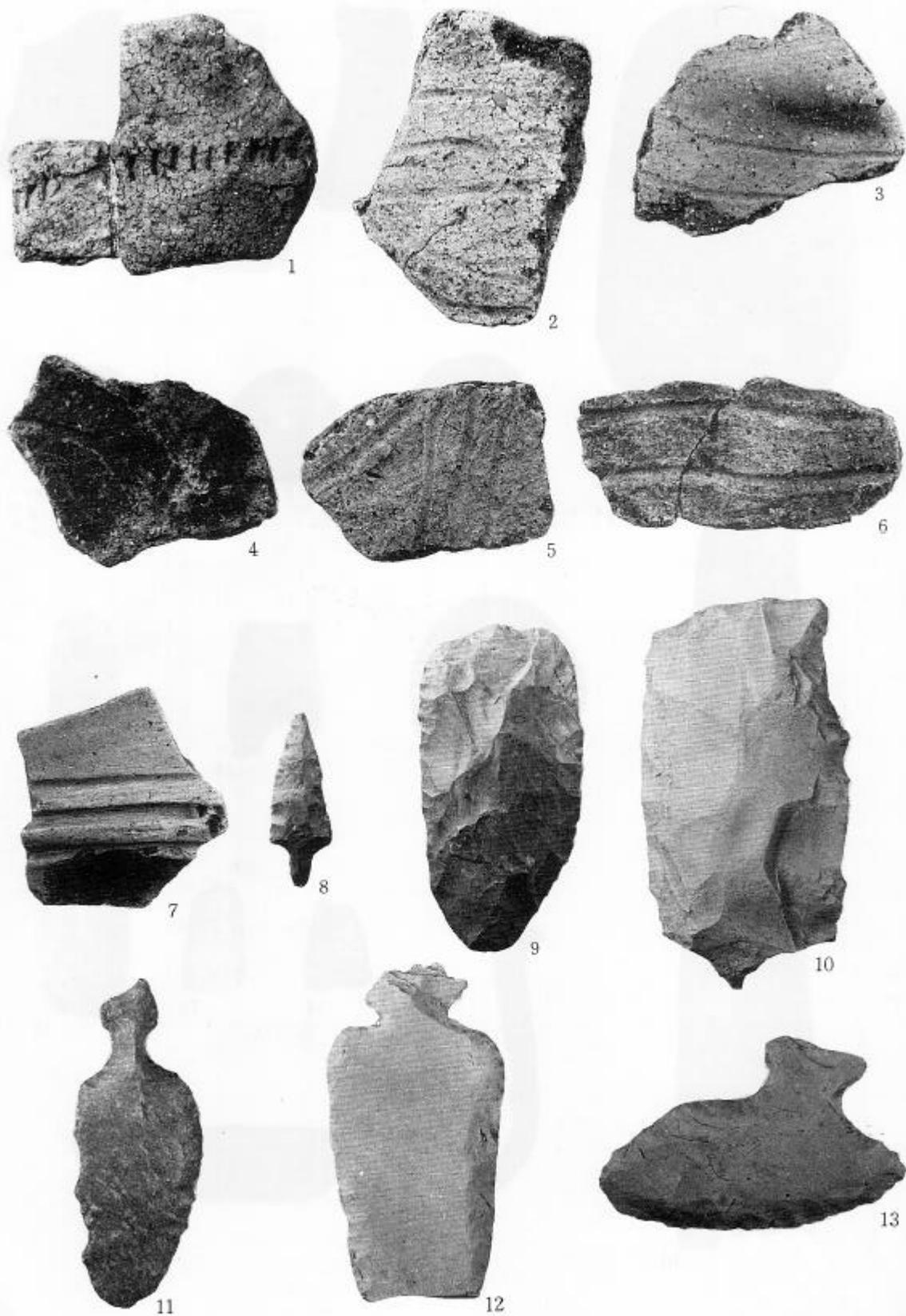
図版18 竪穴住居跡土壙出土遺物・遺構外出土遺物（土師器）



1・2：SI01 6・7：SI02 9：SI04 10：SI08 11：SI15

12：SI05 13～15：SI19 3～5・8・16～18：遺構外

図版19 竪穴住居跡出土遺物・遺構外出土遺物（石器・石製品・土製品・鉄製品）



図版20 遺構外出土遺物（土器・石器）